四組住吉の曲

一天下泰平長久に、治まる御代の松風、雛鶴は千とせふる　谷の流れに龜遊ぶ。
一人しれぬ契りは淺からぬもの、思ひ包むとすれど、紫の色に出づるぞはかなき。
一はかなくも、隈なき月をいかで恨みし、とにかくに我が袖は、たえぬ涙の夕暮。
一花の宴の夕暮、朧月夜に引く袖は、さだかならぬ契りこそ、心淺く見えけれ。
一住吉の宮所、かきならす琴の音に、神の惠みに逢ひそめて、渦ぎし昔を語らん。
一秋の山の錦は、龍田姫や織りけん、時雨ふる度ごとに色の增すぞあやしき。

五組朝顏の曲

一うらめしの我が緣や、薄雪の契りか、消えにし人の形見とて、泪ばかりや殘るらん。
一比翼連理のかたらひも、替れば替る世のならひ、さりとては恨むまじ、昔は情ありしを。
一若紫を手に摘み、深き心の色ます、長き契りを結びしも、草のゆかりと知るべし。
一しののめの籬に、露をふくむ朝顏、玉のかづらたをやかに、かゝるや花のおもかげ。
一世々の人の眺めし月を、寔の形見ぞと思へば、思へば涙玉をつらぬく。
一吉野川の花筏、棹さす隙もあらじな、岩波高き山風に四方へちれる花の香。

六組葵の曲

一雪のあしたの嵐は、梢の花の散る風情、名殘惜しきはとにかくに、待ちえし君の歸るさ。
一あさましや我が身は、雲居の雁の夕霧に、おとしめらるゝ思ひをば、いつの世にか忘れん。
一まどろめば、面影をしげ〳〵と、みじか夜に時鳥おとづれて、初音に夢ぞさめける。

一眺むれば、いとどだに、戀しき人の戀しきに、曇らばくもれ秋の夜の、月に恨みはあらじな。
一峰の嵐の通ふか、谷の水の流れか、寢覺に聞きし松風は、琴の音にたがはじ。
一葵の上のときめきは、加茂の物見の折から車爭ひ、つれなきは、深き恨みなるべし。

七組武藏野の曲

一雲の上の眺めは、有りし昔にかはらねど、みし玉だれの內ぞたゞ、懷かしや床しや。
一面白のさみだれ、花橘の匂ひより、時鳥おとづれて、短夜なれどねられぬ。
一中々に、初めより馴れずば物を思はじ、忘れは草の名にあれど、忍ぶは人の面かげ。
一思ひ餘りせきかねて、うらめし夜の涙は、床すさまじや獨りたゞ、枕に戀の知らるゝ。
一武藏野に行き暮れて、月を眺めに草枕、戀しき人を夢に見て、うたゝ寢に袖しぼる。
一軒をめぐる點滴、琴の音にたぐへて、七ねんがよるの雨、曾てしらぬ夢の世。

八組てがひの曲

一數ならぬ身にも唯、思ひもなくてあれかし、人なみ〳〵の薄衣、袖の泪ぞ悲しき。
一あこがれて、思ひ寢の枕に、交はす面かげ、それかとて語らぬと思へば、夢ぞさめける。
一しら雪の深雪の積る、年は降るともろともに、かくあさましや、寢亂れ髮のかほばせ。
一引く人は、それ〳〵あまた有りともつま琴に、もとの心かはらずば、琴柱に落ちよ秋風。
一柏木の右衞門は、鞠をとんと蹴たれば、鞠は枝にとまりけり、櫻ははらりほろりと。
一さりとてはつれなき、君が袂かあやにくに、靡かぬは手がひの虎の引き綱。

九組くひなの曲

一桐壺の更衣の、比翼連理の契りは、定めなき世のならひとて、夢のあひだぞ悲しき。

一短夜に夢さめて、面影を夏蟲の、身よりあまる思ひをば、いかで人に知らせん。

一秋の夜のふけゆき、月は西にかたむく、松風や浪の音鹿の聲ぞ淋しき。

一道しるべせしこぎみの中立にひかれて、行方まよふ空蟬の、きぬのかをりぞ床しき。

一たぞや今宵更け方に、芝の戸ほそを叩くは、尾上おろしの音づれか、さては水雞のこゑ〳〵。

一青柳の片糸によりてなけや鶯、うぐひすの縫ふてふ笠も、梅がえの花笠。

十組須磨の曲

一須磨といふも浦の名、明石といふも浦の名、更級の月ともに、詠めていざや遊ばん。

一春によせし心も、いつしか秋に移るは、黒き赤きのませの内に、よしある花のいろ〳〵。

一きり〳〵す、よすがら何を恨みすだくぞ、我も思ひに耐へかねて、いとど心の亂るゝに。

一なか〳〵に人をば恨むまじ、うらみじとにかくに、數ならぬうき身の程ぞ悲しき。

一三五夜中の新月、くまなきぞ面白き、千里のほかの人までも、さぞや眺めあかさん。

一深更に月冴え、車の音のきこゆるは、五條あたりのあばら屋に、夕顔をしるべに。

鞠つき歌

一向ひ通るは甚太ぢやないか、鐵砲かついで小脇指ゑさいて、どこへ御座ると問うたれば、雉子のお山へ雉子打ちに、雉子はけん〳〵ほろゝ打ち、よつて御茶參れお煙草參れ、お茶も煙草ものぞみぢやないが、是の娘にちよつと惚れた、晩に參ろがどち枕、東枕に窓あけて窓はきり窓戸はあり戸、七ッ下り〳〵に、そろり〳〵と手をやれば、爰はどこ〳〵爰は膝さら、爰は内股爰は情のかけ所、情かけての其の後に、親に三貫子に五貫、ましてお婆にや四十五貫、四十五貫の錢金で、高い豆かうて何にしよ、安い米買て舟に積み、船は白銀艫はこがね、綾や錦を帆にかけて、あすはのぼろぞつんつくつの津の國へ〳〵。

盆をどり歌品々

一盆々々にをどらぬ者は、牛の生れか燒蛤か、乞食小女薦かおそろしや〳〵。

一千松樣へをどりをかける、出て請取りやれおまん樣〳〵。

一眞丸御座れ〳〵、十五夜月の輪のごとく〳〵。

一もうはや歸ろ、いざさら歸ろ、小雨の降るにいざかへろ〳〵。

一盆々々も今日明日ばかり、あさつてはよめのしをれ草〳〵。

弄齋片撥昔ぶし品々

一山の端に　住めば浮世に　思ひのますに　月と入ろやれ　山の端に。

一しだれ小柳　亂れて見せそ　つれて心の　羨まるゝに

一こがれ〳〵て　露とも消えば　跡はとにかく　君頼む

一蜑の釣船身はこがるれど　かひもなき世の浦にすむ。

一戀をはじめた　人うらめしや　今の我が身の　つらきゆゑ

一頼みかけ置く　結ぶの神の　ちかひかはるな　いにしへに。

一神や佛を　恨むは輪廻　過去の約束　ぜひもなや。

一迚も緣ない　中にてあらば　などやはじめの　つらかるぬ〳〵。

一思ふまいもの　心をつくし　よそに心の　ある樣を。

一月のとひ來る　其の夜な〳〵は　思ひやられて　袖しぼる。

一出づる月日の　短かの命　絶えぬ思ひの　うらめしや。

一思ひ出す夜は　枕とかたろ　枕もものゆへ　こがるゝに

一はなれ〳〵の　あの雲見れば　あすの別れも　あのご

とく。

一君はくれなる　我綟衣（もちころも）　八重につゝめど　色に出る。

昔小六ぶし

一小六ついたる竹の杖、本は尺八中が笛、末（うら）はしほゝん　ほんなあよをほん　筆の軸竹小六。

昔ほそり

一忍ぶ細道に、松と胡桃を植ゑまい、待てる其の身は、くるみでもなし。

櫻川のふし

一ぢしゆの櫻は、散るか散らぬか見たかの、散るやら散らぬやら、嵐こそ知れ。

はやり長歌

一今の世の、おためをいひてはりまはる、伊丹や曾根が伊豆ならば、かみ下ともにうるほひて、末繁昌わざはひも、恩に隨ひあるまじや、阿部か伊井なしよかるらん、割れて退きたる能登釜を、本の竈（かまど）に鑄直して多くの米をもりあけて、大和の國を加増して、讃岐國座をさしかへん、備後表に修理をし、螺貝よりも音高き、石谷等をめしおろし、町の仕置をさせんより、惡臣どもに相添へて、天下の仕置させよかし、しかも人民の貪つて利を持つ公事沙汰は、石谷なくていかゞせん、世間の儒者の見せしめに、しつてしらざる道春を、空船（うつほぶね）に遠流して、一文錢が集まりて、惡錢等をゑり出だし、大和言葉をいひかけて、天下の仕置するならば、君長久になるべきに、いやしき下の心にも、劣りはてたる臣下ども、今の惡臣其の儘に、あらためなくてあるならば、賞罰いかゞ人罰の、其の怨念や報いきて、如何なる天魔出で來り、天下を奪ふ其の時は、富士の山程あつめ置くこがね白がね何ならず、利錢商ひ分別が、おためだてして人民を、飢饉餓死等なすものを、改めかへん仕置せよ、其の惡臣は主君（しゅくん）の、ためにはならで怨（うらみ）ぞかし、忠臣等と云ふ事は、天下安穩、政民の苦しみなきやうに、するこそ君のおためなれ、天下安穩ある時は、あめが下の錢金は、皆將軍のものぞかし、上もよかれよ下よかれ、下がよければ上もよし、上のゆがみを下として、直さん事は愚かなれ、さはありながら民よりも、上を養ふ道なれや、十に一ッも誠あれ。

さよの中山長歌

一我等が以前若い時、さよの中山通るとて、孕みし女薗に行逢うて、一夜なびけと手を引けば、一夜なびくはやすけれど、我等も二世に夫持ちて、からかほがほのにくしみに、刀試しに仕り、刀の刃から子が生れ、そこへ和尚樣立寄りて、さよの清水でとり上げて、衣の裾へかいくるみ、門前人に預け置く、門前人のやさしきは、あそこや爰のもらひ乳で、十三迄も育て置き、明くる十四の春の比、生れぬ前の父ぢややら、枕神にもお立ちある、親の敵が取りたくば、京で一番とぎや樣、一年とぎして二年目に、どこのいづくの人ぢややら、刀とげとても御座る、刀はよいが中缺けた、何をためして中かけた、皆も御存じ御座らうが、我等が以前若い折、さよの中山通るとて、はらみし女薗に行逢うて、一夜なびけと手を取れば、一夜なびくは易けれど我も二世に夫持ちて、からかほがほのにくしみに、刀試しに仕り、其の時刀の中缺けた、といで下されとぎや樣、といでおましよは安けれど、五日三日に出來ましよか、五日三日によも出來じ、三十日（サジフニチ）過ぎて取り御ざれ、三十日過ぎて取りにきて、我等が以前言（ゆ）た事を耳に能々聞附けて、親の敵とある程に、三寸やるまいのがすまい、思ふ存分（ぞんぶん）に敵とり、親の御墓（おん）へ參りては、香をもりては花を立て、是で浮かみやれ親樣さよいよゑい。

なげぶし品々

一こんど御座らば　持てきてたもれ　伊豆のお山の　栁（ヤナギ）の葉を　お山のないづの　伊豆のお山の　なぎのはを　一染めてくやしき　にせ紫や　本の白地が　ましぢやも

の　しら地がなもとの　本の白地が　ましぢやもの。
一聲はすれども　姿は見えぬ　君は深野の　きり〴〵す
深野のな君は　君は深野の　きり〴〵す。
一あはれなる哉　梅若丸は　しらぬ東に　隅田川　東に
なしらぬ　しらぬ東に　角田川。

しな物の歌

一夕べの〳〵　しな者は　今宵はどこが　お泊りぢや
播磨の國の　書寫むしや　寺のおつきやが　お泊りぢ
や。

やよやぶし

一昔は松の葉にさへ　四五百人も寢たが　今は御簡略で
〳〵　やよやうゝ只ひとり。

はやり物の歌

一はやり物は何々ぞ　弘徽殿十二段　あふ〳〵新田鑓鉋
篦棒〳〵。

さんや源五兵衛ぶし品々

一源五兵衛どこへ行く　さかひ町のまちへ　高い土手から　高い棧敷か
ら　樂屋を見れば　役者かはいや　骨折ぢやる源五兵
衛。
一源五兵衛どこ行く　さんやの町へ　高い土手から　田
圃を見れば　多い買手が　打連れ立ちて　布引いてる
源五兵衛。
一源五兵衛弟は　さんちやの町へ　高い二階から　かし
ばた見れば　けんどんかはいや　身をさらする源五兵
衛。
一源五兵衛おてきに　くぜつが出來て　遣手揚屋は　お
ろかな事よ　いつもかはらぬ　つなきとてれと　あの
や源五兵衛は　おふりやるる源五兵衛。
一源五兵衛おてきが　道中見れば　黄無垢白むく　緋紗
綾の小袖　紬小袖を　かぶろに持たせ　揚屋座敷で
小歌をやりやるる源五兵衛。
一源五兵衛山谷へ　伊達していきやる　金鍔大小　ぴろ
どの袴　紬縮綿帕なんぞ　土手やたんほは　投節やり
てぬめるる源五兵衛。
一源五兵衛揚屋で　淨瑠璃語る　又もあるまい　淨瑠璃
御前　十二段る源五兵衛。
一源五兵衛おてきの　伊達帶見れば　幅が二尺に　長さ
が三尋（みひろ）　中は眞紅の八ッ打ちでる源五兵衛。
一源五兵衛つけたる　定紋見れば　花は吉野よ　紅葉は
高尾　松は唐崎　霞は外山　替りあるまい　我が小袖
る源五兵衛。

替り源五衆ぶし品々

一新すどこへ行く　東（アヅマ）の方へ　高尾山から　吉野山見れ
ば　外山勝山　かく山唐崎　志賀の夕霧〳〵。
一まれに來るよの　さしある宵は　つらき思ひは　度か
さなれど　誰も人目の　しゆ〳〵なれば　ふえるつら
さを　神ぞ底から忘るゝ〳〵。
一春は吉野（山野（朱書））よ　にほひは花野　さはべすゞしき　八橋か
をる　高尾外山に　薄雲見れば　雪のはだへに　とむ
るは初音　對馬の伽羅の香　袖の香。
一更（サンシュ）けてもどりに（朱書）　買手のお手　ひくは名殘の　別れの
辻に　さらばまたやと　賴みはおけど　袖の泪が　は
ら〳〵　おくられくさのきぬ〴〵。
一袖の泪の　かこつけ松よ　雪のはだへに　そひ寢のつ
つじ　歸るあしたの　名殘のかりがね　しみて逢ふよ
の　風をもいとふ　引合はせの屏風〳〵。
一幾世（丹波（朱書））かはらぬ　かこつけ松も　春は一入　色香もまさ
る　夏はすゞしき　そひ寢のつゝじ　秋は逢ふよの
歸るさの　名殘のかりがね　冬は逢ふ夜の　風をもい
とふ　引合はせの屏風〳〵。

のほゝんぶし品々

一君は川向ひ我（アヅマ）は川前よ〳〵立てならべど〳〵みたばか
り〳〵。
一君は深山のあの遲櫻〳〵我はさきだつ〳〵しば櫻〳〵
一君の姿は眞立花よ〳〵馴れてそひたや〳〵下草に〳〵
一君はみやまの降積む雪よ〳〵我は谷間の〳〵薄氷〳〵

一花にたん尺たが又つけた〳〵枝を手折れば〳〵花が散る〳〵。

一小紫とは誰が名を附けた〳〵色にそみては〳〵うへがない〳〵。

一あのやおてきを譬へて見れば〳〵櫻花をば柳に咲かせ〳〵梅の匂ひの〳〵ある君ぢや〳〵。

一梅の梢に鳴く鶯を〳〵さすなさはるな〳〵やさしきに〳〵。

一何とつゝめどいろには出でて〳〵顔に紅葉が〳〵散りかゝる〳〵。

一戀の道には浮名がたつに〳〵ひらにおきやれの〳〵清玄坊〳〵。

一君は他國へ身は武藏野に〳〵こまる心を〳〵思ひやれ〳〵。

一君と我とは川瀨の螢〳〵人につゝめど〳〵もえ出づる〳〵。

一戀ひて辛氣や身はかげろふの〳〵いつかめぐりて〳〵君にあを〳〵。

一色にださねど我が身の戀は〳〵袖の泪で〳〵人が知る〳〵。

一咲いた櫻をなぜ眺めぬぞ〳〵春のしるべに〳〵咲く花を〳〵。

一様と我とは二葉の松よ〳〵千代をふるとも〳〵かはらねば〳〵。

一向ひ通りやるお若衆様に〳〵餘り言(葉)のかけやうがなさに〳〵紙が落ちます〳〵鼻紙が〳〵。

一行けば極樂歸れば地獄〳〵からだやつしの〳〵吉原よ〳〵。

一ながい刀もさし様が御座る〳〵後高にて〳〵前下り〳〵。

一てきと見るなら白癩切るき〳〵てきぢやないもの〳〵君ぢやもの〳〵。

一てきに別れて土手さを來れば〳〵なだがこぼれて〳〵うれひづら。

一でつち持て來い摺鉢笠を〳〵こゝさかぶせろ〳〵獄門へ〳〵。

一やいさ同類いさおすまいか〳〵藤屋太郎吉が〳〵やかはねへ〳〵。(木ノヤ)

一やいさお閻魔助けてたもれ是さお閻魔たすけてたもれ迎もやりやらば〳〵吉原へ〳〵。

さわぎ歌

一おもふ湊にしつちやがさ　面舵取舵ほんとたかくもおせ　さゝ〳〵おほさゝ〳〵　それもこつちで合點ぢやこのきうもひとつしてくれ　きういはうてさんときう〳〵の　きうこの船漕寄せて　忍びどんふり笠で籬迄は來たれど　見つけられてはどうもなりませぬ　了簡至極もないこんだ。

一すい〳〵いまござは　見付けよりから尻馬引寄せ　しやんふらりしとうまゝかいと打乘りて　大門口へぬつと入り　茶屋の二階へくわら〳〵くわ　くわら〳〵くわつとかつけあがりて　石州流の扇を拔き　なかのま三間はらりつと開いて　揚屋歸りの遊女たちをひゝんかり　くる〳〵りつと招かれけるんな　五つ時分に籬まで來たれば　見附けられてはどうもなりませぬ　してゝん〳〵馬子太郎　さらばやおつとせい　了簡至極もないこんだ。

京はやりぶし

一花見車をひきやるはよいが　醉うたふりして手をとるな　やれ手を取るな　御所のぢよろしゆの手ゑ取るな

浮世はやりいそべ殿ぶし

一きつねくわい〳〵こん〳〵殺して　人をまよはすたばこぐさ　ふうを能くしてぬめてころんで　せうはがたばこを召しませうか　いや〳〵橘屋がよかろか　見よか見まいか勘三が芝居　見たうて這入りたうて　ぞつく〳〵〳〵するなら這入りやの　一ぷくしてから入りませう　つるてん〳〵〳〵　拍子乘りたる太夫がふりまさつめでたいさわりぢや。

かはりせうかなぶし

一破れ藥鑵に番茶を入れて　缺けた茶碗にほのない茶筅
莚屏風にむぎわら枕　ふすま蒲團にへりなし蓙で　來
るか〳〵と待つ夜は來いで　びんぼ男や喉すばりしよ
かみの〳〵よい是々しよかみのそつこでうけだせ三
百文。

のつちりふぐじるぶし

一親はのつちりふぐじる　子はのつちりふぐじる〳〵
親はのつちりふぐじる　子はのつちりふぐじる　あほ
な子なふぐじる　のつちりふぐじる〳〵　のんほふぐ
じる〳〵　豆腐がよいか酢がよいちん〳〵ばかすてゝ
ん　摺つたり剝けたり禿けたり〳〵　そりや扨てな善
い汁めされたそりや扨てよい　是新町のほうしゆんか
りこ者がおもはくぢや　いさみての長市坊長市お聞き
やれおかたも聞きやれ　是の姫がヤヤ氣がそれた長市
坊　なるもならぬも目もとで知れる　今のめもとは
ヤヤなる目もと　てうしこい。

谷中うはきぶし

一谷中の削り廻し敎へにまかせて南無妙法蓮華經うわ
〳〵〳〵〳〵う佛に成るともくわんくわつ佛このすき
申したさ夜ねぶつ申し飲みたくならめか無間のかまさ
落つる地獄の釜ほこ玉子の肴で飲めへせおさへたさは
つたおつときたさ発せ五左衞門たかへ長左衞門おひか
け中の盃醉うたら大事かやあれ君のつけさし飲めさお
待ちや肴をしよ。

御門徒與五平ぶし

一お與五平かおきみたんだ〳〵おすのこおぎみちり〳〵
おかますのおふくらたおちみたらり〳〵おあほとこお
ふんでおほとこおけべいでおほこちよんおともしびし
や　おふやらの　〳〵　おゝおうは　おふやらの　お
そんれはゑい　おふやらの　おそんれはゑい。

大阪からすみぶし

一大坂天滿でんつがほうかてんねりとうせんせんかしす
み合近江與茂四郎引か子孫與三郎かひよつとにぎりた
いた下おりうり〳〵同じくならばかはしやませ〳〵。

吉原しよくりしよぶし品々

一とてもかなはぬ浮世としらば　とてもえならぬ戀路と
しらば　輕くおこもの戀の道　しよくりしよ所々くり
しよあいよの。
一草の庵のむぐらの宿に　〳〵　いつかおてきと手枕な
して　思ふ言の葉語りたや　しよくりしよ所々くりし
よあいよの。
一生薑畑に茗荷を植ゑて　ことしや子をとるをのことる
しよくりしよ所々くりしよあいよの。
一逢ふは別れとかねては知れど　あふはわかれの初めと
しれど　忍ぶ泪は袖しほる　しよくりしよ所々くりし
よあいよの。
一神や佛に祈るはおきやれ　〳〵　過去の因果は是非も
なや　しよくりしよ所々くりしよあいよの。

一つらき吾妻のはてしに我は　〳〵　角田川原の流れす
る　しよくりしよ所々くりしよあいよの。
一君に思ひは信濃路淺間　〳〵　胸にたく火は絶えやら
ぬ　しよくりしよ所々くりしよあいよの。
一忍ぶ其の夜の時雨は嬉し　〳〵　濡れてくるまの音も
せず　しよくりしよ所々くりしよあいよの。
一そちとこちとは二世迄そはうと　言ひてものして起請
迄かいて　今はきしやうの音もせず　しよくりしよ所
所くりしよあいよの
一そなた思へば雨降る夜半も　そなた思へば風吹く夜半
も　たどり來るぞよなかの道　しよくりしよ所々くり
しよあいよの。

△淋敷座之慰終

第十三　淋敷座之慰

右此双紙者、好二今様一人翫レ之畢、且雖二我不レ好レ此、至二老後一、而昔懐敷節爲レ可レ披二見之一、斯集レ册訖。

延寶四丙辰八月二日

（一六二頁「はやり長歌」の上欄に左の朱書頭註あり。

慶安四忠彌事
　口　傳
慶長中比門や櫓ト云歌ハヤル
　口　傳
寛永中比天ト落シ水ト云歌ハヤル
　口　傳
永末所イト云事ハヤル　飢饉
　口　傳
慶安末柴垣ハヤル
　口　傳

一六五頁「替り源五衆ぶし品々」の中「袖の泪の」歌の上欄に左の頭註あり。

原四季ノ名物

カコツケ松
高尾ノ墓
ソヒネノツヽジ
ワカレノ辻
夕殘　カリガネ
引合　屏風也
　口　傳）

淋敷座之慰　終

第十四　長歌古今集

長歌古今集

凡そ和歌のみちは神代より初まり、大きにやはらぐと書いて大和歌とよめり。さの如く歌のさまはすぐなる道をあらはし、玉津島の明神を歌の神とさだめ、住吉の御神を和歌のみなかみと云へり。その外歌よむ人は數多し。又今はよむ事を略して大かた歌はうたへどよむ人無し。しかあらば、我れ慮外ながら、玉津島の跡を垂れてはやり歌を撰むべしと、あづま塚の邊に出現して、今かく業平の朝臣昔男と名のり侍る。此の比歌のさま下卑らしければ、色を吟じて在原の昔男は關東初冠して、ならぬ京春日の里に角田川の都鳥となんいひ合へけり。かゝるあづまのはてしなく、言葉の花やからはらに嘘つきいだす武藏野の草の種よりも猶多からん。如此はやり歌は世のさかんにつき諸人の心より出づるとなり。歌たえてなかりせば、鶯の春を忘れ、水にすむ蛙は底にひれ伏し、衆道を響かす蟬の聲、鳴くこほろぎきりぐすも草の根に居て、蚯蚓の歌まで土の下に唱歌を絶えん。我れあざしの松原に鏡が池のもとに心を澄まし、筑紫のはてし迄かたみとなるはすみ筆のあとなるべし。是をつゞめてうきを忘るゝ友となすなり。

西國道行

思ひ立ちぬる旅衣、我をばとむな關戸のゐん、八幡にいのりかけおびの、結ぶちぎりの末はまた、何となり行くみな瀨川、山もと遠くながむれば、塵のうき世の芥川、馴れし都を立ち出でて、いづくにゐなの小笹原、竹の一よにあらねども、かりそめふしのこやの池、君が命もいくたなる、小野の草むら露はらひ、かりもつ袖も布引の、瀧の白絲くるゝと、和田の岬の松原や、須磨の夜あらし烈しくて、かたぶく月の明石潟、賑ふ民のすみかまで、眺め過ぎさせ給ひけり。

美人揃長うた

八千代とも、君が代長し子の日の松、綠の色も數そへて岸の柳にいと映えて、縫ふてふ梅の花笠を、隱れがとなす鶯の、去年の古聲變らねど、忍びくに鳴く聲の、人に語るな岩つゝじ、いはずとも、思ひは色に出でぬべし、藤の裏葉に、ねよけに見ゆる若草の、人や結ばん我や寢ん、ねむれる姿は海棠の、花の下紐解きぬべし、見渡せば、嵯峨や芹生八瀨の里、小原や高尾愛宕さん、太秦北野紀の森、吉野初瀨のかけまでも、都は春の錦なり、花さそふ山嵐、あたら櫻の科は散るぞうらみ有り、散らばいざくに、今はうらむ科はあらじと、手折り

て君に奉る。

、身のうきわざ道行

惜しまじな、命は露の假の宿、たち出でそめて我が袖は、露か涙かしつほと濡れて、流るゝ〳〵思ひ川、うき世は夢よ霜夜にかゝる、我は音に鳴くいよきりぐ〳〵す、思ふてきを切りはたりてう、蟲の鳴く音もたのもしや、行くとはすれど女みち、山又山や谷峰を、たどり〳〵と葛をとり、木の根を傳ひよろ〳〵と、行けば程なく今ははや、濱松がえにぞ着きにけり。

はうた　ながうた次左衛門

今宵來て、まだ肌なれぬ此の小袖、垢つかぬ間にあらはれやせん、よしあらはるゝその時は、今宵ばかりか後世かけて契りし仲よ、捨てん命はいとはぬ我ぢやよ、お笑ひあるな名の立つも如何がぢや、あゝたゞ辛氣や氣の毒や、言葉殘りてとりも鳴く、聲すみて諸共に、あかぬ別れの鶏は憂や。

、道成寺道行

つくりし罪も消えぬべき、鐘の供養に參らんと、室の郡を立出でて、願ひもみつのお山に、もしも夏にやあるらんと、思ひまはせば小車の、やる方もなき我が思ひ、我にうかりし人々に、忽ちむくいを見すべきと、迷ひの雲にかくされて、月は程なく入りしほの、煙みちくる小松原、急ぐ心かまだくれぬ、日高の寺にぞ着きにける。

金澤八けい

さて此の浦の有様は、言葉のしほのさし引きに、千度百度かはり行く、かなをかくとてすて（ホノマヽ）、松の落葉の散り失せず、かくとも盡きじよもつきじ、辨才天の御まへより、汀の船に打ち乘りて、野島が崎の潮干潟、おり居てあさる雁金の、己が友呼び交はす聲、平沙の落雁これかとや、時ならねども夏島の網干す夕日影、是ぞ漁村の夕照と、見る目もしけき浦のなみ〳〵。

一　吉原名寄きぶね

薄雲に、あれたる敵はそゝるとも、引く手になびくあだ人に、積る思ひをしら玉や、花のよる〳〵馴染めて、通ひ馴れつゝにしを潟、小崎に近きやしほ山、高雄の峰の木の間より、月も朧と見も若狹　うき世は憂しの時をかや、かをる利生の末清よく、玉川越えて眺むれば、あとに三浦の家に住む、あゝ君ならば我も亦、いちさが方へ伴ひて、積る思はく語らんと、往きてはかへりかへりては、又、千壽藤波よるのみち、戀路の闇にくらすや、木ノマヽ文のおらあひ茶屋の前、とゞろ〳〵と打過ぎて、岩尾石州に、もまれ〳〵て今爰に、ひこざが籬に着き給ふ。

うらみながうた　河内通ひ

昔語りとなり平の、比翼連理の妹背の中も、いつの間にかは秋風の、吹くや立田の山越えて、波の寄る〳〵高安に、知る人ありて二道に、忍びて通ひ給ひしに、色には出さで明暮と、三とせがうちの物思ひ、胸のほむらをさ

ますにぞ、提子の水は湯となれど、まださめやらぬ數々の、夫にうらみは有明の、月の入るさもつれなくて、泪ながらも立出でて、そなたの空よと眺むれば、立田の山はすさまじく、惡所のありと聞くものを、とやあらん、かくや渡らせ給ふぞと、思ひつゞけてかくばかり、風吹けば、澳津白波立田山、夜半にや君が獨り行くらんと口ずさむ、その言の葉の情ゆゑ、河内へ通ふをふつとやめ、ふるき妻にぞまみえ給ふ。

かたみのさくら

花をうしと捨つる身の、闇路に迷ふ鞍馬を出、音に鳴き渡る鳴川や、末は逢瀨と聞くからに、同じはちすの蓮臺に、父もろ共に稲荷山、松にも花の藤のなる、七せ川も八瀨渡る、流れ〳〵涼しきは岩清水、けにやうき世のはかなくも、一門のらんけきに宇佐には神もなき物を、何いのゝらん心づくしにと、御示現あるこそうたてけれ、右手は山崎關戸のゐん、けにやまことに父忠度、比は、壽永の秋の比、心の花か蘭菊の、きつね川より引きかへ

し、倭成の家に行き、日比手なれし歌枕、參らせ上げさせ給ひしに、千載集に撰まれ、昔ながらの山櫻、讀人知らずと書かれしを、草の蔭にて父上も、さこそ本意なくおはすらん、あゝ物うやと、書きあつめたる芥川、笹の小笹の一節も、ねられぬまゝにたどり行く、月も宿かるこやの池、しばしと賴む須磨の浦、爰は源氏の住み所、平家のためはよしなしと、歩み過ぎさせ給ひけり。

いのちのあらそひ

母うへ泪と諸共に、若が枕に立ちよりて、後れの髪を搔き撫でて、これが此の世の名殘ぞや、子は三界の首桎と今こそ思ひしられたり、まだいとけなき緣兒を、盛りの春をみ育てず、空しくなるこそ悲しけれ。されば敎主の釋迦だにも、涅槃はのがれ給はず、のがるべきにはあらねども、もとより女は罪深し、後の世助け給へやと、心靜かに念佛し、構ひて〳〵亡きあとにて、我を怨むる事勿れ、夫に怨はありそ海の、神や佛も此の子をば、よきに守らせ給へと流涕焦がれて泣き給ふ。落つる泪の下よりも、とても止まらぬ物ゆゑに、輪廻をのこし何かせんと、只一筋に思ひ切り、上なる衣を脱ぎ給ひ、柳のはに懸置き、淵瀨に臨ませ給ひけり。

はやりながうた

あらいたはしや若君は、戀しき人の行末を、尋ね出ださせ給ひける、哀れといふも限りあり、人の情をくみてしる、うき身の旅を志賀の唐崎、靡く松風に立つや煙の尼ケ崎、鹽燒かねども我が袖の、濡れにぞぬるゝ袂かな、君にはいつか粟田口、三條小橋をしどろもどろと、のんさて誠に君故たどる、世を秋風に鳴く虫の、露あぶるかと疑はれ、いとど泪はせきあへず、四方の山々打眺め、行けば程なく今は早や、嵯峨のあたりにこそは着き給ふ。

たゞのり姫道行

姫君あまりの悲しさに、其の儘其處にかつぱと伏し、こはあさましの次第やな、此の塚の下にこそ、父忠度やおはすらん、冥途如何なる旅なれば、行きては再びかへらぬぞ、ひととせ宇治にて捨てられし、姫が尋ねて參りたり、せめて父ぞ姫かとも、言葉を交はし給はれと、しばし消え入り給ひけり。

本貫船道行

蜘蛛の家（木ノマヽ）に、あれたる駒は、繫ぐとも二道かくるあた人に、積る思ひを知らせんと、思ふも濡るゝ袂にも、波のよる〳〵立ち出でて、そなたの神を賴みつゝ、通ひ馴れにし道の末、御室に近き小鹽山、紅の森の木の間行く、月の朧か見も分かぬ、うき世は丑の時參り、神の誓ひの末淸く、加茂川越えて眺むれば、あとにみぞろの池に棲む、あゝ鳥ならば我れも亦、戀ひしき方に訪ひ行きて、今の辛さを知らせんと、行きては歸り歸りては又、詮かたなみのよるの道、戀路の闇に鞍馬川、水のおちあひ浮橋を、とゞろ〳〵と踏み渡り、岩間にせき來る波の音、浪に搖られて今爰に、きぶねの宮にぞ着きにけり。

白拍子善光寺詣

思ひもよらぬ旅の空、都を出でてさゞ波や、志賀の浦船漕がれ行く、末は愛發の山越えて、袖に露散る玉江の橋、かけて末ある越路の旅、思ひやるこそはるかなれ。梢波立つ汐越の、安宅の松の夕けぶり、消えぬうき身の罪をきる、彌陀の劍の砥並山、越路の國の末なれば、いとど都は遠ざかる、境川にも着きにけり。

四國落

七ゑんみやうの明石潟、身を盡しても敵には、いつか逢ふ瀬の波枕、苦を敷寢の夢にだに、忘れもせぬ船のうち跡は霞に距りて、かへり見らるゝ九重や、八重の汐風烈しくて、ゆふべ〳〵の袖の露、かたきをやすくうつみの浦、名を聞くだにもうれしくて、やう〳〵漕がれ行く程に、四國讃岐に着き給ふ。

うたみちゆき

頃しも今は秋の末、尾花がもとに風そよぐ、こほろぎはたおりきりぐ〳〵す、松虫鈴虫轡虫、常に鳴かぬはたるらむし、ましほの聲もかすかにて、行かんとするに、木の根小笹で身をぞ、へす、やう〳〵行けば程もなく、夜はほの〴〵と白河や、一しよの關所に着き給ふ。

○吉原美人揃

八千代とあふよ長かれ橋場の松、買手衆多き辻々に、熊ケ谷笠を引被り、隱れがとしるとんてきの、ゆふべ見しには變らねど、忍び〳〵の其の振を、人に語るな禿ども、言はずとも、姿や人の見知るらん、ふぢえからさき當磐木や、寢よけに見ゆるうら若さ、人や契らん我や寢ん、練れる姿は道中の、第一番といひつべし、見給へや薄雲藻汐に藤波や、和泉や高尾せきしうの、戀ひつこひぢのときつのふり、吉野初瀬の花までも、さんやは春の錦なる、花さそふかせ山や、明石坂田の振體に、恨み有りふらばいや〳〵、ふらばかひてもかひぞなき、かりてもかねは參らせん。

○今川ちりやく道行

召さうなら〳〵何らも人は魚を召せ、彼の在五中將の、三河の澤の八橋にこそえびはすみけへ、河の瀨の夜は鵜船を漕ぎつれて、此の川波にばつと放せば、面白の有樣や其處にも見ゆる篝火に、おどろく魚の鰭ふりて、籠の鯉やのぼるらん、たましま川にあらねども、こはい（木ノマヽ）さばせるせゝらぎの、かだみて魚はよもためじ、散るやら散らぬやら柳の一葉、一葉がくれの小鮒まじりの雜魚召されけへ。

○大場の八郎ためむね

無殘なるかな爲宗は、落つる涙を押止め、弟二人に繩を掛け、敵のかたに引くときは、めくれ心も吳竹の、うき節沈むばかりにて、獨り言こそあはれなる。けにや世の中に、せまじきものは宮仕、弓箭の家に仕へずば、かゝるうきめはよもあらじ、月は隈なく冴ゆれども、涙の雨に道見えず、一足行きて倒れ伏し、又起上がり取直し、二足行きて立ちどまり、如何なる者が生れ來て、兄弟と氣を分けて、かゝるあはれを見するやと、思ひ切れども恩愛の、幾重うき身のまつはりて、ほだしと行くも行かれねば、とある所に倒れ伏し、遣る方なしや破れ車、行く方もなく立ちにける。いたいけや兄弟は、兄を憚る事もなく、下部のやうにことばをかけ、早や〳〵具せよといひければ、爲宗是に力を得、泣く〳〵二人を引具して、敵の館へ着きにけり。

○れんしやうさんや入り

東を見れば敷島や、歌のなかばや三味線の、色にうつろふ立つ聲を、よそのお敵もこがるらん、われも名はいろかのはてどうもしよ、えゝこればかりはよう言うた、衣紋引つつくらうてさんやれ〳〵、南無や大盡やうき丸の御建立、よろづのことはいはんより、あつさま事をとんよ

の、我は山の手のとんてきなるが、騒ぎは何ぢや、彼處を見れば、太夫衆のやどや町にもつれしかば、しん八幡大菩薩、御神體は伽羅もら天王、本地は浮かれ尊者の御再誕、悉皆彌陀か菩薩か、扨てはいつものお連れ達か、後の世かけて變らじと、憂きや辛さの昔を思ひの增鏡、くもらぬものとゆふやつにてよたはあ、よろづ代かけて絶えせぬは、かめいの君の流れかや、見物たはむれ言ふうちに、殆どうちにぞ入りにけり。

○清玄七年の亡魂

去る間、雪の前の御方は、義長の御身の上を思召し、げに痛はしや何事も、皆報いぞと聞くなれば、人のうらみを受けし身の、後の世何となら坂や、扁柏の二道かくる君ゆゑに、我も亦如何なる憂き目に遭ひもやせん、よしそれもいとはじものを露の身の、いづれか風にあはで、さてのこりしよにもあらばこそ、今日は人の身の上明日は我が身の上と思召し、うき世の無常を感じつゝ、そなたの方を打眺め、心をすましておはします。かゝる所にあら不思議や、其の樣けしからぬ風情にて、はつたと睨んで立ちたるは、身の毛もよ立つばかりなり。清玄いよ〳〵腹を立て、如何に義長、汝命助け置き榮華の花を咲かせて、某奈落に落ち、こちの無念さ幾何とか思ふらん、樂しみ盡き悲しみ來たるは今の事、例へ金山鐵壁を雲と等しく築き上げ、鐵銅の網を張り立つとも、嗔恚の猛火をはつと吹掛け、はら〳〵〳〵と踏破り、骨を碎き腦を割り、本望を達すべし、思へば〳〵腹立ちやと、忽ち化したる姿となつて、雪の前を搔い攫み取つて押伏せ、二打ち三打ちてうと打つ、義長御覽じて、さはせさじと飛びかゝり斬拂ひ給ひつゝ、如何に清玄、故もなき女に恨みを言はんより、尋常に勝負をせよ、清玄聞きてから〳〵と打笑ひ、少し時刻はありとても、今宵のうちはすごさじと、歩みよる足音は、ほろ〳〵とどろ〳〵と鳴る雷の、天地に響き凄じや。義長夫婦も心はたけし、追つかけすかさずてうと斬れば、弓手へくゞり馬手へ拔け、かげろふ稻妻水の月かや、姿は見れども手に取られず、思ひもよらぬうしろより、參りさうとむずと組みてうと打つ、打たれてはつとばかりなり。今は地獄にかへるなり、つひには思ひ知らせんものをと、呼ばはる聲もかすかになる、義長虛空をにらみ、打ち漏らしたか口惜しやと、夫婦もろとも手に手を取つて、簾中さして入り給ふ。

今川花見ぐるま

無殘なるかな俊秀は、思ひの外に手を負ひて、女房に打ちかゝり、たどり〳〵と落ちて行く、げに何事も〳〵、定めなき世と言ひながら、思へば口惜しや、假令君こそ君ならずと、一度諫言申しつゝ、世を直さんとおもひしに、思の外に引きかへて、かゝる憂き身となりはてて、死なん命は惜しからねど、佞人世に出でば、我が君の御運の末は如何ならん、心も遠し氣も消えて、弱々となる時は、女房顏に水を注ぎ、御心は何とましますぞ、げにや世の中に神や佛はましまさぬか、うらめしのうき世やと縋りつきてぞ泣き給ふ。今川心を取直し、さな申しそ女房よ、天は正直の頭に宿り誠を照す、たとへ命は終るとも、魄は此の世にとゞまつて、本望を達すべき女房と心は高砂の〳〵松の緣とはやれども、次第〳〵に弱りはて、歩みかねたる風情なり。其の時竹を杖につき、たぢ〳〵と立ちとまり、社近き森かげに、倒れ伏してぞ泣き給ふ。

定め由なしあた言の葉の只和歌の道は猛き心を和げ、詠むも歌、うたふも歌なり。是皆三十一字を碎き、五文字七文字と續くを以て長歌とは言へり。さの如くはやり長歌も、五言七言にわりて五音の句續きを吟味もし、餘らざるを以て能きうたとほめり。歌の文字餘るにより凡夫是をさへづらず、覺えて憂きを忘れん便りには此の歌の道に如くはなし。さの如く貧の盜みに繼の歌とかやいへる如く、戀ははかなく、あぢきなく、世はうらめしくまなるまじ、君は懷しく憎かるべし、泪は嬉しきにも憂

きにも先立ち、悲しきはあかぬ別れ、かなはぬ思ひ、よろこばしきは心の儘なるべし。只うき世のはやり歌も、神祇釋教戀無常此の五つを長歌古今集と撰み、端歌を集めて小うた萬葉集となせり。たづねて若木のはな歌となし給へかし。

天和二年
正月　日　　わしや新板

長歌古今集　終

第十五　糸竹初心集

糸竹初心集　上巻

糸竹初心集序

世はかぎりなし、事は盡きせずとは、誰れか言ひけんこれ誠也。まことの道は天の道也。これをまことにするは人の道なりとは、むかし聖の詞也。此の誠、物と我とになきにはあらず。されども知られずしらず、年をつみ、日をかさねて、頭の雪びんの霜のみ、色をあらそふ事、人みなおなじ。こゝに中村宗三といふものあり。幼より目しひて色をみず、瓶をわるよはひより、理にさとく、耳を以て目とする事、人にすぐれたり。つく杖の土木水石に當る音を手にえて心に得る。しかしより音を聞きて理をしるべき事のあらんを思ひて、琵琶、琴、さみせんに心をつくせり。或時は大森宗君（薫）が一節切の調子音律にくはしき事を聞きて、強て是を學び、寢食を忘れて漸く師に近し。されば友遠方より來りて、又學ぶものあり。かれに對して書付くるものをみれば、予が眼をうらむる心有りて、徒に書のはしに記すものなり。

抑此の書たる事は、一節切の尺八并に、琴三味線ならはずして吹きおほえ、引き覺ゆる道の書なり。然りとはいへども少しも心得たる人の、用ゆるわざにはあらず。曾てしらざる人のために、若やと記すものなり。しかし又さらになるまじき道にもあらず。書の趣をよく考へ、聲歌をそらに覺えなば、少しはなどかならざるべき。若是に調練せば、此の心を便りとし、いかなる事をも吹出し、引きいだすべきものなり。よく〳〵心をとむべし。

糸竹初心集目錄

一當流一節切之事　付　虛無尺八之事
一一節切尺八切樣之事　并　笙篳篥笛の切樣之事
一一節切指遣同證歌之事　并　吹樣之事
一當流琴之事　并　糸調子合樣之事
一ことぢ立ならべ樣之事、同引樣之事
一當流三味線之事　付　胡弓之事　并　琵琶之事
一三味線引習ひ樣之事
一同糸合習ひ樣之事
一三味線證歌之事
一十二調子聞ならひやうの事

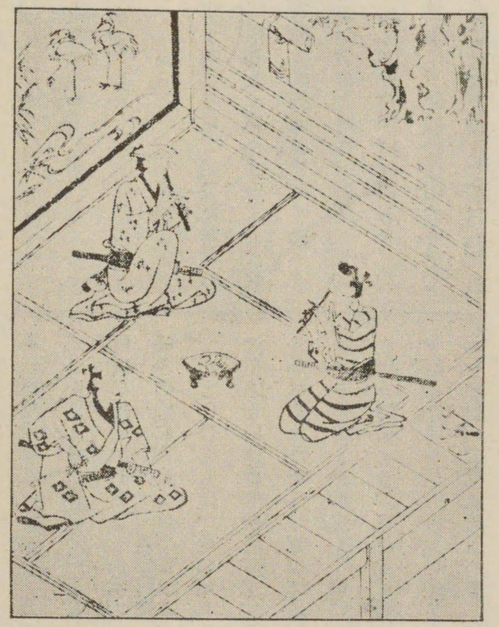
▲先一節切尺八は、其の濫觴まち〳〵にて、さだかならず、そのかみ異人有りて、宗佐老人に傳へたるよし。代代いひ傳へたり。然しより宗佐は高瀨備前守につたへ、備前守は三井寺の日光院に傳へ、日光院は安田城長に傳へ、城長は大森宗薫に傳へてより、世にひろまり、文祿慶長の比最も盛也。此の宗薫は、昔は豫州の大森彦七が末孫、勇士武略の後胤也。織田信長公に仕へて、人に名をしらる。信長公逝去し給ひしより、ひたすら隱遁の身となり、霞をあはれみ露をかなしむ觀念をことゝし、尺八の妙音味はへ、此の道中興の開山となれり。流のすゑをくむ我等まで、遺風をしたふといへども、夢にだにもみず、わづかに其のかた計りうつして、今書にしるし宗薫門弟の外、餘力有りて、音をしらべんとおもふ人の、一筋となさむとおもふのみ也。

▲一虛無僧尺八といふは、長さ一尺八寸に切るゆゑ、尺八といふとぞ。濫觴はたしかに不レ知。そのかみ由良の法燈此の道の祖たるよしいへども、了簡せず、昔よりほろほろの家に用ゆる物と聞えたり。梵士漢士色おししら梵士などいひしもの、此の尺八の執行者と聞えたり。近き比不人といふ虛無僧有りて、ごろといふ事を吹出し、その外れんぼながし、京れんぼ、さむ也井川、よし田などいふさま〳〵の手有レ之、いづれも呂律の調子にあはせたる物とは聞えず、されども我が道にあらざれば、其の深き事をしらず。

▲一一節切の尺八切りやうの事、節を一つこめ、長さ一尺八分に切る故、此の名を附くといふ。節より下は七寸、上は三寸八分に切る也。但し竹のふとぼそによりて、調子違ふ物なれば、極めて寸は定まらず、筒音を、黃鐘の調子に合せたる物也。音色は笙のごとく、ゆびつかひは

篳篥に似たり。歌口のしめ様は、笛同前也。ゆび遣ひ三十二有り。笛は惣の穴七にして、指のあげさげ百二十八有り。調子は十二より外にあらず、上乙有るによりて、しらざる人は調子多き様に聞ゆる也。筒音は盤渉也。ひちりきは穴の數九つ、ゆびのあけさげ五百十二有り。これも調子は十二調子より外に非ず。五調子を專らとす。筒音は平調也。篳は、竹數十七本有り。一つに一調子づゝ切りたるもの也。但し十二調子より外に非ず。のこりは同音也。竹十七は五行十二支をあはせたるもの也。吹きやうの息づかひ内外あり。

▲一一節切吹き様之事、まづ左の手をうへになし、右の手を下になすべし。左の大ゆびにてうらの穴をふさぎ、べにさしゆびにて二の穴をふさぎ、右の人さしゆびにては、三の穴をふさぎ、べにさしゆびにては、四の穴をふさぐ。一の穴と云ふはおもてのふしのそばなるを云ふ。次を二、次は三、下を四といふ。まへにあげたるをうらといふ。第一おぼえずして不レ叶事は、指づかひの名也。



一節切惣の穴の音知る事

ふトハ　惣の穴をふさぎて吹くをいふ。

いトハ　惣の穴をあけてふくをいふ。

やトハ　一二三四をあけ、うらばかりふさぎたるを云ふ。

ちトハ　一をあけ、二三四とうらをふさぎたるを云ふ。

ほトハ　四をあけ、一二三とうらをふさぎたるを云ふ。

うトハ　三四をあけ、一二とうらをふさぎたるを云ふ。

ゑトハ　二三四をあけ、一とうらをふさぎたるを云ふ。

りトハ　二三四とうらをあけ、一ばかりふさぎたるを云ふ。

ひトハ　一とうらをあけ、二三四ふさぎたるを云ふ。

しやうトハ　三四とうらをあけ、一二ふさぎたるを云ふ。

神トハ　四とうらをあけ、一二三ふさぎたるを云ふ。

たトハ　一二四をあけ、三とうらをふさぎたるを云ふ。

るトハ　二四をあけ、一三うらをふさぎたるを云ふ。

以上十三字也

フホウエヤリヒ　上神イタルチ　以上十三

これをよくそらにておぼえざれば、吹習ふ事成りがたし。但し此の内ヤタルこれ三つは二やうに有り。

一や　一三四明け、うらと二ふさぎたるをやと云ふ。

一た　一と三ふさぎ、二と四とうらあけたるをもたと云ふ。

一る　一二四裏をふさぎ、三ばかり明けたるをもると云ふ。

これは双調の調子、盤渉の調子に、このゆびを用ゆる也。

黄鐘平調一越には右のヤタルを吹くべし。よく〳〵心をとめ指遣違へず、空にて覺ゆべし。惣じて尺八は、五調子用ひ候へども、まづ歌は一越の調子を專とする也。

一、一節切證歌

▲やまとをどりのうたふきやう

ホウフホフホウウ　エウエウフホウ、　エヤリ、ヤヒ
よしのゝをやまをゝ。　ゆきかと見いれば、　ゆきではああ
上リヤエ　ヤリエウ　エウホウエヤリエウホフ　チウエ
らでんゝ。　やこれの。　はなあのふゞきよのんゝ。　やあこ
ウフ
れの。（原本、上にかんと振假名あり）

▲いせをどりのうた

ヤリ、ヒリ、ヤリエ　ヤリヤエヤエウ、フホ　エウ、フ
あのきみさまあはあ。　いせのはまあそだあち。　めもとに
ホウヤエヤ　リヤエウヤリ
しほがやれ。　こほれかゝる。

▲あふみをどりのうた

ヤリエヤリヒリ　ヤリエヤリヤエウ　フホウ、エヤリヒ
ふうらいふらい。　ふるつまいとしな。　われふるつまはな
リヤエウエヤエ　ウゝフホウエウ
をゝいとしやれ。　なをいとをしい。

▲すゞ笠ぶし

ヤリ、ヒ上、ヒリヒ上リヤ　ヒゝリヤエヤリヤエウ、ホ
やぶれすゞがさややんやあ。　しめをがきいれていのをゝ
ウフ　ホウ、ヤエヤリヒリヤエヤエ　ウエ、リヤエヤエ
ゑい。　さらにきもせずゑいいさんゝ。　さあややあさんゝ
ウ　エウフホエウ
さ。　すてもをせす。

▲海道くだり

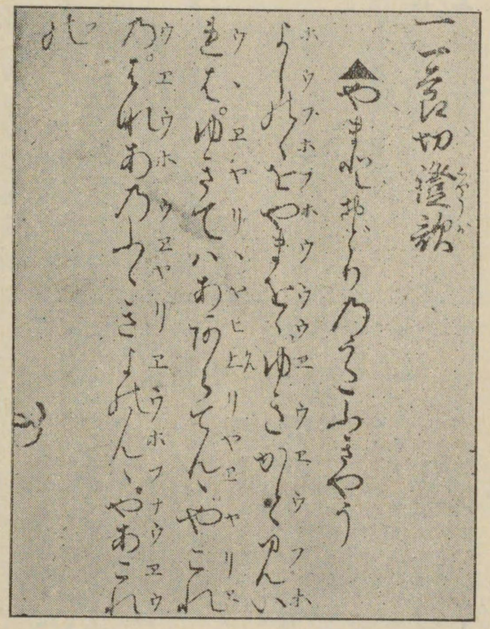
エヽヤリヤエウ、ホウエウ、ホウホフ　ヒ上ヽリヒリ
おもおしいろの。かいどくだりやああ。なにとかたあ
ルエヤヽリヤリエヽエヤリヤエヽウ、ホウエウヽ
るとつうきいせじ。かもがあはあしらかは。うヽちわあ
ホウ　ホフ　ホウエウウホウホフホウエウウホウホフ
たり。いヽ。おもふひとにはあヽあはだぐちとよをヽ。
ヒじゃうリヒリヤハヤエヤエ
しのみやあがはあらやあ。
ヤヽヤリエヽヤリ
じうぜゑんじ。せきやあま
ヤエヽウヽホウエウヽホ
あさんりを。うヽちすうぎ
ウホフヒじゃうリヒリヤヤ
てゑヽ。ひとまつうもをを
エヤエヤヽリヤリ
とにい。つうくうとの。

これより末尺八吹やう同前也

▲平調の調子
よしのヽ山

ウエホウホウエヽヽ　タゑ
よしのヽをやまをヽ。ゆき
タエホウゑヽ　タイヒイ
かとみいれば。ゆきではあ
ヒ上上ヒイタ　イヒタエタエウエダイヒタエウホ　ウエ
ああらでんヽ。やこれのはなあのふゞきよのんヽ。やあ
タエホ
これの。

▲平調伊勢をどり



▲黄鐘よしのヽ山

ヤリゑヤエヤリヽヽ　ヒリヒリゑヤリリ　ホウエヽウエ
よしのヽをやまをヽ。ゆきかとみいれば。ゆきではああ
ヤリエウホウエホウヒリヤリヒイヒリヤエヤリヒ
あらでんヽ。やこれのはなあのふゞきよのんヽ。やあこ
リエ
れの。

▲盤渉よしのヽ山

リヒヤリヤリヒヒヒ　神ヒ神ヒヤリヒヽ　ウエヤヽエヤ
よしのヽをやまをを。ゆきかとみいれば。ゆきにはああ
リヒヤエウヽエヤウホ　ウホフホウエヤウホフヽ　リヒ
あらでんヽ。やこれの。はなあのふゞきよのんヽ。やあ
神ヒヤ
これの。

▲黄鐘いせをどり

ウエヽヤエヽウホ　ウエウホヽチリヤエ　ヤヒリヤエヤ
あのきみさまはあ。いせのはまそだあち。めもとにしほ
リヤエウエウホフウエ
がやれこほれかヽるゑ。

▲盤渉いせをどり

エヤヤリヤヤエウ　エヤエウヽヒイリヤ　リ神ヒリヤリ
あのきみさまはあ。いせのはまそだあち。めもとにしほ
ヒリヤゑヤエウヽエヤ
がやれこほれかヽるゑ。

此の外五調子の手どもあまた候へども、數おほくこまかなる事に仆へば、のせがたし。但し黄鐘のうち、世間によく吹き覺えたる手、少ししるすものなり。

▲初手

ウエフエタエフエ。ヽヽヽヽフエウエ。ヒエフエウエ

ホウルホ

▲返　シ

ウヽタエフエ。タウルホ

此の手黄鐘奉頭の手なるによりて初手といふ呂也。やはらかにかろく吹くべし。

▲安田

タチタチヽ。ウチタエフエ。ヽヽヽヽフエタウタエ。
チタチヽ。イエウエ。ホウルホ

これより末初手の返しを吹く。此の手江州の住、安田と云ふ仁、吹出す手也。

▲手巾

ウエフエタエフエ。ヽヽヽヽフエウエ。チタエフエ、
フウルホ

▲返　初手におなじ

此の手江州大津の住、とぎやの佐右衛門二郎吹出す也。刀をとぎける時、此の手をおもひ出し、手を拭はで、吹きてみるに吹けるうちに手かはきたり。さるによりて手巾といふ。此の手の中にチタエフエ、フウルホと吹くと

イヒヽじゃうヒ、イヒタ　イヒイタイタエエホ　ウタエヽホ
あのきみさまあはあ。いせのはまあそだち。めもとにし
ウエイタ　イヒイタエイヒ
ほがやれ。こほれかヽるゑ。

此の外近江をどり、すけがさ、海道くだり、いづれのうたにても、右之格を以て吹きならふべし。

▲双調のよしのヽ山

エヤウエウエヤヽヽ　タ
よしのヽをやまをヽ。ゆ
ヤタヤウエヤヽフホウ
きかとみいれば。ゆきで
ウホエヤウホフヒじゃうタ
はああらでんヽ。やこれ
ヤタヤエヤタヒじゃうタ
のの。はなあのふゞきよ
ヤエウエヤタヤウ
のんヽ。やあこれの。

右にしるすごとく、双調と盤渉とには、後のやたるゑ吹くべし。

▲双調いせをどり

ホウヽエウヽホウフホ
あのきみさまあはあ。い
ウホフヽヤヤウエヤヽエウホヤエウ　ホウホフヽホ
せのはまあそだち。めもとにしほがやれ。こほれかヽる
ウ
ゑ。

ころ有り。吹きやうおほし。チタエイ、フウルホとも吹く也。これをぬき手巾と云ふ。日光院吹出さるゝ也。又

チタエフエウエホウルホ

▲返

ウ、フエフエタウルホと吹く也。これは、筒手巾と云ふ宗佐老人の手也。

▲后手

ウエフエタエフエ。、、、、、フエタイタチタエフエ。チタチ、タエフエ。、、、、、フエウエ。ヒエフエウエ。ホウルホ

▲返シ　初手におなじ

此の手は文祿の比、後陽成院の皇后に、糸竹の音に長じ給へる有り。此の手を吹きいださせ給ふ。さるによりて后手といふ也。

▲ころび

イエフエタチタエフエウタエフエ。、、、、、フエ、ウ。タエイエ、。フウルホ

▲返　シ

ウ、エルタエフエ。タウルホ

此の手頓阿彌吹出す。返しの一の息にころぶゆび有り。他流には頓ころびとも云ふ也。

▲小兒

イエイフエ、タイ。エウエルホ。フエ、、、、、フエタウタエ。チタチ、エフエウタチ。イエウエ。ホウルホ

▲返　初手におなじ

此の手は門阿彌吹出す也。ある山寺の小兒に戀慕して吹きし手也。さらば明日まゐらんと云ふ事有り。黄鐘の大事これなり。此の外黄鐘の手ども、いくつも有レ之候へ共、しるすに不レ及。但ほど拍子タエフエはひろふウトチトはのぶる也。

▲盤渉の調子つしま

フ、ホ、ホ、フホ、。ホウ、ホエウ、、ホ。ホエエウ、ホエウ、ホ。　高音リ、ヒ、。、、リヤヤ。ヒリ、ヤ、。ヤ、タヤタエ、。ヤタヤタエウ。エヤエウホ。おろしホウ、ホエウ、、ホ。ホエ、ウ、ホ。エウ、エヤエ。ヤタヤタエウ。エタエウホ

▲二段の序

タ、ヒ、。、、タヒ、。ヒ神、ヒ上神、ヒ。ヒ上上神、ヒ。上神、ヒ

高ねおろしは、初段同前、三段めは二段めのごとくに吹きて、間を同じ如くにして、手を吹入れたるもの也。其の手定まらず。

▲さがりは

ヒイ、、、ヒイ、。、、、ヒ、。ヒイヒイ。ヒ、イヤエ。、、ウエ、。エエヤタ、。ヒイイホ

是を何べんも吹く也。則ちほど拍子は笛の如く也。此の内おなじ字の重なりたる所の吹きやう、何にてもふさぎたるゆびを、少しうごかしたる物也。たとへばフの字の重なりたる時は、四のゆびを動かすべし。ホのゆびの重なる時は、三のゆびを動かすべし。ウのゆび重なる時は二のゆびを動かすべし。エの重なる時は一のゆびを動かすべし。ヤの重なる時は、うらのゆびを動かすべし。リの重なる時は、一のゆびを動かすべし。ヒの重なる時は、三のゆびを動かすべし。神の字の重なる時は、二のゆびを動かすべし。イの字の重なる時は、三のゆびにて打つべし。上の重なりたる時は、二のゆびを動かすべし。タの重なる時は、三のゆびを動かすべし。チの字の重なる時は、二のゆびを動かすべし。又音取はたとへば一越の調子を吹かんとおもへば

ウフフホフ、ウ。リウリウフウ

これを呂の音取と云ふ。同律の音取

ウリヤリヤエ。ウリウリウフウ

如レ此に吹きて其の後、一越の手にても又歌にても吹くべし。何れも如レ此に音取有る也。

▲平調呂の音取

エホホウホホ。エイエイエホエ

▲同じく律の音取

イエフエエウ。タイタエフエ

▲双調呂の音取

ヤウホウルフ。フウホフヤ

▲同じく律の音取

イヤフヤヤ。タヒタヤフヤ

▲黄鐘呂の音取

ウエウ。チタウルホ

▲同律音取

ヤヤチリヤエエ。ヤエルホ。フエチリチ

▲盤渉呂ノ音取

エヤエ。ヒタエヤウ。ホフエウホ、

▲同律音取

リリヒイリヤヤ。リヤエウ。ホフエウホ、

右いづれも調子吹く時、まづ此の音取吹かざれば、調子かはりてうつらぬ物也。此の外音取あまた候へども、數さだまらず。

宗薫流の書物に傳はる手の數は

黄鐘廿三　盤渉十六　一越十五　平調十三

双調十一

此の外さらばの音取、またゝきがへしみだれ、戀の音取がんのゆりなどは、宗薫一子相傳の所なり。

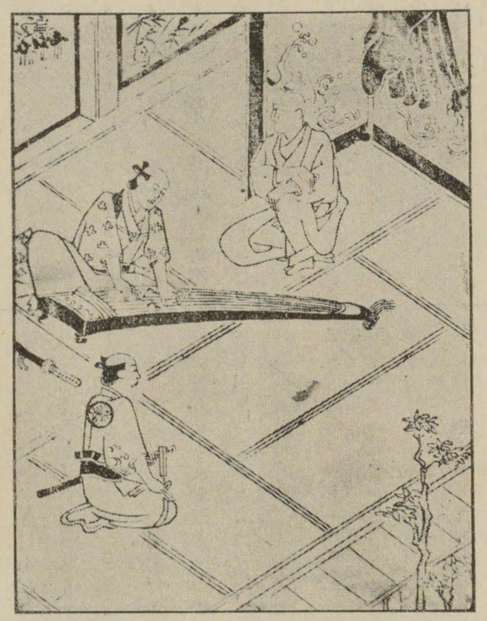
糸竹初心集　中卷

琴の次第の事

抑日本に下々まで、琴をもてあそぶ事は、中比九州に、玄淨法水とて、二人の僧有り。或時長崎に至りて、琴の引きやうを唐人より傳はり、其の後都へのぼり、公家殿上の交りをなし、寛永二年の比、琴の御ゆるしを下し給はりて、法水は關東にくだり、琴をひろむる。玄淨は筑紫にかへりて、これも琴を專らに修行す。さるによりて、今在家にひける樂を、つくし樂といふ也。かゝりとていやしき賤のわらや、不淨なる工商下人の家などにて、しらぶべき事にあらず。神をすゞしめ、菩薩の現じ給ふ妙音なれば、四町のうちを初め奉り、月卿雲客やんごとなき人のもてあそび給ふ物なれば、其のおそれ有るべき事也。凡そいとの調べやうは、まづ一越に調べんと思ふ時は、一は一越、二は下無、三は黄鐘、四は盤渉、五は一越、六平調、七は二のうは調子、八は三のうは調子、

九は四の上調子、十は五のうは調子、とは六のうは調子、いは七のうは調子、きんは八のうは調子也。殘る調子もこれに准ぜよ。又雲井の調べといふ事を此比八橋檢校ひき出したり。此の八橋本三味線の上手なりしが、中年より琴を學び、不思議に、琴の妙をえて、今日本の名人となる。音聲色ざしほど拍子、中々心におよびがたき上手なり。

一琴を引きならひやう、曾てしらざる人は、爪のさしやう、糸のおさへやうをみ習ふべし。まづ大指にさしたる爪は前爪と云ふ。中指にさしたる爪を、向爪と云ふ。人さしゆびにさしたるを、脇爪といふ。糸の名は、手前なるをきんといふ。次はいといふ。又次はとと云ふ。それより次第〳〵に、十九八七六五四三二一也。此の中



におさゆる糸は、四七九八也。但し引きならひにはおさへずしても苦しからず、爪かずばかりよく覺えたるよし。初には糸あはせがたきもの也。糸あはざれば何事引きてもうつらぬものなり。されば糸をよくあはすべし。但し右にしるす糸のあはせやうは、調子を聞かずしてはあはせがたし。初心なる人のあはせ習ふは、初め一二度は心得たる人にあはさせて、調子よく合ひたる時、糸十三ながら、いづれもぢのきはに墨を附けおくべし。糸しめゆるめにて、調子あはするにあらず。ぢのたてどころにてあはせたるものなれば、ぢをはづしたりとも墨をしるしにて、本の所にぢをたつるやうにすべし。大かたはあふもの也。又ぢをたてづめにしておけば、糸たびた

びきれてあしゝ。其の上糸のびるもの也。墨を證據にして、糸をよく調べ習ふべき事肝要なり。

▲すがき引きやうの事

三テン四テン六テン五〇三テン四テン六テン五〇三テン四テン五テン六テン七テン八テン九テン十〇八テン九テン十テントテン十〇八テン九テントテン十〇八テン九テン十テントテンテンキン〇トテンイテンキン〇トテンイテンキン〇トテンイテンキンテンイテントテン十〇八テン九テン十テントテンイテントテン十〇八テン九テン十〇八テン九テン八テン五〇三テン四テン五。

此の内てんと有るは、何れも皆打爪也。其の外は皆前爪にて引くべし。打爪といふは向爪脇爪二つの爪にて、三筋ばかりを、てんと打搔きたる物也。うち所は例へば

▲三を引いての跡のうち爪は、一二をうつべし。

▲四を引いてのあとのうち爪には、一二をうつべし。

▲六を引いての跡のうち爪には、二三四のあたりをうつべし。

▲七を引いての跡のうち爪には、三四五のあたりをうつべし。

▲八を引いての跡のうち爪には、四五六のあたりをうつべし。

右いづれも次第〳〵におなじ心なるべし。但し糸三筋うつにはさだまらず。前爪より二筋ほど先をあたるに任せうちたるもの也。

▲りんぜつ引きやうの事

テン五五テン五〇三テン四テン五〇三テン四テン五〇三テン四テン五テン六テン七〇テン八八テン八〇六テン七テン八〇六テン七テン八〇テン十十九八テン七テン六テン五〇三テン四テン六テン七〇テン八九〇テン十十テン十〇八テン九テン十〇八テン九テン十テントテンイ〇テンキンテンキン〇トテンイテンキン〇トテンイテンキンキンテンイテントテン十〇八テン九テン十テントテンイテントテン十〇八テンイテントテン十〇八テン九テン十〇テント十〇八テン九テント十〇八テン九テン八テン七テン六テン五〇

右すがきのごとくてんといふは、みな打爪也。その外は、いづれも前爪にて引くべし。又むかふ爪といふ引きやう有りまづ

▲一五と引く時は、一は向爪、五は前爪にて引くべし。

▲二七と引く時は、二はむかふ爪、七は前爪にて引くべし。

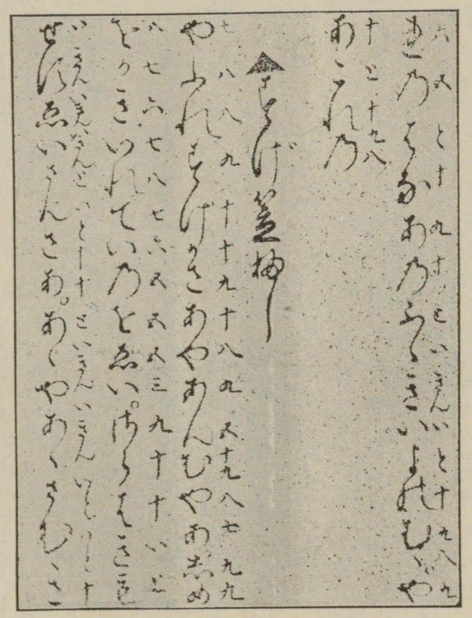
▲三八と引く時には、三はむかふ爪、八は前爪にて引くべし。

▲四五と引く時は、四はむかふ爪、九は前爪にて引くべし。

いづれも糸四つばさみ也。歌のうちには幾所も有るべし、能々心を附けておほゆべき也。

▲あふみをどりのうた琴引きやう

七三八七六六七九九十八　七三八七六六七八八七六五五
これゐゐからあみれゐば。　あふあふみがあみゆうるな。
八八九十十　といいさんきんきんいと十といと十五十九八九
かさあこて。たもをれ　あふみがさやれ　あふみがあ



んきんいきんゝと丶五十九八

▲伊勢をどり引きやう

七八八九十八八七八七六　五九八七八七六五一五四三九
あのきいみさまあはあゝ。いせのはまあゝそだあち。め

▲あひの手

〳〵八〳〵きん〳〵いといいき

十と十
さあ。

此のうちむかふ爪にて引く事有るべし。よく〳〵心をとむべし。

▲小倉をどりの引きやう

九十九十といきんいと十
おぐうゝらあのをゝ。の
十九十九十と十九八
おんのおんのべゐの。ひい
きんいといと十十九十九十
とをもとをすうむすうむ
と十九八　九十九十とゝ
すすうき。いつうゝさあ
きんいと十十九十九十と
てゐゝ。ほをんほほんほ
十九い。いきんいとゝ
にでて。みだれああん
十十十九と十九八七八
あゝあんあをいの。おた
八九十十九十八九十と
まこがれゐんて。秋こが
とと十九八
れつらんや。

十と十五十九い九十九八　七三八七六六五七八
ゑもとにいいしほがやれ。こほれゑかかるぞへ。

▲芳野の山

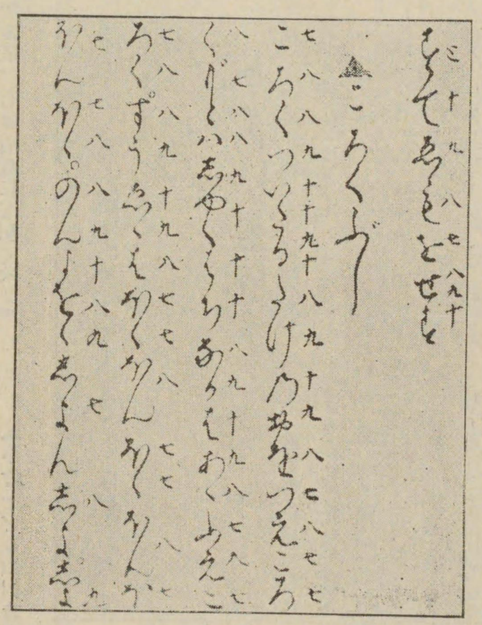
九十八九八九十十と十と十八九十十　六七八八七八九
よしのゝをやまを。ゆきかとみいれば。ゆきではああ
五十九八七六　七八七六五と十九十といきんいと十九八
あらでむゝ。やこをれのはなあのふゞきいよのむゝ。
九十と十九八
やあこれの。

▲すけ笠ぶし

七八八九十十九十八九五十九
やぶれすけがさあやあんむ
八七　九九八七六七八七六
やあ。しめをがきいれてい
五五五三　九十十いといきん
のをゑい。さらばきもせず
いきんいきんといと十十と
ゑい　さ　ん　さ　あ。あ
いきんいきんいといと十と十
あ　や　あ　ゝ　さ　む　ゝ　さ　す　て
九八七八九十
ゑもをせず。

▲ころくぶし

七八八九十十九十八九十九
ころくついたるたけのお
八七八七七七八　もとはしや
をつゑころく。七八八九十
十十八九十九八七八七七八
くはちなかはあゝふえころく。
八七七七八八九十八九
ほんほほんほゝ。のんよをゝじよんじよ。
八七六五五六六
じよろしゆののんかゝいやかか。
七八七六
かゝんかか。そんそれ



▲ころくぶし

七八九十八九十九八七八九十といきんいと十十九
八九十十九十八九十十十九八九十十十九八九十九
八七六六五七八
まことに。のほんほほをさあて。ふでのぢくうたあゝあ
八七六六五
け。ゑころく。

▲しばがきぶし

七八九十九八七八九十九八七八九十といきんいと十九
しばあがあき。しばあがあきしばがきごをしいでなああ
九八九十七八九十九八七
ああんゆきいのむなふ
八九十といきんいきんいと
りそをでゑゝちらと見
いきんいと十九八九十
たあとなああゝあん
六七七三八七九十八七六
ふりいそをでゑゑゆうき
五四三四五六七八六五四
のなんなんさあんほさい
五六五四四五四三三七
よゆきのいのむなゝふ
八九十といい三きんいと
りいそでゑちらと見い
きんいとい十九八九十
たあとなああゝん。

▲あひの手

五五四五七六六七八九八七六七六五五四六五四三テン
ごとをにおつれゑど。なもをたゝあぬうゝゑいそれよ
五五テン五七六六七八九八七六七六五四五五
ごとをに。おつれゑどなもをたゝあぬうゝ。

▲鹿をどりのうた

七八八八七八七　七九十
うらうゝらの。せきの
九八七八七六五四三
をゝしみいづはあゝ。よ

七七八七テン八七八九十八九十　五十七七八七テンい
おちよでのやきてはたれ〳〵ぞ。そりやなあかにめい
七八九十八九十五十七七八七テン八七八九十八七テン六五
けついせていかそりやををのへのかぜにかあしのいいい
五テン八八六ン五五三四五七六五五十テンきんいとテンきん
にはながき　せきでらよしかはよそりやよ太郎よよ太
いとテンきんきんテンきんきんテンきんいと十テンを八六五五四三テン
郎よよ太郎よ太郎よ太郎よとよぴやいだしてま
五七六五
ふきせた。

▲岡崎

テン八八九十九十テン八八九十九十テン八八九
を　かざきじよろしゆ　をかざきじよろしゆ　をかざき
八七六五七六五四五テン八八九八七六五
じよろうしゆはゑい上らうしゆうをかざき上らうしゆは
七六五四五
ゑい上らうしゆ。

▲かぞへうた

七八八九十十といきんいと十九十九八九十五十九八九九
ひとつとやあひい　とをもえしらあぬこひをしいてなみ
十九八七八七六七三八七六五
だはたもとをにたえやあらぬ。

▲かいだうくだり

六六七三八七六五四五九十と十十十九十九九テン十五十九
おもをしいろをのかいどくだありやあゝなにとを
八九八七八六七七八八七八六七三八七六六五五九十と十
かたあるうとつうきいせじかも川しら川うゝちわ
十九十九八九十と十十九十九八九十と十十九十九八九十
あたりいゝおもふひとにはあゝあはだぐちとよをゝしの
八九八七八七六六七八八八七八
みやあがはあらやじうぜゑんじ。

これより末も、かくのごとくくり返して引くなり。

ゑでんらく　これは古樂の名　天下泰平
梅がえ　宮古鳥
桐　壺　す　ま
雲のうへ　うす衣
うす雪　からかみ
雪のあした　新　曲

此の分いづれも、一組にうたのしやうが六づゝ有り。ただし、ゑでんらくは七つ有り。其の外の大事の組どもおほく有る也。中に雲井のしらべと申すは、大きに祕事する事也。

此の外はやりうたどもあまた候へども、ふしさだまらざるはしるしがたし。

八橋流組の名

糸竹初心集　下卷

三味線の次第の事

抑日本に三味線をひき初めし事は、文祿のころほひ、石

村檢校と云ふ琵琶法師あり。心たくみにして器用無双の者也。あるとき琉球の島にわたりけるに、かの島に小弓といひて、糸三筋にてならす物有り。小さき弓に馬の尾を絃にかけて引くなれば、小弓とは云ふとぞ。石村これを探りみるに、琵琶をやつしたる物也。いとのしらべやうも、一二は琵琶のごとく、三の糸は琵琶の三よりも二調子ほど高くあはせたるもの也と思へり。所の者いひけるは、此の島には眞蛇の多き所なるが、らへいかといふものありて此のまむしを食物とする。さればらへいかのなく聲、小弓の音に少しもちがはざる故、眞蛇を退けんが爲に、專ら引く也。琵琶法師も、爰に逗留の間は、引き給へといふ。其の後石村京都にかへりて、おなじく琵琶をやつし、此の三味線をつくり出せり。琉球の島よりえて來るといふ心にて、琉球組といふ事を作りおけり。弟子虎澤檢校に不レ殘傳へしかば、虎澤またくみはでと云ふ事を作り出す。虎澤より山野井檢校傳受して、世にひろまる。糸のあはせやうはこれも一二は琵琶のごとく、三の糸は琵琶の四の糸調子也。たやすきものに似て、はなはだ引きえがたきもの也。

▲一琵琶の調子、先黄鐘の調子に合せんとおもふ時は、一は黄鐘に合せ、二は一越三は平調、四は一のうは調子也。又盤渉に合せんとおもふ時は、一は盤渉二は平調、三は双調四は一のうは調子也。のこる調子も准レ之。琵琶の樂にあまた有りといへども、大唐より傳へ來るは

一上原石上
一流泉啄木
一玉樹三女

此の玉樹といふ曲は、不吉の曲といひ傳へたり。然るを或人うつりをかんがへ、此の中一手引きかへたる所有り。されども此の曲猶よきにしもあらず。其の後も度々不吉のためしありけると也。又七つばちかきくだし、三のたたき、篠むすびなどいふは調の曲の名也。いづれもたやすくは引きえがたき事なり。

▲一三味線の習ひやうは、人の引くに心を附け撥の持ちやう、糸のおさへやうをみるべし。或は歌をひかば、まづ其の歌のふしはかせよく覺ゆるが肝要なり。たとへば

繪をかゝんとおもふに、たび〳〵見たる物を書くは似せてかゝるべし。終に見ざるものを何としてか書出すべきや。三味線もこれにひとしく、我さへ歌を覺えずして、三味線にうたはする事、なか〳〵成りがたき事也。先づはじめには糸をあはせならふが專要。

▲一糸をあはせ習ふやうの事、初めはよく引く人にあはせてもらふべし。但し調子高きは糸たび〳〵きれてわろし。少しひくめにしらべさせて、糸のよくあひたる時、上こまより一寸ほど下に、糸三筋ながらに墨を附けおくべし。あがりさがりのなきやうに同じ處に附けおきてあはせ習ふべし。糸ゆるまればすみさがり、しまり過ぐればあがるものなり。髮筋のはゞほどあがりさがり有りても、一調子ちがふもの也。これを證據にして糸をあはせならふべし。又こまのたて所かはりても、調子ちがふものなれば、こまのきはに皮になりとも糸になりとも墨にてしるしを附け、同所にこま立つるやうにすべし。或人のいはく

引き習ひ糸をあはせむとおもふなよ
すみだにあへばいとはあふなり

さみせんしやうがの事

▲一の糸のしやうが
しトハ ちぶくらのきはにておさへ上より引くを云ふ
きトハ すくふを云ふ

さトハ はなして上より引くを云ふ
かトハ すくふを云ふ

▲二の糸のしやうが
つトハ ちぶくらのきはにておさへ上より引くを云ふ
るトハ すくふを云ふ

とトハ はなして上より引くを云ふ
ろトハ すくふを云ふ

すトハ 五寸ほど下にておさへ上より引くを云ふ
くトハ すくふを云ふ

▲三の糸のしやうが
ちトハ ちぶくらのきはにておさへ上より引くを云ふ
うトハ すくふを云ふ

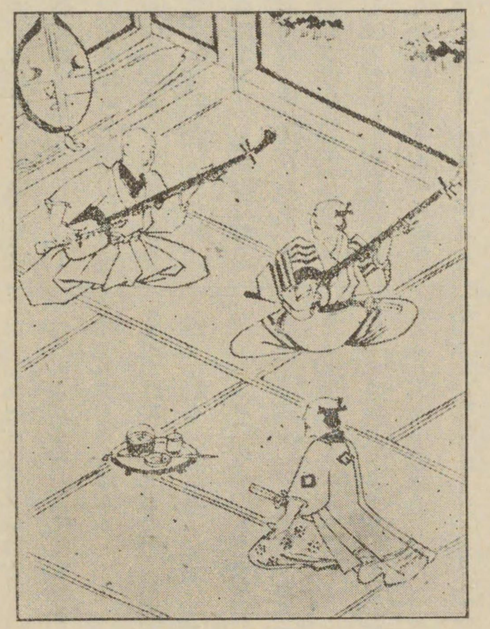
てハ　はなして上より引くを云ふ
れハ　すくふを云ふ
たハ　五寸ほど下にておさへ上より引くを云ふ
らハ　すくふを云ふ

右あはせてしやうがの數十六字有り。これをよくそらにて覺ゆる程何事にてもはやく引きならふ也。

しきさかつるとろ
十六字とは
すくちりてれたら

糸をおさゆる指は、人さしゆびなり。べにさし中ゆびにてもおさゆる事有れども、それは功者に成りての事也。はじめは人さしゆびばかりにてもくるしからず。

▲あふみをどりのうた三味せん引きやうふうらいふらい。ふるつまいとしな。われふるつまは。



▲伊勢をどり
あのきみさまはあ。いせのはまあそだあち。めゐもとにしほがやれこほれかあかるゐゝ。

なをいとをしい。やれなをゝいとをしい。

これをよく引きおぼゆれば、何れのうたにてもふしだに一つなれば、かくのごとく引きてあふなり。

▲おなじくあふみをどり
ふうらいふらいふるつまはいとしなわれふるつまはなをいとをしやれなをしきとおし。

たゞし、これは引きやうむつかしけれども、世上によくおぼえたるはかくのごとし。

▲小倉をどり
をぐうらのをのをんのをんのべの。ひともとをすうんすうんすゝき。いつうさてゐほんほゝんほにでゝ。みだれやあんやあんやあんあをいの。おたまこがれゐんてなきこがれつらんや。

▲あひの手
テスツテスツ。ステレステ。ツルトシサ。

▲すけ笠ぶし
やぶれすけがさあやあ。あんやあゝしめをがきいれていのををゐい。さらにいきもせず。ゐゝいさあんゝさあああやあさんゝさ。すうてゐもせゐずう。

▲よし野の山
よしのゝをやまを。ゆきかとみいればゆきではあゝ。あらでんゝやあこれのを。はなあのふゞきよのんゝやあこれの。

▲海道くだり
おもしいろのかいどくだりやあ。なにとかたあるとつうきいせじかもがはしらかはうゝちわあたりいおもふひとこれはあわだぐちとよを。しのをみやあがはあらあやあ。じうぜゐんじせきやまさんりをうゝちわあたりい。ひとをまあつうもをゝとをにいつうくうとの。

これよりさきは、三味線おなじごとくに引く也。

見わたせば瀬田のから橋、野路篠原や霞むらん、雨はふらねど、もり山を打過ぎて、をのゝしゆくとよ、すりはり峠のほそみち今宵はこゝに、草まくらかりねの夢は、やがてさめが井、ばんばと吹けば袖さむき、伊吹おろしに、不破のせきもり、とざさぬ御代ぞめでたき。

▲小六ぶし
ころく。むまれはにしのをくにころく。そをだちやほゝほんほゝほん。ほゝほゝほん。のをよををくわん。んとののんかゝいやかゝかゝんかゝ。そんそれまことにのほんほゝをさあて。むさあしのにすうむなころく。

▲柴がき
しばあがあき。しばあがあき。しばがきごをしいでなあああゝん。ゆきいのおなふりいそをでゐ。ちらとみいたとなああゝんふりいそをでゐゝゆうきいのをなん

シトツステツトシトツトトササササシトロツス　テチ
なもさあんよさいよゆきのなな丶ふりいそをでる。ちら
テツルテツトロサシト丶
とみいたとなあああん丶。

▲鹿をどりのうた

ステ丶丶ステステチタチテステレツルトロサ　シトトレ
うらううらのせきのををしみいづうはあ丶。よごとを
トテツトステテチテレツルテツト丶シトロシサ
におつれるどをなもをたあたあぬううるいそりや。

返しおなじ事也。

▲をかざき

ステ丶チタチ　ダステ丶チタチ　タステ丶チテレ
をかざきじよろしゆをかざきじよろしゆをかざきじよろ
ツルテツトシ　トステ丶チテレツルテツト
しゆはるいじよろしゆうをかざきじよろしゆはるいじよ
シト丶
ろしゆう。

近代山井の弟子柳川檢校、此の道に心をよせ、寤寐に忘れず、天性その骨をえて當代の名人也。色あひ撥のしなやかなる事、中々凡人のわざとはおほえず。さるに依つて、世に柳川流といふ。組のかずは、おもて七、うら七と、その外大事ども多きなかに、さかひ與中島ぐみといふは、大なる祕事とす。はでのかず卅餘有り。中にもらんごやといふ事は、引きえがたき事也。學ばんとおもふ人は、よく〳〵習ひをうくべし。

▲一調子を聞習ふ事、初めは圖竹一竹にて聞くべし。功者に成りては、四穴十二律にて聞くべし。十二律は昔黄帝の臣下、伶倫と云ひし人懈谷と云ふ所の竹を切りて、作り出すと也。さるに依つて調子を業とする人は伶人と也。此の調子と云ふ事は、人間のなす事にあらず。天地の間に陰陽造化の氣みち〳〵て、自然の聲音物をかつて、顯る丶道理也。これ天地の妙一氣の流行不息の印也。

▲一十干の調子と云ふは、天一の水より生ずるを、盤涉と云ふ。地二の火より生るを斷金と云ふ。天三の木より生ずるを、神仙と云ふ。地四の金より生ずるを平調と云ふ。天五の土より生ずるを、鳧鐘と云ふ。地六の水となるを勝絶と云ふ。天七火と成るを、黄鐘と云ふ。地八の木と成るを双調と云ふ。天九の金と成るを、鸞鏡と云ふ。地十の土と成るを一越と云ふ。これ十干の調子也。日月の調子とて上無下無をくはへて十二調子也。此の十二調子の次第は、まづ一越は子に當つて位は一つ、數は九、斷金は丑に當つて位は二、數は八つ、平調は寅に當つて

位は三つ、數は七つ、勝絶は卯に當つて、位は四つ、數は六つ、双調は辰に當つて、位五つ、數五つ、下無は巳に當つて、位は六つ、數は四つ、月の調子是也。鳧鐘は午に當つて、又位一つ、數九つ、黄鐘は未に當つて、位二つ、數八つ、鸞鏡は申に當つて、位三、數七、盤涉は酉に當つて、位四つ、數六、神仙は戌に當て、位五つ、數五つ、上無亥に當つて、位六數四、日の調子これなり。

▲又順のうつり逆のうつりと云ふ事有り。順八逆六と覺ゆる也。

順のうつりとは、一黄平盤双上鳧斷鸞勝神下、是を八のうつりとも云ふ。運氣論納音の五行に、八をへだてて、子を生ずると書きしも、此の調子の理也。逆のうつりとは、一下神勝鸞斷鳧上双盤平黄、これを六つのうつりとも云ふ也。

▲又十二月の調子は、まづ正月は陰數の木、神仙、二月は陽數の木、双調、三月は陰數の土、鳧鐘、四月は陽數の火、斷金、五月は陰數の火、黄鐘、六月は陽數の土、下無、七月は陽數の金、鸞鏡、八月は陰數の金、平調、九月は陰數の土、上無、十月は陽數の水、勝絶、十一月は陰數の水、盤涉、十二月は陽數の土、一越、月の調子これなり。

▲又人の呼吸聲音の調子は、神仙、双調は肝の臟、膽の腑に通ず。黄鐘、斷金は、心の臟、小腸の腑に通ず。鸞鏡、平調は肺の臟、大腸の腑、盤涉、勝絶は、腎の臟、膀胱腑、鳧鐘、一越、上無、下無は、脾の臟、胃の腑より通ずるこれなり。

▲其の外生きとしいけるものは、云ふに不レ及、非情無心の草木、風聲水音まで、自然の調子にあらずと云ふ事なし。然る間人の目はみんがため、耳は聞かんがため、鼻はかゞんがため、舌は味へんがため也。されども調子に至りては、聞く人まれにもあらず、學ぶべきものともせず、誠にいたましきかな。古人は牛の叫馬の嘶くを聞き、杜鵑一聲に、世の亂るゝをしる。これみな音律をえたるもの也。おろかなる人とせんや。今時の人は、耳ありても、淫聲を聞き口有りても虚をいひて、終に其の身のあたとす。今此の尺八も口に任せて吹きちらし、野人の耳をうごかさむが爲には非ず。いたらぬまでも、天地鬼神の心にかなひ、妙音不思議の聲を調べ、生長化收のみちをしらんがため也。もし此の道に縁あらば、はからずして、妙音の樂師に逢ひて、一息の指南に預らん事をねがふの外、他念なきもの也。

中村宗三

寛文四年甲辰卯月吉日

寺町通四條下ル町

秋田屋九兵衛板行

糸竹初心集　終

第十六　當世小歌撰

當世小歌揃

新なげぶし

▲行くも歸るも。しのぶのなみだれ。限り知られぬなわが。思ひゃん知られぬなかぎり。かぎり知られ。ぬなわが。思ひゃん

▲わかれるる身は。夢こそなアたのめ。打つな妻戸。のなよる。の雨ゃんつまどのな打つな。うつな妻戸のなよる。の雨ゃん

▲亂れみだるゝ。あのくろな髪は。わけていはれ。ぬなわが。思ひゃんいはれぬなわけて。わけていはれ。ぬなわが。思ひゃん

▲うらみながらも。又うちながむ。月はゆかり。かなアうき。人のゃん。ゆかりかな月は。月はゆかり。かなうき。人のゃん

▲秋の夜すがら。隈なきな月を。ひとり見る夜。はなうら。めしゃゃん見る夜。はなひとりひとり見る夜。はなうら。めしゃゃん

▲初音ゆかしや。身はほとなとぎす。八聲もろと。もななき。明かすゃんもろともな八こゑ。八聲もろともなき。あかすゃん

▲物や思ふと。問ふ人なあらば。いかが答へ。んな袖。の露ゃんこたへんないかがいかが答へ。んな袖の露ゃん

▲よしやいとはば。つらしとなわれは。戀のためし。にな身を。なさぬゃんためしにな戀の。こひのためし。にな身を。なさぬゃん

▲逢はぬ昔と。あひ見てなのちと。いづれ思ひ。はないか。ならんゃん思ひはないづれ。いづれおもひ。はないかならんゃん

▲思ひわするな。千代ふるなとても。契りかはせ。しなかね。ごとをゃんかはせしなちぎり。契りかはせ。しなかねごとをゃん

▲あだになすなよ。その夜のなちぎり。かはす言葉。のなひと。すぢにゃん。言葉のなかはす。かはすことば。のな一。筋にゃん

▲三輪の神かや。よる〳〵なかよふ。ひるは人目。のなしけ。ければゃん人目のなひるは。晝は人目。のなしければゃん

▲人目おもへば。戀しとなだにも。いはで戀し。きなわが。思ひゃん。戀しきないはで。いはで戀しきなわが。おもひゃん

▲あふにかへなば。命もなすてよ。よもにうき名。のな立た。ばたてゃんうき名のなよもに。よもにうき名。のなたた。ばたてゃん

▲またの御見は。ひとむらなしぐれ。定めなき世。にな袖。ぬらすゃん。なき世。になさだめ。定めなき世。にな袖。ぬらすゃん

▲むぐら茂りて。荒れたるな宿は。秋はきにけ。りな人。しれずゃんきにけりな秋は。あきはきにけ。りな人しれずゃん

當世かがぶし

●君とわが中。柴垣ごしよ。人はさがなやゆひたつる。此の身はやけよ逢はねばならぬ。たとへ淵瀬にしづむとも。

●まれにあふ夜は。人目を忍ぶ。せめて夢にはうちとけよ。とは思へどもそれもまた。忍ぶ御見にみしゆゑか。

●あかぬ別れを。思ふもしらで。いつもながらの鳥のこゑ。とは思へども告げわたる。鳥もつとめの身ぢやものを。

●雨のふる夜は。ひとしほゆかし。いつに。おろかはなけれども。殘る言の葉。おもへばゆかし。いつにおろかはなけれども。

●人につれなく。あたりもせぬが。思ふ人には逢ひかぬる。とは思へどもそれもまた。逢はぬさきだにあるものを。

●うゐぞ流れの。女とむまれ。貞女。ふたりの道そむく。しかしまことの心の水は。君が外には汲ませまい。

●ゆかり思へば。春日の里の。昔をとこがなつかしや。若むらさきのこひごろも。昔をとこがなつかしや。

●ひかる源氏の。おもひのほたる。つゝむともなき契かな。その玉かづらたまさかに。包むともなき契かな。

●おほしめすやら。その戀風が。きては枕にそよ〳〵と。ねやの空だきうきねの床に。きては枕にそよ〳〵と。

●いとゞさびしき。寢覺の床に。涙なそへそほとゝぎす。昔をしのぶわが袖に。なみだなそへそほとゝぎす。

▲さんやどてぶし

〕戀の。關守。たがすゑおきた。おもふ敵には。あはでぞ歸る。つらき人目や。かの業平の。歌の心に。いかなる君も。あはゞおゆる。しやれ名も立たじ。

〕ゆめの。うき世に。さゝのうで。遊べあすはこひしき。きのふの。むかし。たれかちとせの。月日をおくる。今宵かぎりと。いよでたをのこ。强き。お酌にいかなる下戸もつがばおのまさんせのも酒を。

〕歌の。一ふし。たれぞときけば。籬ながらも。かくれはあらじ。君の。お庭の。草葉となりと。强き。ゆふべの。風ともなりし。吹かば靡か。さんせ名もたゝじ。

〕うらむまいぞよ。つれなき君を。人のつらさも皆われからよ。あまの刈る藻にすみぬる蟲が。思ひかひなき涙の色。お笑ひあるな名のたつに。

〕かゝるさんやの。露ふかけれど。君がすみかと思へばよしや。玉のうてなも。おろかでござる。人はともいへやれかくもいへ。よその見るめも。いとはぬわれをお笑ひあるな名のたつに。（此ノ二首フシヅケ本ノマヽ

〕つらき。人より。つれなき命。あすは露とも消えなば消えよ。こよひ。ばかりと。定めたをのこ。つよき心にいかなる君も。引かば靡きやれ名の立つに。

〕つひにのがれぬ。無常の世界。死なんさきより燒かる此の身。胸のけぶりは山谷の野邊の鳥と。もろとも歌はば歌へ。さゝんせ盃のも酒を。

▲ろうさい

▲戀にこがれてつゆとも。消えば。あとはとに。かく。君たのむ。

▲立つる錦木かひなく朽ちて添はで年ふる身ぞうらみ。葛の葉。

▲いつの月日に相馴れそめて。今ははなりようかうらめしや。なにの因果にあひ馴れそめて。人目つゝめばうやつらや泣くも泣かれず。

▲山のはに西へ東へわたりしさとも月の光はひとりものかは。

▲山の。はになさけないぞの。身はをしどりの。いはで年ふる。身ぞつらき。

▲松の林のこのしたかけも君がござらにやうらめしや。

▲夢の世に見たや聞きたや。山ほとゝぎす。すがたなら。ずば聲なりと。

▲江戸ろうさい

○つらき人。よりの。つれなき命さても。はかなのわが身やな。

○いとゞその。夜もの。歎きて。あかす。とこものまくらも浮く。ばかり。

○思ひきろ。とはの。たよりの。なさけ。じつはの。うきよの。すて。ことば。

○忘れ草。がなの。一もと。ほしや。折りてのそだてて。見てわすりよ。

○阿波のなる。とにの。身は。沈むとも。君の。仰せはのそむく。まい。

○頼むまい。ぞのの。つらきの。君を。あふせ〳〵に。かはる身を。

平九本ぶし

一つれ〳〵に。綠もまさる涙川。袖のみ濡れて。あふよしもがな。

一いつまでも。心かはらぬ君ならば。こなたは尙も。雲の上まで。

一いにしへの。七の賢き人だにも。げこが一人もか。有るお見やれ。

一幾千代も。たえず供へしみな月の。今日のひさけも。君がまに〳〵。

一思へども。人目の關にとめられて。心ばかりは。通ひ來にけり。

一とりのねも。鐘もきこえぬ里もがな。ふたりぬる夜の。かくれがにせん。

一篠竹の。窓のあらしに目がさめて。君もおよらず。われもねいらず。

一ながらへば。また此の頃やしのばれん。憂しと見しこそ。八まんこひしき。

一手に手をしめて。ほと〳〵とたゝく。われは。そなたの。てつゝみか。

一山のはこそ。月はあれ戀路のみちに月はあらじな。

一思ひきれとは。身のまゝか。誰かは切らん。戀の路。

一阿漕が浦にひく網も。たびかさなれば人も知れ。さりとてもゐなの小笹のせめて一よは。

一菊のませがきゆひそめて。なか〳〵今はなか〳〵いまは昔こひしや身のうさを。

いせぶし

■秋のよのしかはないても明かす。人目忍べばうやつらやゑい泣くも泣かれず。忍べばつらや人目ゑいしのべばうやつらやゑいなくもなかれず。

くわんとうほそり

大ざかくだりに。十七こ。ぢょろにゆきあうた。とのとねたやらのさて。髪がそゝけたしばし。お。まちやれ。誓文たゝ聞かしよにかしま。香取や諏訪あ。つたま

下でうきすの明神伊勢やく。ま野さ愛宕白山とのと寢はせぬ。けさの嵐にのさて。髮がそゝけた。

八幡町通ふや町角　山本七郎兵衛板

當世小歌揃　終

第十七　當世なげ節

當世なげぶし

はやりしやうが
口傳本のうつし

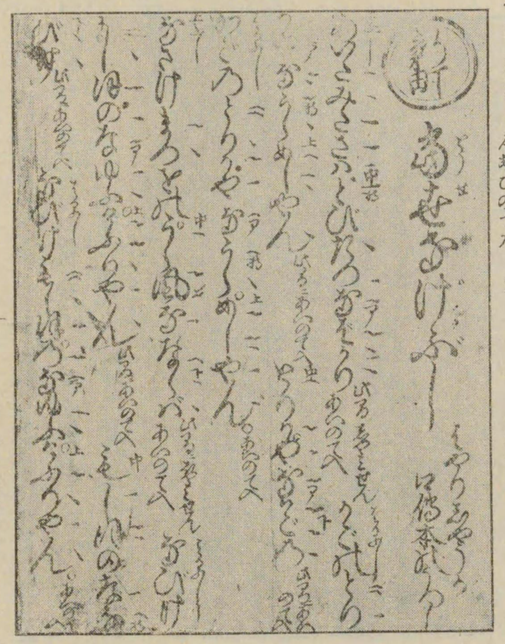
▲あひたみたさは（中持）とびたつなァばかり（此間しやみせんあひのて入）かごのとりか。やァなう（持）らめしやん（此間にあひの手入）（上）りか。やなァかごの（下）（此間にあひのて入）かごのとりか。やなァうら。（持）めしやん。（上）あひの手入

（以下回節略、反復形式同一）

▲なさけまつをの。浦風ならば。なびけもしほ。の夕。けぶり。

▲人めわかぬや。おもひのすがた。みだれ心。のうつゝ。なや。

▲のべに蛙（かはづ）の。鳴く聲きけば。ありし其のよ。がおも。はるる。



▲花もさくらの。また花さかば。われはときは。の松。かけに。

▲あひは近きに。かたりはせいで。ちかの鹽が。ま身を。こがす。

▲露もしぐれも。思ひのなみだ。そらもなけき。か雲。の上。

▲たとへあはずと。ふみをばかはせ。ふみはいもせ。のは。しとなる。

▲にくやうらみも。あるとはいへど。思ひいだす。は筆。のあと。

▲せめて閨もる。月影なりと。しばし枕。にとま。れかし。

▲おもひやるせの。なき身をとはゞ。かたわ車。のわれ。ひとり。

▲しらずしられぬ。昔の身なら。くずのうらみ。もよも。あらじ。

▲よしやこよひは。曇らばくもれ。とても涙。で見る。月を。

▲あうてたつ名が。たつ名のうちか。あはでたつこ。そたつなれ。

▲なにとせくとも。かはりはせまい。いのち限り。におも。ふもの。

▲さても氣のどく。別れもつらし。あはで忘る。る戀。もがな。

▲ゐなのさゝ原。そよ吹く風も。なさけ有馬。の音。づれか。

▲こひしゆかしは。唯世の常よ。わけていはれ。ぬわが。思ひ。

▲鶉啼くなる。深草なれど。われはしゆじやか。の露。涙。

▲よしやうき名は。いとはでわれは。いのちかけた。る君。なれば。

▲あきもあかれも。せぬ中なれど。ときのくぜつ。でかた。られぬ。

▲おきも寢もせで。思ひの泪。石の枕。もうく。ばかり。

▲うきもつらきも。世にすむうちよ。しなざやむま。いわが。思ひ。

▲よしやうらめし。馴れずはかほど。物は思は。じさり。とては。

▲くるわ住居も。親はらからよ。ために沈め。し身の。ほどを。

▲なげきながらも。月日をおくる。さてもいのち。はある。ものを。

▲君はさくらよ。たれさきそめた。ちらぬ其のま。に契。りたや。

▲あうていひたや。露のまなりと。せめておもひ。のあら。ましを。

▲うらみられたり。うらみもしたが。今は問はれ。ずとひ。もせず。

▲さらばやというて。おてうちかけて。ほろとないた。をいつ。忘りよ。

▲かはす枕は。數々なれど。こゝろとまる。は君。ひとり。

▲まちえかねつゝ。又あふ時は。うれし涙。でかた。られぬ。

▲しぐれしぐるゝ。涙の雨に。袖をもみぢ。の色。にそむ。

▲いつにわすりよぞ。寢亂れ髪の。顏にかゝり。しおも。かけを。

▲なみだならでは。あはれをとはぬ。深きあはれ。の其の。色を。

▲はげしかれとは。祈らぬものを。あしのかりね。のひと。よをも。

▲君のなさけを。忘れはせまい。露とわが身。は消ゆ。るとも。

▲思ひこしかた。行末かけて。かたる其のま。にと。りがなく。

▲戀の山とは。わが住む里よ。深き思ひ。のつも。り來て。

▲君に怨みは。われこそまされ。さのみなき。そきり。ぐゝす。

▲なごりをしやの。命もたへぬ。けさの別れ。はなさ。けなや。

▲君と我れとが。契りの道は。いつもたえす。な來。世まで。

▲今は身にしむ。愛別離苦の。うさを思へ。ばなか。〳〵に。

▲さてもよしなや。戯れそめて。今の思ひ。は人。知らず。

▲君のなさけの。うれしきまゝに。うき名立つと。も思。はれず。

▲かをる橘。さもむつまじや。やまとなれし。はふぢ。の花。

▲君を思へば。いはまのたけよ。寢入りかねつ。つ夜を。あかす。

▲思ひ出して。寢られぬこよひ。枕なりと。も伽。となれ。

▲君の心は。つれなや扨ても。いきの松ば。らとひ。もせず。

▲つらき別れを。思ふもしらで。いつもながら。のとり。の聲。

▲戀のふちせに。身はなげぶしの。思ひ沈む。は我れ。獨り。

▲さらばいのちの。たえなばたえよ。住めば怨め。し同。じ世に。

▲こひはせまじな。姿はやつれ。人の見る目。も恥づ。かしや。

▲袖のしがらみ。君せきとめて。かゝる流れ。のきみ。を見よ。

▲戀にいさめる。心の駒も。かゝるくつわ。に責め。らるゝ。

▲ゆふべ〳〵の。もんさす時ぞ。かへるつらさ。と來ぬ。うさと。

▲袖の移り香。夜毎にかはる。涙ばかり。はかは。らぬに。

▲人はしとしき。人にはあらで。むくい返す。な我が。こゝろ。

▲いかな夜も夜も。人こそしらね。閨は涙。の淵。となる。

▲君の心は。つれなや扨ても。いきの松ば。らとひ。もせず。（重出）

▲しんぞ八まん。みるとななづむ。末のおもは。くいか。にせん。

▲思ひ出して。寢られぬこよひ。枕なりと。も伽。となれ。（重出）

▲戀で死んだら。燒かずに棄てよ。しんはこがれ。てゆく。ものを。

▲さてもよしなや。戯れそめて。今の思ひ。は人。知らず。（重出）

▲待つがつらいか。別れがういか。待つに別れ。は似こ。そせね。

▲思ひ〳〵て。書きやるふみを。ときも見もせ。で返。さるゝ。

▲いつもなれども。こよひの夜程。君の戀し。き夜さ。もなや。

右は新町六夫天神ひみつのふし付をうつし令開板もの也。

當世なげぶし　終

第十八　紙　鳶

紙鳶序

大海塵をえらばず、達筆筆をえらばず、藝者器をえらばず。されば、妙觀が刀はいたくたゝずとかや。一節切も又しかなり。音律にくはしくして鳴ることを竹にもとむべからず。世に尺八ふく人を、鵜飼魚釣に比してわるロすれど、尺八は呂律の藝なり。鵜飼魚釣は遊興なり。藝にあらず。比すべからず。尺八に上手あり・下手あり。尺八ならねど下手藝はいづれといふとも、みな三幅對の内たるべし。殊に一節切は、一管の内に五調子をこめて唱歌にあはする物なれば、多年の執行退轉なく吹くにあがるといふ心に紙鳶と號し、此の書をあらはし、執行の礎とす。すでに糸竹初心抄・洞簫曲などいふありて世に弄時行といへども、手のみありて曲なし。今此の書は九十の手に亂曲小歌の唄歌あまたを添へて吹きやうを付け、きのふやけふエチリチをならふ童蒙達に便りす。花に囀る鶯、水になく蛙も皆これ音律のおもしろきを、世世の歌人もよみつらねしをおもへば、懐中の一管にあまたの曲をこめし藝なれば、花の晨月の夕のもてあそびものには、琴三味線の所狹きにはるかにまされるにやと、威言をふきちらして云爾。

紙鳶上卷目錄

▲一節切の尺八切様ノ事
▲同ふきやうの事
▲ひやうしあひの事
▲かすりの事
▲ゆのこほしの事
▲まはるゆびの事
▲ころぶゆびの事
▲打ゆびの事
▲いきつぎの事
▲五調子吹様不同ノ事
▲浮沈といふ吹やう
▲廻る拍子をからしたるをきらふ事
▲穴調子之事
▲よしのゝ山吹やうノ事
井ニ唱歌いろ〳〵
▲しゝをどりのまへうた
井ニ唱歌いろ〳〵
▲獅子踊の吹やう
▲をかざきのふきやう
▲すががきの吹やう
▲れんほの吹やうの事
▲りんぜつの吹やう
▲さんがらがぶし吹様
▲ひやうたんぶし吹様

▲一節切の尺八切やうの事

節を一つこめ長さ一尺八分に切る故此の名を付ていふ。節より下は七寸上は三寸八分に切るなり。但竹のふとほそによりて調子ちがふ物なれば、きはまりて寸はさだまらず。筒音を黄鐘の調子に合せたる物なり。音色は笙のごとく、指づかひは篳篥に似たり。歌口のしめやうは笛同前なり。指づかひ三十二有るなり。

▲尺八吹やうの事

先づ左の手をうへになし右の手を下になし、なえざるやうに吹くべし。なゆるといふは・吹きすつる所にあり。うれひをきらふなり。又したるきやうに吹くべからず。

▲拍子合の事

指をばはめて拍子をはめず、ウエフエといふにながみじかのなきやうに吹くべし。つぎにのべてはするみじかく、又長からんには始め短し、前を忘れていづくより出でた

るといふ事を知らざるやうに吹くべし。苦しげに吹込む事あしゝ。

▲かすりの事

息をいためて吹くなり。たゞし息をおし付けて吹くにあらず。はづむ息を控へて吹くをいふなり。

▲ゆりこぼしの事

つくにあらずゆるにあらず、少しのしなり。餘る息を以てする技なり。吹きがたき事なり。

▲まはるゆびの事

雙調は上四をうごかし筒に入れ、黃鐘は上の指三つをうごかし一越へおろし、吹きあくる指一つにならざるやうに吹くなり。まはりかゝる息吹きそらして吹くべし。雙調黃鐘盤涉の三調子にある事なり。

▲ころぶ指の事

雙調黃鐘盤涉の三調子にあり。宮商有角うつす所に早くあくれば、巧みてころぶに似たり。遲く移せば、角とひとつになりては差別きこえずはやくかよふの間なり。

▲打ゆびの事

フといふ所を二つをいふなり。少しもびゝれたる音色あしくはづむ一ぺんなり。雙調はエの指をうごかし、盤涉はうらの指をうごかすなり。此の指うごかざる尺八は音の入る事もなく、上手にならぬなり。

▲いきつぎの事

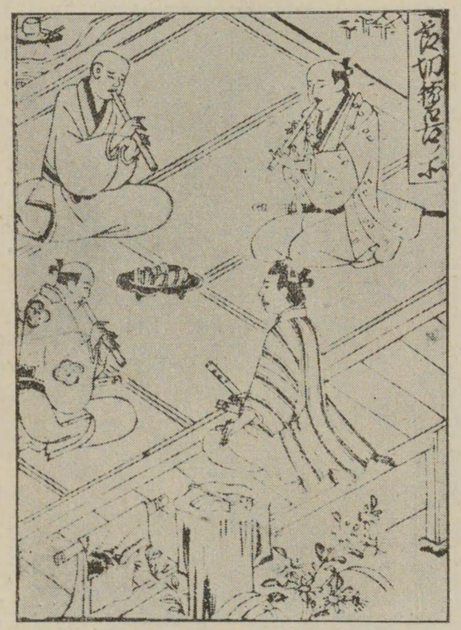
段々の句切の外に、息ついて其の節所のはたらきを專とすべし。ふし所の大事をかく事なかれ。息つぎ萬事控へて吹くべし。

▲五調子吹樣不同の事

雙調は　さきあがりに吹きゆるなり。
黃鐘は　まつすぐに吹きゆるなり。

一越は　しづかにゆるりと吹き淘なり。
平調は　四季に順ずるにあらく請けてさきさがりに吹くなり。
盤涉は　平調よりさきさげず、何れも律の調子なれども口傳。

▲浮沈といふ吹きやうの事



是はかゝる所をばめらし、めらす所をばからする事なり。宮に合せて調子一曲一手にして、餘のうつりかはる所それと差別なく、一律にかりめりなく吹く事なり。黃鐘の安田をふくにヤといふ所をめらし、エといふ所をからし、チといふ所をからしめらず、掟程して吹くなり。すなはち宮なり。五調子同じ事なり。高き所を高く吹き、める所をめらし、あり〳〵のまゝに吹くにあらず、少しのかりめりあれば、由聲といふ事が付いて聞きにくきなり。由聲とは自然に得る心出來る。

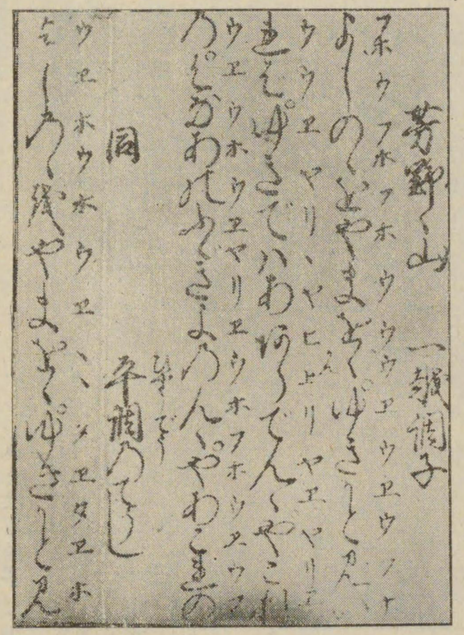
▲まはる拍子をからしたるを嫌ふ事

一曲のうちはじめをはり、面白く吹くにあらず、ふし所の技だにも道をたがへず吹けば、自然に殊勝なり。ころび四ケの曲平調卸の類ひは、いかにもさつと吹くなり。物手手巾の類ひは、成程おもひ入つて吹くなり。切挫安田のたぐひは、宗左宗勳師も書きしるすにいはく、碁盤の面の如くなる道を、あしたよりゆふべまで行けばくたびれあるなり。あがりさがりある道は結句行きやすし。先づ雙調は枯木に花の

咲きたるごとく吹き、黄鐘はえだ葉をしげらして始中終油斷なく吹くなり。一越はたゞ一節のしらべなれば、一しほこらで吹くなり。平調は秋の月にたとへ、盤渉は霜夜の月にたとへて吹くべし。萬事調子を知らざれば、うたまひの諸藝いかでか奥義を知らんや。

▲穴の調子の事

○雙調は　アカサタナハマヤラワ
○黄鐘は　イキシチニヒミヰリイ
○一越は　ウクスツヌフムユルウ
○平調は　エケセテネヘメエレエ
○盤渉は　チコソトノホモヨロオ



▲芳野の山　一越調子

フホウフホフホウウ　エウエウフホウウ　エヤリヽヤヒ
よしのゝをやまをゝ。ゆきかと見いれば。ゆきではあ
かん上リヤエ　ヤリエウ　エウホウ　エヤリエウホフホ
らでんゝやこれの。はなあのふゞきよのんゝ。やあこれの。
ウエウフ

同　平調のてうし

ウエホウホウエ、、タ
よしのゝをやまをゝ。ゆ
エタエホウエエタイヒ
きかと見いれば。ゆきで
ヒイヒ上上ヒイタイヒ
はあゝあらでんゝ。やこ
タエ　タエウエタイヒタ
れの。はなあのふゞきよ
エウホ　ウエタエホ
のんゝ　やあこれの。

同　雙調のてうし

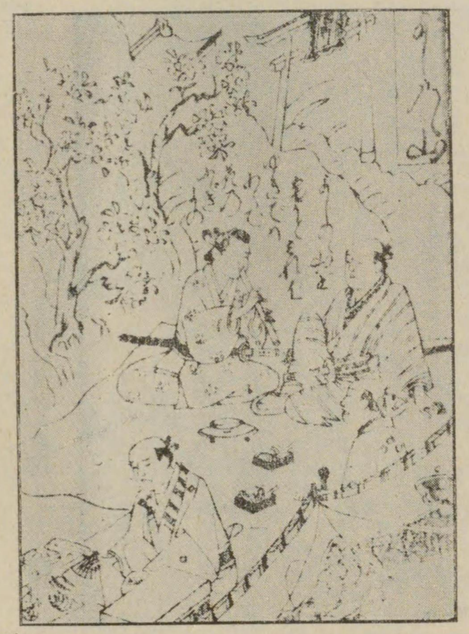
エヤウエウエヤ、、タ
よしのゝをやまをゝ。ゆ
タヤウエヤ、フホウ、ホエヤウホフ　ヒじやうタヤ
きかとみいれば。ゆきではあらでんゝ。やこれの。
タヤエヤタヒじやうタヤエウ　エヤタヤウ
はなあのふゞきよのんゝ。やあこれの。

同　黄鐘の調子

ヤリエヤエヤリ、、ヒリヒリエヤリリホウエ、ウエ
よしのゝをやまをゝ。ゆきかと見いれば。ゆきではあゝ
ヤリエウホウエホウヒリヤリヒイイヒリヤエヤリヒ
あらでんゝやこれの。はなあのふゞきよのんゝ。やあこれの。

同　盤渉の調子

リヒヤリヤリヒヒ、神ヒ
よしのゝをやまをゝ。ゆき
神ヒヤリヒ、ウエヤ、エ
かとみいれば。ゆきではあ
ヤリヒヤエウ　エヤウホ
ああらでんゝ。やこれの。
ウホフホウエヤウホフ、
はなあのふゞきよのんゝ。
リヒ神ヒヤ
やあこれの。



▲是から見いれば、近江が見ゆる、笠買うてたもれんゝ、やあこれの、近江菅笠をんゝ、やあこれの。

▲近江の笠は、形がようて着よて、しめ緒が長うてんゝ、やあこれの、なんぼ着よござるんゝ、やあこれの。

▲なれ〳〵茄子、背戸の家のなすび、ならねば嫁のんゝ、やあこれの、嫁の名の立つにんゝ、やあこれの。

▲たつたの川を、錦かと見れば、にしきではあらであらでんゝ、やあこれの。紅葉しがらみのんゝ、やあこれの。

▲月日のたつも、君ゆゑ知らぬ、鶯鳴きてんゝ、やあこれの、春を知らするのんゝ、やあこれの。

▲さす杯に、にほひをこめて、松竹千代とんゝ、やあこれの、めぐるさかづきのんゝ、やあこれの。

右之唱歌ふしも吹きやうもよしのゝ山と同前。

▲獅子踊の前歌

ヤリ、ヤリ、ヒ上、ヤリ、エウホフホウウウ　ヤエウヤエヤ
あさがほの。はなのうへなるつゆより。うすきお
リエヤエウエ、ウホフホウウ、ヤエウヤエヤリエヤエウ
なさけをゑいそりやつゆより。うすきおなさけを。

▲身を窶す、賤が思ひを夢ほど、様に知らせたやゑいそりや夢程、様に知らせたや。

▲淺ましや、賤が身はたゞ一夜で、おちて名を流すゑいそりや一夜で、おちて名をながす。

▲それとても、苦しう御ざらぬ若いが、二たびあるにこそゑいそりや枯木に、花が咲くにこそ。

▲鎌倉の、御所のお庭で十七小女郎が、酌をとるゑいそりや十七、小ぢよろが酌をとる。

▲酒よりも　肴よりも十七、小女郎が目についたゑいそりや十七、こぢよろが目についた。

▲目につかば、伴れてござれの江戸品川の、奥までもゑいそりや虎臥す、野邊の末までも。

右の唱歌、ふしも吹きやうもあさがほと同前。

▲獅子踊

ヤ、リ、ヤエヤリ、。リリヒ上、リリヒ上ヒ上、リ。ヤ、リ、ヤユヤリ、。リ、ヒ上、リ、ヒ上ヒ上上リ。ヤ、リ、ヤエヤリリ。ヒ上ヒリヤリ、ヤエウホ。ウホウホエヤリ、ヤリ、ヤエヤリ、ヤリ、ヤエヤリ、ヤエヤリ、ヤエウホウホウホフホフホウヤリ、ヤエウ。ヤ、リ、ヤエヤリ、。ヒ上ヒリヤリ、ヤエウホ。ウホウホエヤリ、ヤリ、ヤエヤリ、ヤリ、ヤエウホウホウホフホフホウヤリ、ヤエウ。

▲をかざき

ヤリ、ヒ上ヒ上ヤリ、ヒ上ヒ上ヤリ、ヒリ
をかざきぢよろしゆ。をかざきぢよろしゆ。をかざきぢよ
リエヤ、ヤエウホウ　ヤリ、ヒリ、エヤリヤエ
ろしゆはよいぢよろしゆ。をかざきぢよろしゆはよいぢ
ウホウ
よろしゆ。

▲すがゞき

ウ、ホフ、ホウエヤエウホフ、ホウエヤエウ、ホフ、ホウエヤホ、ウホウエエヤリヒ上、リ、ヒ上ヒ上リ、ヒ上ヒ上リ、ホ、ウホウエヤ、リ、ヤエ、ヤ、リ、ヤエ、ヤリヒヤリヤリヤエウ、ホフ、ホ、ウホウエエヤリヤリヤエ、ウホフホウホフヤリヤリヤエウ。

右之手三べん吹返しすがゞき一通と云ふ也。

▲れんぼ

フホウエヤ、リヒ、ヤ、リ、ヒ、ヤ、リヤエヒ、リヤエ
ウホウホエ、ウ、ホウウホウリウホウエ、ウホ、フヤリ
ヤリ、フホウエヤ、リヒ、ヤ、リ、ヒ、ヤ、リヤエヒ、
リヤエウホウホウエ、ウ、ホウホウリウホウエ、ウホホ
フヤリヤリ、ヤ、、、、、リ上、、、、、リヤヤ、エ
ヤ、ヒ、ヤ、リ、ヒ、ヤ、リヤエヒ、リヤエウ、ホウホ
ウエ、ウホウホウリウホウエ、ウホ、フヤリヤリ、

▲りんぜつ

ホウ、ホウ、ホフ、。ウホウホウ、フホ。ウホフ。ウホ
ウホウ、ホウエ、。ヤリ、ヤリ、ヤエ、。ヤヒリ、ヤエ
エ。ヤリ上ヒ上ヒリヒヤリヤリヤエウ、ホフ、。ウホウ
持持持
ホウ、ホウ。エ、ヤリ。ヒ上、ヒ上、リリ。ヒ、上、リ
リ。ホ、、ウ、ホウ。エ、。ヤリ、ヤリ、ヤエ、。ヤ、
ヒリ、ヤエ、。ヤリヒヤリヤリヤエ。ウ、ホフ、。ホホ
ホウ、ホウ。エ、ヤリヤリヤエウ、ホフ、ホウ、。ヤエ
ヤエ。ウ、ホフ、。ホウ、。ヤエ、ウホフ、ホウホフヤ
リヤリヤエ、ウ。

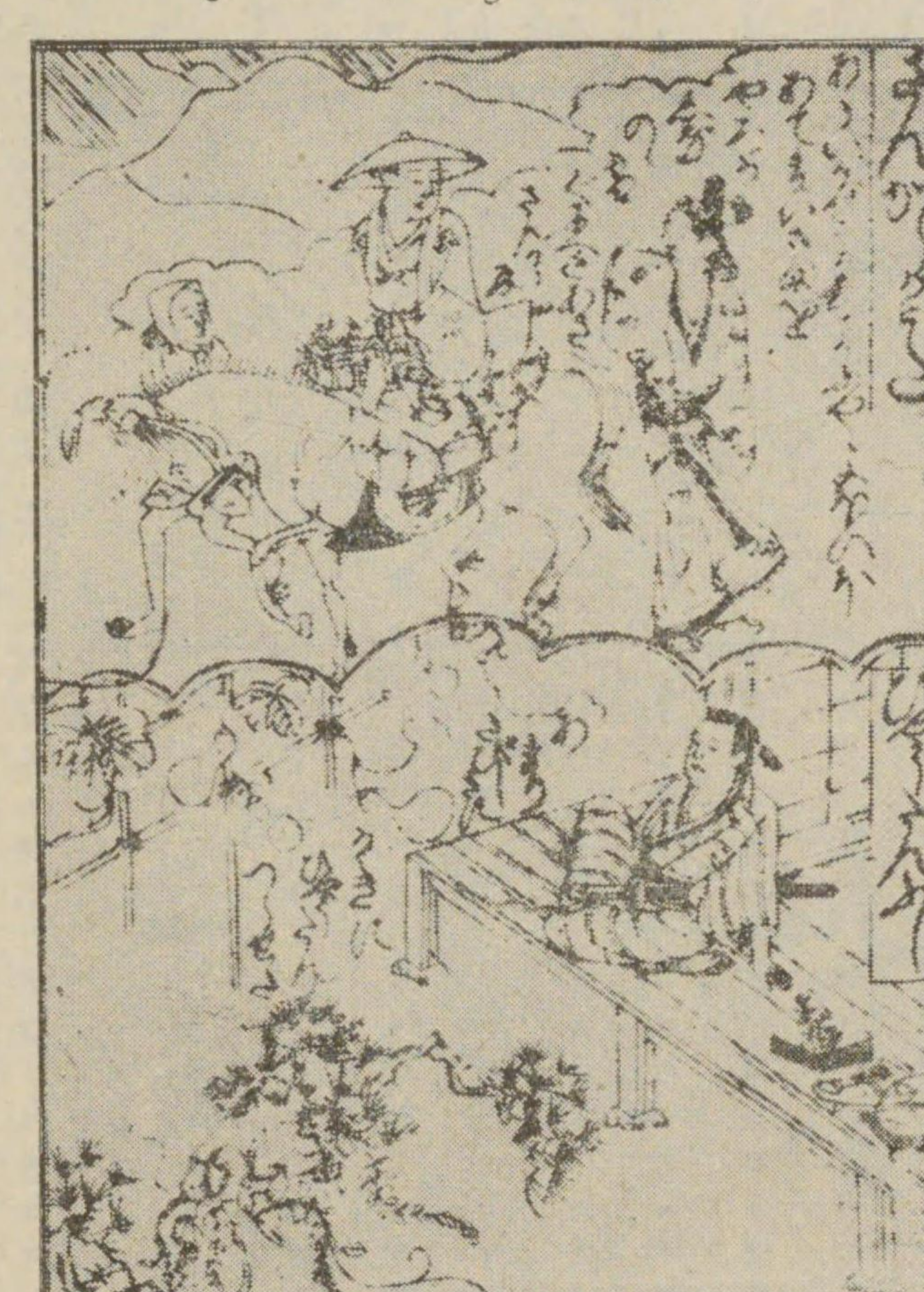
▲同二段目

ホウ、ホウ、ホフ、。ウホウホ。ウ、フホウホフ。ウホ

ウホ。ウ、ホウ。エ、。ヤリ、ヤリ、ヤエ、。ヤヒリ、
ヤエ、。ヤリ。ヒ、リ、。ヒ、リ、。ヤリヤリウフホウ
ホフ。ウホウホウ、ホウ。エ、ヤリ。ヒ上、ヒ上、リ、。
ヒ、上、リ、。引ヒ上ヒリヤ。リ、リ、。ヒ上ヒ上。リリ
リ。ホ、、ウ、ホウ。エ、
ヤリ、ヤリ、ヤエ、。ヤ、
ヒリ、ヤエ、。ヤリ。ヒヤ
リヤリヤエ。ウホフ、。ホ
ホ、ウ、ホウ。エ、ヤリヤ
リヤエ。ウ、ホフフホウ、。
ヤエヤエ。ウ、ホフ、。ホ
ウ、。ヤエ、。ウホフ、ホ
ウホフ。ヤリヤリヤエ、ウ。

▲同三段目

ホウ、ホウ、ホフ、。ウホウホ。ウ、フホウホフ。ウホ
ウホウ、ホウエ、。ヤリ、ヤリヤエ、。ヤヒリ、ヤエ、。
ヤリ。ヒ、、リ、ヒ、リ、ヒ、リ、。ヒ上、上、。ヒ、



リリ、。ヤヤ、リリ、。ヤリヤリヤウ。ホウホフ。ウホ
ウホウ、ホウエ、。ヤリ。ヒ上、。ヒ上、リ、。ヒ、上
上リ、。ホホ、ウ、ホウエ、ヤリ、ヤリ、ヤエ、。ヤ、。
ヒリリヤエ、。ヤヒ、。ヤリヒ。ヤリヤリ。ヤエ。ウ、
ホフ、ホホ、ウ、ホウ
エ、。ヤリヤリヤエ。ウ
ウホフ、ホウ、。ヤエヤ
エ。ウ、ホフフ。ホウ、。
ヤエ、。ウホフ、ホウホ
フヤリヤリヤエ、ウ。

右三段つゞけて吹きりんぜつ一ぺんと云ふ。

▲さんがらがぶし　一越調子

リ、、ヤ、エヤヒリヤリヒリエ　ホ、ウエヒリヤヤエウ
あらいかぜにもよふやよほいほ。あてまいさ　まを。
エヤウエヤエヤ上リヤエウホフホウヤヤ　エ、ウ　エヤ、エ
やろかしなののゆきぐにへ　さあささんがらが。かはぢ
ウヒ　ヒ、リ、ヤリヒ、ヤリ　ヤ、リ、ヤ、リ、上ヒリヤ
やざんざらやなぎかよいよさ。しろねが〱よいてが

上ヒリヤヒ上、エヤエウホ　ウ、、　エヤエヤヒリヤエウ
よいてが。こまのひざぶしんがらが。しなのへやろか。
エヤウエヤエヤ上リヤエウホフホウヤヤエ、ウ
やろかしなのゝゆきぐにへさあささんがらが。
墨と硯はよふやよほいほ、戀仲なれど、人が水さしや、
薄くなるさあささんがらゐ、川ぢやざんざら柳がよいよ
さ、しろねが〱よいてが〱、こまのひざぶしんがら
が、水さしや人が、ひとが水さしや薄くなるさあささん
がらが。

ふしも吹きやうも口と同前。

▲同あひの手

エヤ、。上リ上リ上、。上リヤ。上リヤ。上、。ヤエ、
ヤエ、ヤエ、ヤ、。ヒリヤ、エウ。ヒリヤヤエウ。上リ
リ。上、ホウヒリヤエウエ。

▲ひやうたんぶし

ヤリ、ヒ上ヒリヤエ、ヤエヤリヤエエ、ウ、ホウヤリ、
あまりさびしさにかきにひやうたんつらせた。をりし
ヤヒ上ヒリヤエ、ウ、ホ、ヤエウウ、ホ、ウ　ホ、、
もかぜがふいてあなたのかたへからころひよ。こなた
ホヤエウウ、ホ、ウ　ヒ、リ、ヒ、リ、ヒ上ヒリヤ
のかたへからころひよ。からころ〱ひやうたんのつ

リヤリヤエウ、ホ、ウホウ、ウ、ホ、ヤエウ、ホウ
らせたはいよこのまことになにによりもつておもしろい。
ヤリ、ヒリヤリヤエウ、エヤエウウ、ホウヤエエヤエウ
ゐちござらしにまつのきんのつけてまつのえんだ
ウ　ヒリヤリヒリヤリ　ヒリヤヒリヤヒ上ヒリヤエウリ、
が。あちりなこちりな。あちりこちりすじりもじりてゐ
ヤリ、ウホ　ウホ、、ヤエウウ、ホウヤリ、ヤ　エ、
りくりゐんじよのまつのきんのもとで。ふぢのはんなが
ホウエヤエウホフヤリ、ヒリ　ヒリヤエホ、ヤエウホウ
たよ〱とふぢはな。なにふぢしらふぢこふぢ、
エヤリ、ヒリヤヒ上ヒヒリヤヒリヤヤエホ　ホエウ、
むらさきふぢのそもやみだれ〱たるそんのきんのも
ホウ　ヤリ、ヒリヒリヤエウ　リヤ、ヒ　ヒリヤエリヤ
とで。さすぞさかづき。やつこのはつあのめさよゐ
エホウ、ホ、ヤ　エ、ウ
さ。くだをまかさんすな。

紙鳶中巻

惣穴の音しる事

ふとは　惣のあなをふさぎてふくをいふ。
いとは　惣のあなをあけてふくをいふ。
やとは　一二三四をあけうらばかりふさぎたるをいふ。
ちとは　一をあけ二三四とうらをふさぎたるをいふ。
ほとは　四をあけ一二三とうらをふさぎたるをいふ。

うとは　三四をあけ一二とうらをふさぎたるをいふ。
ゐとは　二三四をあけ一とうらをふさぎたるをいふ。
りとは　一三四とうらをあけ一ばかりふさぎたるをいふ。
ひとは　一とうらをあけ二三四ふさぎたるをいふ。
しやうとは　三四とうらをあけ一二ふさぎたるをいふ。
神とは　四とうらをあけ一二三ふさぎたるをいふ。
たとは　一二四をあけ三とうらをふさぎたるをいふ。
るとは　二四をあけ一三うらをふさぎたるをいふ。

以上十三字也

フホウエヤリヒ
しやうかんイタルチ　以上十三字なり。

是をよくそらにて覺えざれば吹習ふ事おそし。但し此の内ヤタル是三つは二やうにあり。

㊀一三四あけ、うらと二ふさぎたるをやといふ。
㊁一と三ふさぎ、二と四とうらあけたるをもたといふ。
㊂一二四うらをふさぎ、三ばかりあけたるをもるといふ。

是は雙調の調子盤渉の調子に此の指を用ふるなり。黄鐘平調一越には右のヤタルを吹くべし。よく〳〵心をとめ指づかひちがへず、そらにて覺ゆべし。惣じて尺八は五調子と用ひ候へども、先づ歌は一越の調子をもつばらとするなり。

十二調子窺之事

	一越	斷金	平調	勝絶	下無	雙調	鳧鐘	黄鐘	鸞鏡	盤渉	神仙	上無
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●	●	●	●	●	●	○	○	○	○	○	●	○
●	●	○	○	●	●	○	○	●	○	●	●	○
●	○	●	○	●	○	○	○	○	○	●	●	○
●	○	○	○	○	●	○	○	●	●	●	●	●
●	○	○	○	○	○	○	○	●	●	●	●	●
●	○	○	○	○	○	○	○	○	●	●	●	○

▲平調呂の音取

エホホウホホ。エイエイエホエ。

▲同　律の音取

イエフエエウ。タイタエフエ。

▲雙調呂の音取

ヤウホウルフ。フウホノヤ。

▲同　律の音取

イヤフヤヤ。タヒタヤフヤ。

▲黄鐘呂の音取

ウエウ。チタウルホ。

▲同　律の音取

ヤヤチリヤエエ。ヤエルホ。フエチリチ。

▲盤渉呂の音取

エヤエ。ヒタエヤウ。ホフエウホホ。

▲同　律の音取

リ、ヒイッヤヤ。リヤエウ。ホフエウホ、。

右いづれも調子吹く時、先づ此の音取吹かざれば、調子かはりてうつらぬものなり。此の外音取あまた候へども數さだまらす。

雙調　春の調子
黄鐘　夏の調子

	雙調	黄鐘	
フ（トトモ云）	●	●	●
ホ（ロトモ云）	●	●	●
ウ（ルトモ云）	●	●	●
エ	●	●	●
ヤ	●	○	○
ル	○	●	○
タ	●	○	●
ヒ	○	○	●
リ（チトモ云）	○	●	○

● 筒音也

此の外イはぬき手かするを云ふ口傳。

【雙調】

初手

黄鐘の手に同じかへしはうらのかへしといふ。

ヒヤフヤ、。タヒタヤフヤ。

高音

ヒ、、タイタヒ。タヒタヒヒ。ヒタヤイホヤ。、ヒヤフヤ、。タヒタヤフヤ。

此の手を黄鐘にては挫といふ。下の高音は同手也。

下高音

エヤ、イホヤ。ヒタヤイホヤエヤ。ヤイフエウフウ、ウ、、、フウルフホエウ。ヤエヤ、ウホイフホルフ。ホタヒタヤ。ヤタイタヤフヤ。

中高音

タヒタヒ、。エ、ヒ、タヤイホヤ、。ヒタヒタヒタヤフヤ。

下音

ヒヤフヤ。ヤタエヤ。ヤイホエウフウ、、、、フウ。エホエウ　ヤエヤヤウホイ。フホルフ。ホホエホフウ。エホウルフ。

拔手

タヒタヒ、。ヒタヤイヤフヤ。ヒタヒタヤフヤ。

下卸

イヤフヤ、タエヤ。ホヤイフエウフウ、、、、フウルフホエウ。ヤエヤ、ウホイ。フホルフ。ホタヤフヤ。ヤタヒタヒタヤフヤ。

紹窓手

タヒタヒ、。イヤフヤ、。タヒタヤフヤ。

音違

ヤリ、フリイヤリルエ。ヤ、イホエウフウ、、、、フウルフホエウ。ヤエヤ、イウホル。フホルフ。イヤフヤヤウタヤフヤ。

小兒

イウイフウ、エイ。イウホウルフ、エウフヤ。ルウ、、ウ、、フウルフホウエヤ。イウホウル。フイヤフヤ、タ。ヒタヤフヤ。

朝倉返

タヒタヒ、。ヒタヤイホヤ、。タヤ、リルエウフウ、、ウ、、フウ、ホ。ホエウホエヤフ。筒イウホルフホルフ。イヤフヤヤタヒタヤフヤ。

亂

タヒタヒ、。ヒ神、、、、、、、ヒ、タイタヒ。タヤイホヤ、ヤ折タ、、、、、ヤタルエ有レ曲ヤ、イホエウフウ、、、、フウルト。ホエウ。ヤエヤ、。タヒタイタヤフヤ。

此の手當流の祕曲也。たやすく初心の人につたへざる手也。

五段大物　ころび　手巾三っ　后て

平調卸　似　裡の高音　四箇曲

此の黄鐘の手の類いづれもうらのかへしにて吹きとむる也。

安田　安田碎　二段淘　波間

此類の手は雙調にはふかず。

【黄鐘】

ホ（ロトモ云）	●	●	●	●	○
ウ	●	●	●	○	○
エ	●	●	●	○	○

ル　●●○●○
タ　●○○●○
チ　●○●●●
フ　●●●●●　筒音也。

此のほかイはぬきてかすり
とはみなあけてつよく吹くなり。

初手

ウエフエタエフエ、、、、、フエ、ウエ。イエフエウエ。ホウエロ、ウ、タエフエタウエロ筒。

手巾

ウエフエタエフエ。、、、、、フエ、ウエ。チタエフエエフウエロ筒。

此の手江州大津之住人とぎや佐右衛門次郎入道淨朝吹きいだされし故、淨朝の手巾といふ。

拔手巾

ウエフエタエフエ。、、、、、フエ、ウエ。チタエイエエフウエロ。ウ、タエフエタウエロ筒。

此の手日光院ふき出されしゆゑ、日光手巾ともいふ。

筒手巾

ウエフエタエフエ。、、、、、フエ、ウ。チタエフエウエ。フウエロ。ウ、フエフエタウエロ筒。

此の手宗左吹出されしにより、宗左手巾ともいふ。

本手　五段切ともいふ

ウエフエタエフエ、、、フエ、ウエフエ。タイタエフエ。ウエフエタイタチ、。タエフエ、、、、、フエタウタエウチタチ、エフエウタエフエタウエロ。ウ、エウタエフエタウエロ筒。

此の手五段あるによつて五段ともいふ。まへの三つのゆりはゆるりと吹くべし。三つゆるといへども、五つの心もちにて吹きいだす。二つはゆらずして間をかかへてふくなり。のちの五つのゆりはまち合さずあらくういて吹く。惣じて黃鐘調は呂律和合してしかも呂をもつぱらとして律をかねたるによつて、あがりさがりなきやうにまつすぐに吹くなり。ことにゆりなどさらりと吹きてよし。

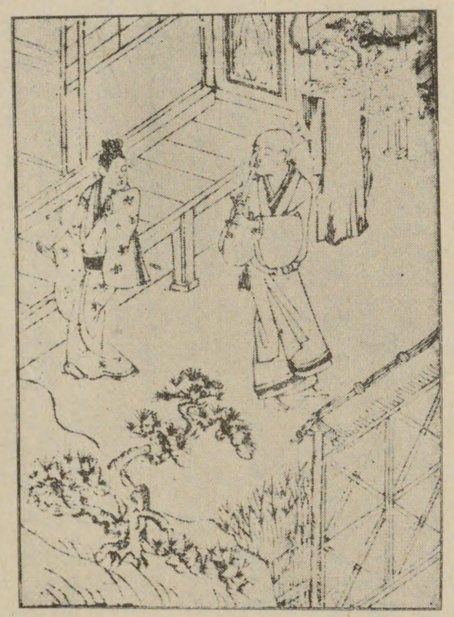
高音　挫とも高音碎ともいふ。

チ、、ヤホヤチ。タチヤチチ。チタエフエ、、、、、フエタウタエ。此のすゑ五段と同

裡高音

ウタウフタチ。タチタチ、、チタエフエ、、、、、フエルロウタエ。チタチ、タエフエ。ウタチヒエウエ。ホウエロ。ウ、タエフエ。タウエロ筒。

此の手裡の黃鐘にて吹くより、うらの高音といふ。しかれどもうらの黃鐘にて吹けば、音色初心にして吹きえがたきにより、今は改めておもてのつねの黃鐘にて吹くゆゑ吹反のたか音といふなり。先師以來うらの高音といふにより。裡おもてにて時々吹く。黃鐘にてさのみすぐれざる手なり。盤渉にては面白き故つねに吹くなり。おもての上の穴を一の穴といふ。一の穴をあくるも黃鐘の調子、ふさぐも黃鐘の調子なり。うらの穴を二のあなといふ也。



中高音

タチタチ、。ウ、チ、タイエ、、、、、フウタエ。

此のすゑ安田に同じ。自然にするゑにて筒音を入れて吹く事あり。ウ、ータエフエタウエローと吹きとむる也。

高音碎

チ、タチ。チタチ、。チタエフエ、、、、、フエルホ。ウタエ　是より安田するの如し。此の手六ノ手とも云ふ。

安田

タチタチ、。ウチタエフエ、、、、、フエタウタエ。チタチ、イエウエ。ホウエロウ、タエフエ。タウエロ筒。

此の手一越平調雙調の調子にては吹かざる手なり。黄鐘盤渉にて吹く也。

安田碎

タチ、タチ。ウチタエフエ、、、、、フエルホウタエ是より安田のするに同じ。此の手七ノ手とも云ふ。

波間

チ、、タチ。タチタチ、。チタエフエ、、、、、フエ、エフウタエ。チタチ、イエウエ。ホウエロウ、筒タエフエ。タウエロ。

四箇之曲

ウエフエタチ、タエフエ。チタチ、タエフエ、、、、エフエ、ウエ。ウタエイエエフウエロウエルタイウエロ筒。

小兒

イエイ。フエ、タイ。イエウエルロ。筒エ、、、、フエタウタエ。チタチ、イエノエウヤチ。イエウエホウルロ。ウ、タエフエ。タウルロ筒。

此の手文阿彌吹出す。小兒を戀ひしたひてかよひし道にて吹きし手なり。かるが故にさらばの音取と云ふなり。さらばあすまるらうミウエウチリタウエロ此ごとくに吹く。此の音取をいとまごひと云ふ。

僜

イエフエ。タチタエ。フエウエタエ。フエ、、、、。フエ、。ウタエイエ、フウルロウウ。エルタ、エフエ。タウルロ筒。

僜碎

ヒエフエタチ、タエフエウタエフエ、、、、、フエ、ウエ。

此の手八之手とも云ふ。

大物

ウ、エホウエロウホウ、エルタエフエ、、、、。フエタウタエ。チタチ、エウエタチ。ヒエウエ。ホウエロ。ウ、タエフエタウエロ筒。

似

ウ、エウフタチ。タチタチ、。チタエフエ、、、、、フエ、。フウタエ　此のするに安田と同じ事也。

一の手

イエフエ。タエフエ、、、、、フエ、。ウエルロ筒。ウタエフエ。チタチ、。タエフエ、、、、、フエ、ウエ。ウタエフエ。ウエホウエロウエルタウエロ筒たゞしのちのゆりのするヒエフエウエ。フウエロ。ウタウエロ筒。

かくの如く吹くもあり。

二段淘

二ノ手ともいふ。

タチタチ、。エ、、、、、フウタエ。チタチ、エ。ウエホウエロエ、、、、、フエ。タイタウエロ筒。

三之手

ウエフエ。タエフエ、、、、、フエ、ウエ。ウタエフエ。タウエロ。ウエウタエフエ。タウエロ筒。此の手三つゆりとも初手碎とも云ふ。

平調卸

ウエフエ。タエフエ、、、、、フエ。タイタチエ。タエフエ。ウエ、フエ。タエフエ、、、、。フエ、ウエ。ヒエフエウエ。ホ、フエロウタイエフエタウエロ筒。

后手　五手とも古手とも本手くだきとも云ふ。

ウエフエタエフエ、、、、フエ。タイタチタエフエ。チタチ、タエフエ、、、、、フエ、ウエ。

紙鳶下卷

一越	土用調子	フ	●●●●●
平調	秋調子	ヤ	●○○○
盤渉	冬調子	チ	○●○○
		ホ	●●●●○

ウ	●●●○○
エ	●●○○○

打出す聲をヒといふ。イといふは、ぬいてかする所をいふ。

【一越調】

初手

ヒヤ、イフヤエヤ。ヒヤリイヤ、。リルエウかへしヤエイホ。エヤエ。ウフウ。

此のかへし一越の本反と云ふ。

右之手は表四つの高音と云ふ。

高音

イヤ、イフヤエヤ。フヤリ、イヤ、リルエウかへしヤエヤフエヤエウフウ。

中高音

イヤリ、イヤエウ。

吹込

イヤリ、ルエヤ。ホヤリルエウ。ヒヤエヤイホエウフウ。

呂

トホ、、、、、。ウホイフホウト。エウ。イエフウ、。ホエヤエウフウ。

淘殘

折込トホト、ウホイフホウト。ヒヤリイヤエウかへしヒヤエイエヤエウフウ。

音違　岩松とも戀の音取とも云ふ。

フリ、フリヒエリフリ、、、、ヤリルエウホウエヤエイウフウ。

一之手

第十八　紙　鳶

折込トホト、、、、。ウホイフホ。ウトヒヤリリルエウ。ホエウフウ。

二之手

引ソノマ、ユルト、、、、ウホイフホウトヒヤリイヤエウ。是より本かへし

三之手

ソノマ、ユル小枕、、、、ホウホウト。呂のかへし

四之手

イウフウ、エホウ、ルホ、、、。、、、ウホイフホウト引持エウイフウ、ホイヤリルエウフウ。

五之手

ホウ、イフウルホウ。ウルホト、、、、、。引句を切ツグ心トウホイ。ミジカク引折込フホウト。ヒヤリイヤエウ。是より本かへし

六之手

ヤ、イフヤエヤフヤリヤリヒ上リルイヤフヤエ、ウルホウフヤリルエウフウ。

七之手

イヤリヤリ、、、、、イヤリルエウヤエヤホエヤリルエウフウ。

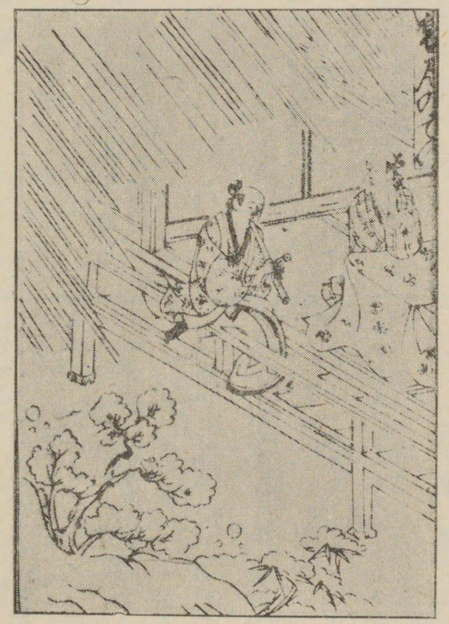
ヤリ、ヒ上上、神上ヤ、エイエヤヤリ、、、、、イヤリルエイエウヤエヤフエヤ。口傳

タ　○●○●○　たかれのタ

ツラ　○○○○○　したの指二つ打

チリ　●○●○○

タ　●○○●○



ホロ　●●●●○

ヒ　○○●●●

エウ　●●○○○

一四の穴ふさいでは高音のタ也。

五つ皆ひらきて、下の指二つにてうつをツラといふなり。

【平調】

高音　初手とも云ふ。

タチタチ、。チタエイフエ、。チタチイフタエ。フエ。

中高音

タチタチ、。ウチツラタエ。半反シ折ツラヒイツラタエフエ。

呂

折コモル
ホ、、、、、エウエホウエホタエイホエ、ウタチタエフエ。

淘越

折
ホウホ、。エウエ、ホウエホ。本反

一之手

折コモル　小枕
ホウホ、、、、、、エホウエホ。本反

二之手

引
ホ、、、、、フウエウエホ。本反

三之手

小枕
ホ、、、、、フウエホウエホ。呂反

四之手

此の手夏の手と云ふ。又下おろしとも云ふ。

イエフエ、タウエ、ルホ、、、、。、、、エウエフウエエホタエイフエウツラヒ折イツラヤエフエ。

五之手

ウエ、イホエルホエ、ルウホ、、、、、。、、エウエホウエ、ホ。一越へおろしかへす

但し四の手五の手ゆりとめうらおもてなり。

六之手

チ、、ウタチタチ、タエイホエルウエ、ルウホ、、、、ホ。エウエホウエホ。本反

緣淘

此の手蟬羽扣といふ。

ツラヒラ上神上神々。

ツラヒイツラヤ　曲有り一やうにさだまらず。

音違

エヤホヤタヒヤ、、、、、ホヤルチウウエツラヒイツラ

タヱフヱ　半反と云ふ。口傳有り。

ヱ	●	●	○	○	○
タ	○	●	○	●	○
ヒ	○	○	●	●	●
ホ	●	●	●	●	○
ウ	●	●	●	○	○
ヤ	●	○	●	○	○

【盤渉】

初手

黄鐘とおなじかへし、たゞし本反なり。

高音

ヒヒ、ヱタヒ、タヤフヤ、、、、ホヤタヤヒタヒ、ヤエイホヱルウ。反シ

對馬

フ、ホ、ホ、フホ、。ホウ、ホヱウ、、ホ。ホヱヱウ、ホヱウ、ホ。高音リ、ヒヒ。、、リヤ、。ヒリ、ヤ、。ヤ、タヤタヱ、。ヤタヤタヱウ。ヱヤヱウホ。

おろしホウ、ホヱウ、、ホ。ホヱ、ウ、ホ。ヱウ、ヱヤヱ。ヤタヤタヱウ。ヱタヱウホ。

二段の序

タ、ヒ、。、、タヒ、。ヒ神、ヒ上神、ヒ。ヒ上上神神ヒ。上神、ヒ。

高音おろしは初段同前、三段めは二段めのごとくに吹きてまをおなじごとくにして、手を吹入れたるものなり。其の手さだまらず。

さがりは

ヒイ、、ヒイ、。、、、ヒ、。ヒイヒイ、ヒ、イヤヱ。、、ウヱ、。ヱヱヤタ、。ヒイイホ。

是を何べんも吹くなり。則ち程拍子は笛の如くなり、此の内おなじ字の重なりたる所の吹きやう、何にても

ふさぎたる指を少しうごかしたる物なり。たとへば、フの字かさなりたる時は四の指をうごかすべし。ホの指のかさなるは時三の指をうごかすべし。ウの指かさなる時は二の指を動すべし。ヱの重なる時は一の指を動すべし。ヤの重なる時はうらの指を動すべし。リの重なる時は一の指を動すべし。ヒの重なる時は三の指を動すべし。神の字の重なる時は二の指を動すべし。いの字の重なる時は三の指にて打つべし。上の重なりたる時は二の指を動すべし。たの重なる時は三の指を動すべし。ちの字の重なる時は二の指を動すべし。又音取は、たとへば一越の調子を吹かんと思へば、ウフ、ホフ、ウ。リウリウフウ是を呂の音取と云ふ。同律の音取ウリヤリヤヱ。ウリウリウフウ此ごとくに吹きて其の後一越の手にても又歌にても吹くべし。何れもかくの如くに音取ある也。

一節切起

それ竹に孔をえりて物の音を出す事は、唐にては武帝の時丘仲といひし人より始まり、我が朝にては、神代に天鈿女命天の香山の竹をとりて節間に風孔をえりて、和氣を通じ給ひしよりおこれり。横笛虚無尺八はさらにもいはじ、一節切は唐にてはこれを洞簫と名づけて、東坡が赤壁の客も吹きもてあそび、佛世には六祖も吹き給ひて鳴東來の唱歌あり。我が朝にてはそのかみ異人ありて、宗佐老人に傳へしより始めて、其のゝち宗佐高瀬備前守につたへ、備前守は實相坊并に尼子同宮内少輔につたへ、實相坊は教院につたへ、教院は安田城長につたへ、城長は大森宗勳につたへ、宗勳より中興して今の世に是齋・宜竹、洞中節、指田、一音など云ふあまたの吹手蜂起せり。されども手にくはしくして亂曲にうとく、あるひは亂曲に鍛練して手におろそかなるのやまひを免れず。予も宗勳の流れを汲みて年比是を手にし、是を口にして手をきはめ、亂曲を吹きおほえぬ。亂曲は此の家に嫌ふことなれども、一節切は樂器の外なれば、遊山翫水の折にふれば、何かは苦しかるべきと予が了簡より、當世はやる

小歌の唱歌に吹きあはせて、殘らず口傳を書付け侍る。されば口傳のうへに性骨を加へて心を入るゝ事第一の事也。呂律の物にかなはざるは、人の過なり器の失にあらずとこそ、大神の景茂も申侍りし。

元祿十二己卯暦

永田調兵衛板行

紙鳶終

第十九　大　幣

大怒佐序

芳野の山には春の花をながめ、瀧落には夏の涼氣を納れ、しゝをどりには秋のうれひを慰め、林雪には冬の木梢をさかやかすも、皆三味の線の徳にこそあめれ。されば此の藝つたへて久しく、其の間名に負ふ名人多しといへども、殊に近頃あづまに淺利檢校佐山檢校、玉敷の都にては朝妻勾當といふ上手ありて、當風に新曲を引出し、唱歌をつくりて世につたへしをかきあつめて、おほろおほろのすき人にひろめ侍りぬ。されば書にあらはして引きやうを知らしめんは、木馬にて乘りかたを習ひ、柱に膠するに似たりとや言はましけれど、げには遠き所も出でたつ足もとより始まり、高き山も麓の塵ひぢより成りてあま雲たなびくまでおひのほれるが如くなれば、諸藝ともにはじめより堪能には到りがたければ、三味線の曲その品〳〵も大怒佐の引く手あまた書きあつめ、一二の卷には引きやう、三の卷には本手破手の唱歌、四の卷には新曲唱歌をあらはし、全部四卷として梓に入れぬ。庶幾ば淺利佐山朝妻の箸篋にもいたらしめんと思ふ事しかなり。

大怒佐目錄　三味線初心書

一之卷

一三味線起之事
一同ならひやう心得の事
一同調子あはせ習様の事
一同二あがりの調子合様の事
一同三さがりの調子合様の事
一同二あがりと本調子と合様の事
一同琴と調子合様の事
一同二あがりにして琴と調子合様の事
一同一二三の糸の聲の事
一よしの丶山引様の事 幷ニ唱歌色々
一すががきのひきやうの事
一獅子踊の前歌引様 幷ニ唱歌色々
一獅子踊の引様の事
一をかざきぢよろしゆ引様の事

二之卷

一りんぜつの引様の事
一當世なけぶしの引様 幷ニ唱歌色々
一れんぼながし引様の事

三之卷

一本手之唱歌　七組
一破手之唱歌　十三破手

四之卷

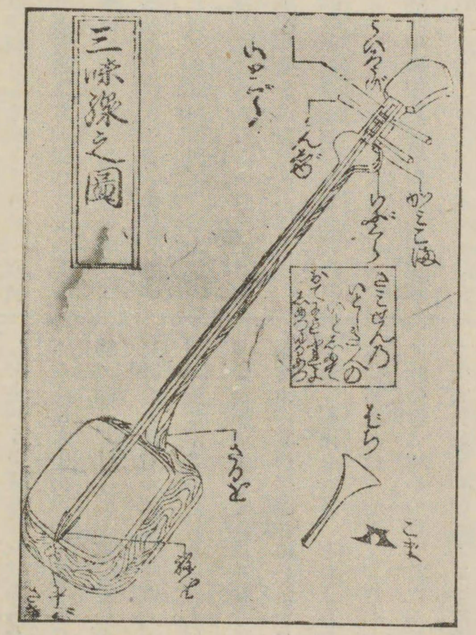
一江戸淺利檢校佐山檢校京朝妻勾當當風引出しの手新曲歌之唱歌

三味線之起

三味線の起は永祿年中に琉球國より是をわたす。其の時は蛇皮にてはりて二絃なる物なり。泉州堺の琵琶法師中小路といひける盲目に人のとらせたりけるを此の盲目喜びて調べつゝ心見けれど、をしへ置かざれば音律かなはず、是を心うく覺えて、長谷の觀音へ詣で、一七日參籠し引きやうを祈りしに、あらたなる靈夢有りて、階をくだる時に大中小の糸三すぢ盲目が足にかゝる。是より三筋の糸をかけて引くに、無盡の色音いでたり。それより三絃にきはむる故に三味線としかいふ。其の砌はむさと引きてなぐさみとせしに、しばらくして虎澤といひし盲目是を引きかため、本手破手といふ事をさだめて人に是を傳ふ。其の後澤住といふ盲目有りて是を引覺え、歌にのせて引出したり。それより公家武家のうちに賞翫させ給ふ方おほく有りて、みづからも引かせ給ふ。其の後は此の器に緒をつけて首にかけて引くを用とす。其ののち平家のおもかげにして淨瑠璃といふ物はじまりつゝ、語出でたりしかば、琵琶を引くごとくに、淨瑠璃といふ事をのせて三味線を引きはじめたるは、澤住がなす所なり。而して後寛永のはじめ、攝州加賀都城秀といふ座頭

兩人世に三味線を引出だすに、此の堪能なる事古今に獨歩せり。東武に走りて大家高門のもてあそびものとなり、既に旨目の極官に昇進す。加賀都は柳川檢校、城秀は八橋檢校となれり。

今にいたり三味線において柳川流八橋流といふは是なり。其ののち出世したる檢校勾當の中に此の兩檢をあざむく程の名人あまたあれども、先づ柳川八橋兩檢は三味線の曩祖たり。是によつて今世三味線の工人に八橋の柳川のといふも、此の名字をゆるされたる者なり。



習やう心得の事

三味線の習ひやうは、先づよく引く人の引き給ふに心をつけ、撥の持ちやう指つかひいろの付けやうを見るべし。撥は手のうち成程かろく強からずしなやかに持習ふべし。撥に力を入れ強く持ち引く時は、早き事引く時撥まはらずぎしつき、糸の色音出でず聞きづらきものなり。糸をおさゆる指は人さし指なり。紅さし指中指にてもおさゆる。是を小手といふなり。まづ第一に心がけべきは調子を聞きならふべし。

調子之事

それ三すぢの糸調子あはする事、書くに書かれず、教へて教へにくきことなり。われと心をつけ聞きならふべし。先づ一の糸を如何やうともそれ〳〵にあはせ、二の糸一より心程たかく、三の糸二より心程たかく合すべし。是にても中々合點ゆくまじ。誠や誰やらんいひし如く、よく引く人にあはせてもらひ、糸三筋ながらに一文字に墨を付け、あがりさがりのなきやうに同じ所につけおきて引き聞きならふべし。糸ゆるまれば墨さがり、しまり過ぎれば墨あがる。髪筋のはゞ程あがりさがり有りても一調子ちがふものなり。是にてよく〳〵氣をつけ聞覺えべしと云ひしは、げによき了簡と覺え侍る。

二あがり調子之事

二あがり調子は、本調子に合せて二のちぶくらのきはより一寸程下をおさへ打つて見て、其の音程に二をあぐれば二あがりの調子となるなり。

三さがりの調子之事

一と二と本調子に合せ、三を二より一しめ下ぐるなり。三さがりにて引く事何にても二あがりにて引かれずといふ事なし、かるが故に今世にあまり用ひず。

二あがりと本調子と合樣

二あがりと本調子と何にても連引きする時調子合樣は、二あがりの方の二を本調子の一へ移しあはせ、二三は其の一に應じて本調子にあはするなり。

三味線と琴と調子合樣

▲三味線　一ノ糸　琴ノ三ノ糸なり
▲三味線　二ノ糸　琴ノ五ノ糸なり
▲三味線　三ノ糸　琴ノ八ノ糸なり
▲三味線　一ノ上を　おさへてノ　琴ノ四ノ糸なり
▲三味線　二ノ上を　おさへてノ　琴ノ六ノ糸なり
▲三味線　二ノ下を　おさへてノ　琴ノ七ノ糸なり
▲三味線　三の上を　おさへてノ　琴ノ九ノ糸なり
▲三味線　三ノ中を　おさへてノ　琴ノ十ノ糸なり
▲三味線　三ノ中を小手つかひおさへてノ　琴ノ（十一ノ糸なり是をトと云ふ）

▲三味線下より二番めのかん小手ノ下　琴ノ（十二ノ糸なり是をイと云ふ）

▲三味線下三ノかん大　琴ノ（十三ノ糸是をキンと云ふ）

三味線二あがりにして琴と調子合様

▲三味線一ノ糸　琴ノ五ノ糸

▲三味線二ノ糸　琴ノ八ノ糸也

▲三味線三ノ糸　琴ノ（十三ノ糸キンと云ふ）

右之通にて合すなり。よく〳〵御心がけ有るべし。

糸之聲の事

一ノ糸

ゑ　といふは　はなしてうつを云ふ

ろ　といふは　すくふをいふ

つ　といふは　おさへてうつを云ふ

る　といふは　おさへてすくふを云ふ

ら　といふは（はなしてうつてすくふをいふ）

れ　といふは（おさへてうつてすくふをいふ）

二ノ糸

つ　といふは（上をおさへてうつをいふ）

る　といふは　おさへてすくふを云ふ

ろ　といふは（はなしてすくふをいふ）

ん　といふは（はなしてうつを云ふ又とともいふ）

つん　といふは（中程をおさへうつをいふ）

てん　といふは（中程をおさへ上へうつてあがるを云ふ）

るん　といふは（上をおさへうつてすくふをいふ）

ろん　といふは（はなしてうつてすくふをいふ）

三ノ糸

こ　といふは（はなしてうつを云ふ又てんともいふ）

れ　といふは（はなしてすくふ事又れんともいふ）

ち　といふは（おさへてうつを云ふ又ちんともいふ）

り　といふは（おさへてすくふを

ち）といふは（おさへてうつてすくふをいふ）

ま）といふは（はなしてうつてすくふをいふ）

右一二三之糸の聲、そらにて覺え引きならふ程、はやくおぼゆるなり。

吉野之山

よし　一ノ上をおさへ一つ打ち二をはなして二つ打つなり

の〳〵　一をはなし二つ打ち二をおさへ一つ打ち又はなして二つ打つ

やまを　一ノ上をおさへ一つ打ち二をはなして一つうちすくひ又二つうつなり

ゆき　二ノ上をおさへて二つ打ち又はなして一つ打ちすくひ一へはやめてゆき一ノ上をおさへ一つ打ち二へはやくおり一つうつなり

かと　二ノ上をばおさへ二つ打ち又はなして二つ打ち一へはやくゆき一をおさへて一つ打ち又はなして一つ打つなり

見れば　一ノ上をおさへ一つ打ち二をはなし一つうちすくひ一をおさへ一つ打ち二を二つ打つなり

ゆきでは　二ノ上をおさへ一つ打ち同中程をばおさへ一つ打ち三をはなして二つ打ち又二ノ中程をおさへ一つ打ち三をはなして一つ打つなり

あら　三ノ上をおさへ一つ打ち又中程にておさへ打ちすくふ

でん　三をはなし一つ打ちすくひ二ノ中程をおさへ一つ打ち又上をおさへて一つうつなり

やあ　二ノ上をおさへ打ち又中程をおさへ打つなり

これの　三をはなし二つ打ちはやく二ノ中程へうつり二ノ中程をおさへ一つ打ち上へはやくあがり上にてもおさへ一つ打ち又はなし二つ打つ

はなの　二ノ上をおさへ二つ打ち又はなして一つ打ちすくひ一をおさへ一つ打ち二をはなし一つ打つなり

よのん〳〵　二ノ上をおさへ一つ打ち同中程にておさへ一つ打ち三をはなし一つ打つなり

ふゞき　二ノ上をおさへ一つ打ちすくひ一をおさへ打ち又はなし打つなり

やあこれの　一をおさへて一つ打ち二をはなして一つ打ち同上をおさへ一つ打ち又はなし一つ打ち又一をおさへ一つ打ち又はなして二つ打つなり

▲これから見れば、近江が見ゆる、笠買うてたもれんゝ、やあこれの、近江菅笠をんゝ、やあこれの。

▲近江の笠は、なりがようて着よて、しめ緒が長うてんゝ、やあこれの、なんぼ着よござるんゝ、やあこれの。

▲なれ〳〵茄子・背戸のやの茄子、ならねば嫁のんゝやあこれの、嫁の名の立つにんゝ、やあこれの。

▲龍田の川を、錦かと見れば、錦ではあらでんゝ、やあこれの、紅葉柵（しがらみ）よのんゝ、やあこれの。

▲月日の立つも、君ゆゑしらぬ、鶯鳴きてんゝ、やあ是の、春を知らするのんゝ、やあこれの。

▲さす杯に・匂ひをこめて松竹、千代とんゝ、やあこれの、廻（めぐ）る杯のんゝ、やあこれの。

▲ゆふべも鹿の子、今宵も鹿の子、召しかへ人のんゝ、
やあこれの、人の推するにんゝ、やあこれの。
右之唱歌うたひやうも引きやうもよし野の山と同事

すがゝき

トントツトロ　二をはなし二つ打ち一をおさへ打ち又はなし打ちすくふ　ツントン　二をはなし一つ打ち二をおさへ一つ打つ　テツツン　三を一つ打ち二ノ中程をおさへ一つ打つて上へはやくあがり上にてもおさへ一つ打つ　トロンツトロ　二を一つ打ちすくひ一をおさへうつて又はなし打ちすくふ　ツントン　一をおさへ打ち二を一つ打つなり　テツツン　三を一つ打ち二ノ中程をおさへ一つ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ打つ　トロンツトロ　二を打ちすくひ一をおさへ打ち又はなし打つてすくふ　トツンツトロツトツントン　二を一つ打ち一をおさへて二つ打ち二を打ちすくひ又一をおさへ一つ打ち又二を一つ打ち又二ノ上をおさへ一つ打ちなり　テツンツテレツテ　三を一つ打ち二ノ中程をおさへ二つ打ち三を打ちすくひ二ノ中程をおさへ一つ打つ　チンチリチンチリテレツテ　三ノ上をおさへ一つ打つ　チンチリトチンチチンチリテツツテ　三ノ上をおさへ一つ打ち同中程をおさへ打ちすくひ又中程をおさへ二つ打ちすくひ又はなし一つ打ちすくひ二ノ中程をおさへ一つ打ち三を一つ打つ也

三ノ上をおさへ一つ打ち同中程をおさへ打ちすくひ二を一つ打ち三ノ中程を小手をさしおさへ打ち又小手をはなし人さしておさへ三つ打ちすくひ又みなはなし一つ打ち二ノ中程を押へ二つ打ち又三をはなし一つ打つなり　チンチリトチンチンチリテツツテ　三ノ上をおさへ一つ打ちすくひ二を一つ打ち同中程をおさへ打ちすくひ二を一つ打ち又三ノ中程を小手をさしおさへ打ち又小手をはなし人さし指ばかりにておさへ三つ打ちすくひ又はなしてすくふ

つ打ち二ノ中程をおさへ二つ打ち又三をはなして一つ打つなり　トチチリチリツテチン　二を一つ打ち三ノ上をおさへ二つ打ちすくひ同中程をおさへ打ちすくひ二ノ中程をおさへ打ち三ノ中程おさへ打ち又小手をさしおさへ一つ打つ　チンチリチリチリツツンツルチンチリチリチリツンツル　三ノ中程より二寸程下にておさへ二つ打ちすくひ同所にて小手をさし打つてはすくひ〳〵二ど引きすくふ時は小手をはなし其の小手にて二ノ中程より二寸程下をおさへ二つ打ちすくふ同じ事二ど引きかへす也　チンチリチンチリ　三ノ中程より二寸程下をおさへ二つ打ちすくひ又それより少し下へさがり二つ打ちすくふ也すくふ時小手をさすなり　トチチリチリチン　二を一つ打ち三ノ中程より二寸程下をおさへ一つ打ち又小手をさして打つてはすくひ〳〵二ど引きすくふ時小手をはなし又二ノ中程まで上りおさへて一つ打つなり　トチチリチリテレツテ　二を一つ打ち三ノ中程をおさへはやめて二つ打ちすくひ又はなして打ちすくひ二ノ中程をおさへ一つ打つ　トチチリテツツテ　二を一つ打ち三ノ中程をおさへ一つ打ちすくひ又二ノ中程をおさへ一つ打つ　チンチンチンテレツテチ　二を一つ打ち三ノ中程をおさへ一つ打ちすくひ又はなし一つ打ち二ノ中程をおさへ二つ打ち三を一つ打つ　トチチリツテチン　二を一つ打ち三ノ上をおさへ二つ打ちすくひ同中程をおさへ打ちすくひ小手にて二ノ中程をおさへ二つ打ち二つめに小手をさすトチチリチリチン　二を一つ打ち三ノ中程より二寸程下をばおさへ一つ打ち又小手をさし打つてはすくひ〳〵二ど引きすくふ時小手をはなす又三ノ中程迄あがりおさへて一つ打ち三ノ中程をおさへ二つ打ちすくひ又はなし一つ打ち二ノ中程をおさへ二つ打ち三を一つ打つ　チンチンチンテレツテツツン　二ノ中程をおさへ一つ打ち三ノ上をおさへ一つ打ちすくひ又はなして一つ打ち二ノ中程おさへ打ちはやめて上へ上りおさへ打ち又はなして一つ打つ

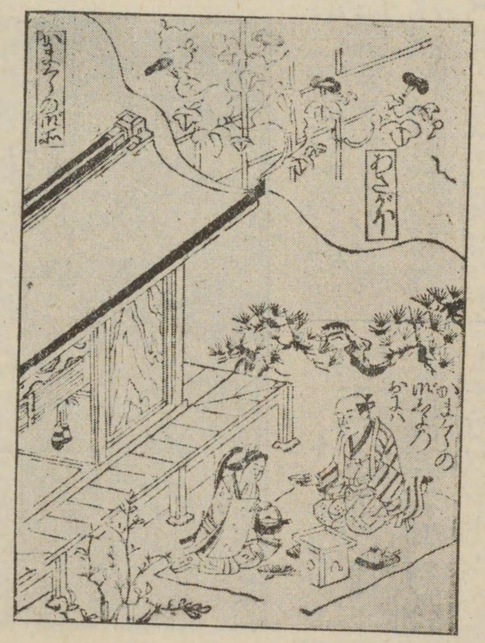
右同じ事を三べん引きかへしすがゝき一ぺんと云ふ。

然れどもきはまりてきはまらざる事なれば、きこんに引き給ふべし。此の外のすがゞきに

▲二あがり菅垣（すががき）▲江戸すがゞき▲さんや菅垣　とてあり。

獅子踊前歌

あさがほの　二ノ中程をおさへ一つ打ち三を一つ打ち三ノ上をばおさへ一つ打ちて又中程をおさへ打つてすくひ二一つ打つ　はなの　三ノ上をおさへ二つ打ち同はなして二つ打つ　うへなる　二ノ中程をおさへ一つ打ち三を二つ打ち二ノ上をおさへ二つ打ち又はなし打つてすくひ又一つ打つなり　つゆより　一をおさへ一つ打ち二をはなして打つてすくひ又一をおさへ打ち二をはなし打ちすくひ又一をおさへ打ち二をはなして一つ打つなり　うすき　二ノ上をおさへ二つ打ち又はなし一つ打ち又中程をおさへ一つ打ち三を二つ打ち又二ノ中程をおさへ打ち三を一つ打つ　おなさけを　三ノ上をおさへ一つ打ち同中程をおさへ二つ打ち二ノ上をおさへ打ち三を一つ打ちはやく二ノ中程をおさへ一つ打ち又はなして一つ打つなり　ゑいそりや　二をはなし一つ打ち又おさへて一つ打ち又はなして一つ打ち一をはなして二つ打つなり　つゆより　一をおさへ打ち二をはなしてすくひ又一をおさへ一つ打ち二をはなし打つてすくひ又一をおさへ打ち二をはなして一つ打つなり　うすき　二ノ上をおさへ二つ打ち又はなして一つ打ち又中程をおさへ一つ打ち三を二つ打ち又二ノ中程をおさへ打ち三を一つ打つ　おなさけを　三ノ上をおさへ一つ打ち同中程をおさへ二つ打ち二ノ上をおさへ打ち三を一つ打ちはやく二ノ中程をおさへ一つ打ち又はなして一つ打つなり



▲身を窶す、賤が思ひを、夢ほど様に、知らせたや、ゑいそりや、夢ほど様に知らせたや。

▲浅ましや、賤が身はたゞ、一夜で落ちて名を流す、ゑいそりや、一夜でおちて名をながす。

▲それとても、苦しうござらぬ、若いが二たびあるにこそ、ゑいそりや、枯木に花が咲くにこそ。

▲鎌倉の、御所のお庭で、薄と雪とが戯をする、ゑいそりや、薄と雪とが戯をする。

▲あさましや、雪は消えゆく、薄は穂に出て亂れあふ、ゑいそりや、薄は穂に出てみだれあふ。

▲鎌倉の、御所のお庭で、十七小女郎が酌をとる、ゑいそりや、十七小女郎がしやくをとる。

▲酒よりも、肴よりも、十七小女郎が目についた、ゑいそりや、十七小女郎が目についた。

▲目につかば、つれてござれの、江戸品川の奥までも、ゑいそりや、虎臥す野邊のするまでも。

右の唱歌うたひやうも引きやうもあさがほと同じ事なり。しゝをどり引く時此の歌をまへに引く故前歌といふなり。きはまりてきはまらざる事なり。

獅子踊

ツンツンツン　二ノ中程をおさへ三つ打つなり　テンテツツン　三を二つ打ちはやく二へゆき二ノ中程をおさへ一つ打ち一ノ中程を小手にておさへ打つなり　ツンテツンツテレ　二ノ中程をおさへ一つ打ち三を一つ打ち又二ノ中程をおさへ二つ打ち三を打ちすくふ　チテトツンツテレ　三ノ上をおさへ一つ打ち同はなし一つ打ち一を一つ打ち二ノ中程をおさへ二つ打ちすくふなり　トチチンチンチンテ　二一つ打ち三ノ上をおさへ一つ打ち又小手をさしおさへ一つ打ち又小手をさしおさへ早めて二つ打ち三を一つ打つ也　チテツル　三ノ上をおさへ一つ打ち又はなし一つ打ち二ノ中程をおさへて打ちてすくふすくふ時小手をさすなり　トチンチ　二を一つ打ち三ノ上をおさへ一つ打ち同中程をおさへ一つ打つなり　トチンチンチンチンテ　二を一つ打ち三ノ中程を小手をさしおさへ二つ打ち又小手をはなし人さし指ばかりにておさへ一つ打ち又小手をさし早めて二つ打ち又はなして一つ打つなり。

右同じ事を二へん引きかへし、三べんめに此のおくを引くべし。

ツンツンツン　二ノ中程をおさへ三つ打つ　テンテツツン　三を二つ打ち早く二へ行き二ノ中程をおさへ一つ打ち一ノ中程を小手にておさへ引き打つなり　ツンテツンツテレ　二ノ中程をおさへ一つ打ち三を一つ打ち二ノ中程をおさへ二つ打ち三を打つてすくふなり

トチチンチリ二を一つ打ち三ノ上をおさへ一つ打ち同中程をおさへ一つ打ち又上をおさへ打つてすくふ　チチテレ三ノ中程をおさへ打つて早く上へあがり上にてもおさへ一つ打ち又はなし打つてすくふなり　ツルツテ二ノ中程をおさへ打ちすくひ又一つ打ち三を一つ打つなり　チチテツツル三ノ中程をおさへ打つて上へ早くあがり上にてもおさへ打ち又はなし一つ打ち二ノ中程をおさへ一つ打ち早く上へあがり上にてもおさへ一つ打つてすくふ　ツツントントツト二ノ中程をおさへ打つて早く上へあがり上にてもおさへ打ち二を二つ打ち一をおさへ一つ打ち又はなし一つ打つ　ツツントツント一をおさへ早めて二つ打ち二を一つ打ち一ノ上をおさへ一つ打ち又はなして一つ打つ　ツンテン二ノ中程をおさへ一つ打ち三を一つ打つなり　トチンチンテレ二を一つ打ち三ノ上をおさへ二つ打ち同はなし打ちすくふ　チチテツツント三ノ中程をおさへ打ち早く上へあがり上にてもおさへ打ち又はなして一つ打ち二ノ中程をおさへ打つて上へ早くあがり上にてもおさへ一つ打ち又はなして一つ打つ也　トチチリテレツテ二を一つ打ち三ノ中程をおさへ打ちて早く上へあがり上にてもおさへ打ちすくひ又はなし打つてすくひ二ノ中程をおさへ一つ打ち三を一つ打つなり　チチテツツントン三ノ中程をおさへ打つて早く上へあがり上にてもおさへ打ち又はなして一つ打ち二ノ中程をおさへ打つて早く上へあがり上にてもおさへ打ち又はなして一つ打つ也　テントツテツツン三を一つ打ち二を一つ打ち同中程をおさへ一つ打ち又三を一つ打ち二ノ中程をおさへ打ち早く上へあがり上にてもおさへ打つ　ツトンツトツトロ二ノ上をおさへ打ち又はなし一つ打ち一をおさへ一つ打ち二を一つ打ち一をおさへ打ち同はなし打ちすくふ　ツツントツント一をおさへ早めて二つ打ち二を一つ打ち二ノ上をおさへ一つ打ち又はなし一つ打つ　テツンチ三を一つ打ち二ノ中程をおさへ打ち三ノ上をおさへ一つ打つなり　テツツン三一つ打ち二ノ中程をおさへ打つて早く上へあがり上にてもおさへ打つ　ツトンツト二ノ上をおさへ打ち同はなし一つ打ち一をおさへ一つ打ち二をはなし一つ打つなり

是はかへしというて口（くち）のつぎに是も二へん引くなり。

口（くち）のと是とつがねてしゝをどり一通也。

右の外のしゝをどりニ

▲二あがり獅子踊▲太夫（たいふ）しゝ踊▲見（み）どり▲くもゐ▲八千代▲みだれ▲ふつすい▲さかひ▲さんや▲みやことて十色（いろ）に引きやう有り。

を　か　ざ　き

をかざきぢよろしゆ二ノ中程をおさへ一つ打ち三を二つ打ち同上をおさへ一つ打ち同中程をおさへ一つ又上をおさへ一つ打ち又中程をおさへ一つ打つ　をかざきぢよろしゆ上ノ引きやうと同じ事二へん引くなり　をかざきぢよろしゆはよいぢよろしゆ二ノ中程をおさへ一つ打ち三を二つ打ち同上をおさへ一つ打ち又はなし二つ打ち二ノ上をおさへ一つ打ち同中程をおさへ一つ打ち三を一つ打ち二ノ中程をおさへ一つ打ち早く上へあがり上にてもおさへ打ち又はなし一つ打ち一をおさへ一つ打ち二を二つ打つなり　をかざきぢよろしゆはよいぢよろしゆ上ノ引やうと同事二へん引く▲しゝおどりの切に是を引く

右の外ニ▲都（みやこ）をかざき▲ざいご岡崎▲二あがり岡崎とて有り

林（りん）　雪（せつ）

ツントントンツ一をおさへ一つ打ち二を二つ打ち又一をおさへ一つ打つ　トントツトロツト二を二つ打ち一をおさへ一つ打ち二を一つ打ちすくひ一をおさへ打ち二を一つ打つ　トツツル一を一つ打ち二ノ中程を押へ打ち早く上へあがり上にてもおさへ打ちすくふ　ツトロツトロツト二ノ上をおさへ打ち又はなし打つてすくひ一をおさへ一つ打ち二を打つてすくひ又一をおさへ一つ打ち二を一つ打つ　トツントロツトツント二を一つ打ち一をおさへ二つ打ち二を打つてすくひ一をおさへ打ち二を一つ打ち二ノ上おさへ打ち又はなし一つ打　ツンツンテンテンツン二ノ中程をおさへ二つ打ち三を二つ打ち二ノ中程をおさへ一つ打つ　テンテツトロツト三を二つ打ち早く二ノ中程おさへ一つ打ち又はなし一つ打つてすくひ一をおさへ打ち二を一つ打つ也　トチチテ二を一つ打ち三ノ中程をおさへ一つ打ち早く上へあがり上にてもおさへ打ち又はなして打つ　チチテツトロツト三ノ中程おさへ打ち早く上へあがり上にてもおさへ打ち又はなして打ち二ノ中程をおさへ打ち又はなし打ちすくひ一をおさへ打ち二をはなし打つ　テツンツテレンレ三を打ち二ノ中程をおさへ二つ打ち三を一つ打ちすくひ又一つ打つ也　トチリリチンテレ二を一つ打ち三ノ中程をおさへ打ち小手にて三つはじき又上をおさへ打ち又はなし打ちすくふ　ツテチ、テツ、ン二ノ中程をおさへ打ち三を一つ打ち同上をおさへ打ち早く中程へおりおさへて一つ打ち又はなして一つ打ち二ノ中程をおさへ打ち早く上へあがり上にてもおさへ一つ打つ　ツトンツトロツ、ト二ノ上をおさへ一つ打ち同はなし一つ打ち一をおさへ一つ打ち二を打つてすくひ一をおさへ打ち二をはなして一つ打つなり　トツンツトロツトツン二を一つ打ち一をおさへ二つ打ち二を打ちすくひ一をおさへ打ち二を打ち又二ノ上をおさへ一つ打つ也　ツンツンテンチリンチ二ノ中程をおさへ二つ打ち三一つ打ち三ノ上をおさへ打つてすくひ三ノ中程をおさへ打つなり　トチンチンチンチリテレツテ二を一つ打ち三ノ中程小手をさ

しおさへ二つ打ち又小手をはなし一つ打ち又小手をさし二つ打ちすくひ又みなはなし打つてすくひ二の中程をおさへ一つ打ち三を一つ打つ

トチチリトチチリテレツテ　二一つ打ち三ノ上をおさへ二つ打ちすくひ又二を一つ打ち三ノ中程をおさへ二つ打つてすくひ又はなし一つ打つてすくひ又二ノ中程をおさへ一つ打ち三を一つ打つ

トチチリチリツテチン　二を一つ打ち三ノ上をおさへ二つ打つてすくひ又中程をおさへ打つてすくひ又二ノ中程をおさへ打ち三ノ中程をおさへ打ち又小手をさし一つ打つ

チリンチトチンチンチリチリツルンツ　三ノ中程より二寸程下をおさへ打ちすくひ又一つ打ち二を一つ打ち三ノ中程より二寸程下を小手をさしおさへ二つ打ち又小手をさし打つてはすくひ〳〵二へん引きすくふ時小手をはなし二ノ中程より二寸程下をおさへ打つてすくひ又一つ打つ也

チリツテチリリツルンツ　三ノ中程より二寸程下にておさへ打ちすくひ二ノ中程より二寸程下にておさへ打ちすくひ〳〵二へん引きすくふ時は小手をはなし又中程まで

おさへ打ち三ノ中程より二寸程下をおさへ打ち同小手をさし打つてはすくひ〳〵二へん引きすくふ時は小手をはなす也二ノ中程より二寸程下をおさへ打ちすくひ又一つ打つ也

チリツテチンチリ　三ノ中程より二寸程下をおさへ打ちすくひ二ノ中程より二寸程下を小手にておさへ打ち同又すこし下へさがりおさへ二つ打ちすくひすくふ時小手をさす也

トチチリチリチン　二を一つ打ち三ノ中程より二寸程下をおさへ打ち又小手をさし打つてはすくひ〳〵二へん引きすくふ時は小手をはなし又中程へあがりおさへ打つなり

トチチリテレツテ　二を一つ打ち三ノ中程をおさへ二つ打ちすくひ又はなし一つ打ちすくひ又二ノ中程をおさへ一つ打つ

トチチリチ　三ノ中程より二寸程下をおさへ打ちすくひ同中程おさへ打ちすくひ二ノ中程をおさへ打ち又小手をさし打つなり

トチチリチリチン　二を一つ打ち三ノ上おさへ二つ打ちすくひ同中程おさへ打ちすくひ二ノ中程をおさへ打ち三ノ中程より二寸程下をおさへ一つ打ちすくひ〳〵二と引きすくふ時は小手をはなし又中程へ打ち二を一つ打つ

トツツル　一を一つ打ち二ノ中程をおさへ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ打ちすくふ

ツトロツトロツト　二ノ上をおさへ打ちすくひ一をおさへ一つ打ち二を打つてすくひ又一をおさへ一つ打ち二を一つ打つ

トツンツトロツトツントン　二を一つ打ち一をおさへ二つ打ち二を一つ打つてすくひ一をおさへ打ち二を一つ打ち二ノ上をおさへ打ち又はなして打つ

ツンツンテンテンツン　二ノ中程をおさへ二つ打ち二を一つ打ち三を二つ打ち二ノ中程をおさへ一つ打ち又はなし一つ打ちすくひ一をおさへ打ち二を一つ打つ

テンテツトロツト　三を二つ打ちはやく二ノ中程おさへ一つ打ち又はなし一つ打ちすくひ一をおさへ打ち二を一つ打つなり

トチチテ　二を一つ打ち三ノ上をおさへ二つ打ちすくひ二ノ中程をおさへ一つ打ち三ノ中程をおさへ打ち又はなし一つ打ち上へあがり上にてもおさへ一つ打ち三ノ中程をおさへ打ち又はなし一つ打つ

チチテツトロツト　三ノ中程をおさへ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ打ちすくひ又はなして打ち二ノ中程をおさへ打ち又はなし打ちすくひ一をおさへ一つ打ち三ノ上をおさへ一つ打ち二ノ中程をおさへ一つ打ち三ノ上をおさへ二つ打ちすくひ又一つ打つ

トチンチンテレンレ　三を一つ打ち二ノ中程をおさへ二つ打ち三を一つ打ちすくひ又一つ打つ

ツテチチテツツン　二を一つ打ち三ノ上をおさへ二つ打ち又三をはなして打ちすくふ

ツテ　二ノ中程をおさへ打ち三を一つ打ち同中程をおさへ一つ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ一つ打ち又はなして一つ打ち二ノ中程をおさへ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ一つ打つなり

ツトンツトロツト　二ノ上をおさへ一つ打ち同はなし一つ打ち一をおさへ一つ打ち二を打つ

あがりおさへ一つ打つなり

トチチリテツツテ　二を一つ打ち三ノ中程おさへ二つ打ちすくひ又はなして一つ打ち二ノ中程をおさへはやめて二つ打ち三をはなして一つ打つ

トチチリチリンチ　二を一つ打ち三ノ上をおさへ二つ打ち三ノ中程をおさへ打つてすくひ又一つ打つなり

トチンチリンチテレツテ　二を一つ打ち三ノ中程を小手をさしおさへ打ちすくひ二を一つ打ちすくひ又一つ打つなり

チンチリトチンチリテレツテ　三ノ上をおさへ打ち同中程おさへ打ちすくひ二を一つ打ち三ノ中程小手をさしおさへ一つ打ち又小手をはなし人さし指ばかりにておさへ三つ打ちすくひ又皆はなし打つてすくひ二ノ中程をおさへ一つ打ち三をはなし一つ打つ

チンチンチンテン　三ノ上をおさへ一つ打ち同中程をおさへ打ち又上をおさへ打ち又はなして打つ

ツンチリテツツントン　二ノ中程をおさへ一つ打ち三ノ上をおさへ一つ打ちすくひ又はなして一つ打ち二ノ中程をおさへ一つ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ打ち又はなして一つ打つなり

同二段目

ツントンツン　一をおさへ一つ打ち二を二つ打ち又一をおさへ一つ打つ

トントツトロツト　二を二つ打ち一をおさへ一つ打ち二を一つ打ちすくひ一をおさ

てすくひ一をおさへ打ちニをはなして一つ打つなり　トツンツトロツトツン　二を一つ打ち一をおさへ二つ打ち二を打ちすくひ一をおさへ打ち二を打ち又二ノ上をおさへ一つ打つなり　ツンツンテンチリンチ　二ノ中程をおさへ二つ打ち三を二つ打ち三ノ上をおさへ打ちすくひ三ノ中程をおさへ打つ也　トチンチンチンチンチリテレツテ　二を一つ打ち三ノ中程小手をさしおさへ二つ打ち又小手をはなし一つ打ち又小手をさし二つ打ちすくひ又皆はなし打つてすくふ二ノ中程をおさへ一つ打ち三を一つ打つ也　トチチリトチチリテレツテ　二を一つ打ち三ノ上をおさへ二つ打ちすくひ二を一つ打ち三ノ中程をおさへ二つ打ちすくひ同はなし打ちすくひ二ノ中程をおさへ打ち三を一つ打つなり　トチチリチリンチ　二を一つ打ち三ノ上をおさへ二つ打ちすくひ又中程をおさへ打ちすくひ又打つ　トチンチチリンリチンチン　二を一つ打ち三ノ中程おさへ下へ少しおし打ち又中程をおさへ二つ打ちすくひ又打ち三ノ上をおさへ打ち又中程をおさへ打つ　トチチリトチチリ二を一つ打ち三ノ中程より一程下をおさへ打ちすくひ二つ打ち三ノ中程へ上り中程にてもおさへ打ちすくふ　トチチリテツツテ　二を一つ打ち三ノ中程をおさへ二つ打ちすくひ三をはなして打ち二ノ中程をおさへ二つ打ち三を打つ　トチチリチリツテチン　二を一つ打ち三ノ上をおさへ二つ打ちすくひ二ノ中程をおさへ打ちすくひ又中程をおさへ打ち又小手をさし一つ打つ

打つなり　トチチリテツツテ　二を一つ打ち三ノ中程をおさへ二つ打ちすくひ又はなして一つ打ち二ノ中程をおさへはやめて二つ打ち三をはなして一つ打つ　トチチリチリンチ　二を一つ打ち三ノ上をおさへ二つ打ちすくひ又中程をおさへ打ちすくひ又一つ打つ也　トチンチリンチテレツテ　二を一つ打ち三ノ中程を小手をさしおさへ打ちすくひ二ノ中程をおさへ打ち三を一つ打つなり　チンチリトチンチリテレツテ　三ノ上をおさへ打ちすくひ二を一つ打ち三ノ中程小手をさしおさへ一つ打ち又小手をはなし人さし指ばかりにておさへ三つ打ちすくひ又皆はなし打ちすくひ二ノ中程をおさへ一つ打ち三をはなし一つ打つ　チンチリチリテレ　三ノ上をおさへ一つ打ち同中程をおさへ打ちすくひ又上をおさへ打ちすくひ又はなし打ちすくふ　ツテチリテツツントン　二ノ中程をおさへ一つ打ちはやく三へおり三を一つ打ち又三ノ上をおさへ打ちすくひ同はなし一つ打ち二ノ中程をおさへ一つ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ一つ打ち又はなして一つ打つなり

同　三　段　目

ツントンツン　一をおさへ一つ打ち二を二つ打ち又一をおさへ一つ打つ

トントツトロツト　二を二つ打ち一へ早くうつり一をおさへ一つ打ち二を一つ打ち

チリンチトチンチンチリチリツルンツ　三ノ中程より二寸程下をおさへ打ちすくひ又一つ打ち二を一つ打ち三ノ中程より二寸程下を小手をさしおさへ二つ打ち又小手をさし打つてはすくひ〳〵二へん引きすくふ時小手をはなし二ノ中程より二寸程下を小手にておさへ打ちすくひ又一つ打つなり　チリツテチリチリツルンツ　三ノ中程より二寸程下にておさへ打ちすくひ二ノ中程より二寸程下にておさへ打ち三ノ中程より二寸程下をおさへ打ちすくひ〳〵二へん引きすくふ時は小手をはなす也二ノ中程より二寸程下をおさへ打ちすくひ又一つ打つなり　チリツテチンチリ　三ノ中程より二寸程下をおさへ打ちすくひ二ノ中程より二寸程下をおさへ打ち又三ノ中程より二寸程下をおさへ打ち同又少し下へさがりおさへ二つ打ちすくひすくふ時は小手をさす　トチチリチリチン　二を一つ打ち三ノ中程より二寸程下をおさへ打ち又小手をさし打つてはすくひ〳〵二ど引きすくふ時は小手をはなし又中程へあがりおさへ打つなり　トチチリテレツテ　二を一つ打ち三ノ中程をおさへ二つ打ちすくひ又はなし一つ打ちすくひ又二ノ中程をおさへ一つ打ち三を一つ打つ也　トチチリチリツテチン　二二つ打ち三ノ上をおさへ二つ打ちすくひ同中程をおさへ打ちすくひ二ノ中程をおさへ打ち三ノ中程をおさへ打ち又小手をさし打つ也　トチチリチリチン　二を一つ打ち三ノ中程より二寸程下をおさへ一つ打ち三ノ上をおさへ打ちすくひ又小手をさしおさへ打つてはすくひ〳〵二ど引きすくふ時は小手をはなし又中程まであがりおさへ一つ

打ちすくひ一をおさへ打ち二を一つ打つ　トツツル　一を一つ打ち二ノ中程をおさへ打ち早く上へあがり上にてもおさへ打ちすくふ　ツトロツトロツト　二ノ上をおさへ打ち又はなし打ちすくひ一をおさへ一つ打ちすくひ又一をおさへ一つ打ち二を一つ打つなり　トツツトロトツツロツト　二を一つ打ち一をおさへ二つ打ち二を打つてすくひ一を一つ打ち二ノ中程をおさへ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ打ちはやくはなしすくひ一をおさへ一つ打つ也　ツンツンテンテンツン　二ノ中程をおさへ二つ打ち三を二つ打ち二ノ中程をおさへ一つ打つ　テンテツトロツト　三を二つ打ちはやく二ノ中程おさへ一つ打ち又はなし一つ打ちすくひ一をおさへ打ち二を打つ　トチチチテ　二を一つ打ち三ノ中程をおさへ一つ打ち上へはやくあがり上にてもおさへ一つ打ち又はなして一つ打つ　チチテツトロツト　三ノ中程をおさへ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ打ち又はなして打ち二ノ中程をおさへ打ち又はなし打ちすくひ一をおさへ打ち二をはなし一つ打つ　テツンツテレンレ　三を一つ打ち二ノ中程をおさへ二つ打ち三を打ちすくひ又一つ打つ　トチンチンテレチンテレ　二を一つ打ち三ノ上をおさへ二つ打ち又はなし打ちすくひ又おさへ一つ打ち又はなし打ちすくふ　トチチリチンテレ　二を一つ打ち三ノ中程をおさへ二つ打ちすくひ又おさへ一つ打ち又はなし一つ打ちすくふ　トチチリチ

ンチリトチチリチンチリ 二を一つ打ち三ノ中程より少し上をおさへ二つ打ちすくひ又中程おさへ二つ打ちすくひ二を一つ打ち三ノ中程小手さしおさへ早めて二つ打ちすくひすくふ時小手はなし又中程より少し上へあがりおさへ打ちすくふ也

チンチテツテ 三ノ上おさへ二つ打ち又ほなし一つ打ち二ノ中程おさへ打ちすくひ二を一つ打つ也

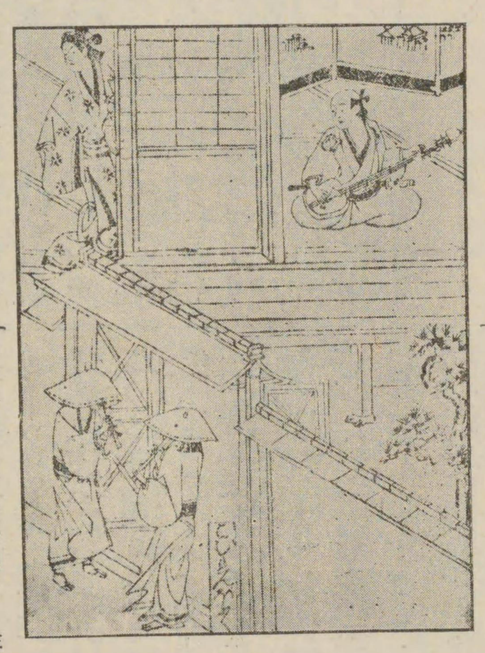
チテツツン 三ノ中程おさへ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ打ち又はなし一つ打ち二ノ中程おさへ打ちはやく上へ上り上にてもおさへ打

ツトンツトロツト 二ノ上おさへ一つ打ち又ほなし一つ打ち一をおさへ一つ打ち二を打ちすくひ一をおさへ打ち二を一つ打つなり

トツンツトロトツツロツト 二を一つ打ち一をおさへ二つ打ち二を打つてすくひ一を一つ打ち二ノ中程をおさへ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ打ち二をはなし一つ打つはやくはなしすくひ一をおさへ打つ

ツンツンテン 二ノ中程をおさへ二つ打つなり

チリンチ 三ノ上をおさへ打ちすくひ又三ノ中程をおさへ打つなり



チリチリツルンツ 三ノ中程より二寸程下をおさへ打ちすくひ又一つ打ち二を一つ打ちはなし人さし指ばかりにておさへ一つ打ち又小手をさし打つてはすくひ〳〵二より二寸程下を小手にておさへ打ちすくひ又一つ打つなり

トチンチンチンチンチリテレツテ 二を一つ打ち三ノ中程を小手をさしおさへ二つ打ち又小手をはなし人さし指ばかりにておさへ三つ打ちすくひ又皆はなし打ちすくひ二ノ中程おさへ打ち三を打つ

トチチリトチチリテツツテ 二を一つ打ち三ノ上をおさへ二つ打ちすくひ又二を一つ打ち三ノ中程をおさへ二つ打ちすくひ三をはなし一つ打ち二ノ中程をおさへ二つ打ち三をはなし一つ打つ

トチチリチリツテチン 二を一つ打ち三ノ上をおさへ二つ打ちすくひ又中程をおさへ打ちすくひ二ノ中程を小手にておさへ打ち三ノ中程をおさへ打ち又小手をさしおさへ打つなり

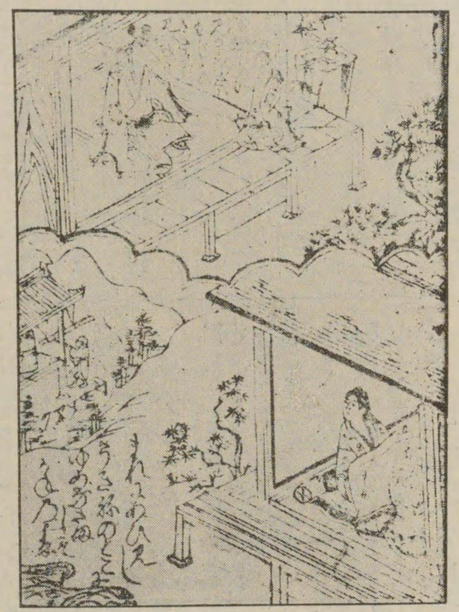
チリンチトチンチンチリチリツルンツ 三ノ中程より二寸程下をおさへ打ちすくひ又一つ打ち二を一つ打ち三ノ中程をさしおさへ二つ打ち又小手をはなし人さし指ばかりにておさへ一つ打ち又小手をさし打つてはすくひ〳〵二より二寸程下を小手にておさへ打ちすくひ又一つ打つなり

チリツテチリチリツルンツ 三ノ中程より二寸程下にておさへ打ちすくひ二ノ中程より二寸程下にておさへ打ち三ノ中程より二寸程下をおさへ打ち同小手をさし打つてはすくひ〳〵二どり引すくふ時は小手をはなす也二ノ中程より二寸程下を小手にておさへ打ちすくひ又一つ打つなり

チリト 三ノ中程より二寸程下をおさへ打ちすくひ二を一つ打ち又三ノ中程より二寸程下をおさへ打ちすくひ又少し下へおり打ちすくひ又一つ打つ

トチチリトチチリ 二を一つ打ち三ノ中程より二寸程より又下を小手をさしおさへ早めて二つ打ちすくひすくふ時小手をはなす又二を一つ打ち三ノ中程より二寸程下をおさへ打ちすくふ

トチチリチリチン 二を一つ打ち



二ノ中程より三寸程下をおさへ一つ打ち同小手をさし打つてはすくひ〳〵二ど引きすくふ時は小手をはなし又中程まであがり一つ打つなり

トチチリテツツテ 二を一つ打ち三ノ中程をおさへ二つ打ちすくひ同はなし一つ打ち二ノ中程をおさへはやめて二つ打ち三を一つ打つなり

トチンチリンチ 二を一つ打ち三ノ上をおさへ二つ打ちすくひ二ノ中程をおさへ一つ打ち三ノ中程をおさへ二つ打ちすくひ又一つ打つなり

トチンチリンチテレツテ 二を一つ打ち三ノ中程を小手をさしおさへ一つ打ち又小手をはなし人さし指ばかりにておさへ一つ打ちすくひ二ノ中程をおさへ一つ打ち三をはなして一つ打つなり

チンチリトチンチンチリテレツテ 三ノ上をおさへ一つ打ち同中程をおさへ打ちすくひ二を一つ打ち三ノ中程を小手をさしおさへ一つ打ち又小手をはなし人さし

指ばかりにておさへ一つ打ち又二つ打ちすくひ又みなはなし打ちすくひ二ノ中程をおさへ打ち三をはなし一つ打つなり
チンチンチンテンツンチリテッツン
トン　三ノ上をおさへ打ち同中程をおさへ打ち又上をおさへ打ち又はなして一つ打ち二ノ中程をおさへ打ち三ノ上
をおさへ打ちすくひ又はなし一つ打ち二ノ中程をおさへ一つ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ打ち又はなして一つ打つ

右三段つがねてりんぜつ一遍（ぺん）といふなり
右外に▲二あがりのりんぜつとて有り

れんぼながし

ツンツンテレレチチテレンレツツ
ントン　二ノ中程を二つ打ち三を一つ打ち同小手にて二つはじき同上をおさへ一つ打ち同中程をおさへ打ち同上
をおさへ打ち又はなし打ちすくひ又すくひはやく二ノ中程をおさへ打ち同はやく上へあがり上にてもおさへ打ち同はなして一
つ打つなり　ツンテンテチチテレテチチン　ノ二
中程をおさへ打ち三二つ打ち同上をおさへ打ち同上をおさへ打ち同はなし打ちすくひ又打ち同上をおさへ
打ち同中程を小手をさしおさへ打つなり　チリンチチリチチ
リチチン　三ノ中程小手をさしおさへ打ちすくひ又小手をはなし打ち又小手をさし打ちすくひ又
小手をはなし人さし指ばかりにておさへ打ちすくひ又打ち同上にておさへ打ち又中程へさがり打ちすくひ又打ち同上をおさへ

打ち同中程を小手さしおさへ打つなり　チリンチチリチリチチ
リチチン　三ノ中程を小手をさしおさへ打ちすくひ又小手をはなし打ち又小手をさし打ちすくひ
又小手はなし人さし指ばかりにておさへ打ちすくひ又打ち同上にておさへ打ち又中程へさがり打ちすくひ又打ち同上をおさへ
打ち同中程を小手をさしおさへ打つなり　チンチチリンチチリンチ
チン　三ノ中程より一寸程下をおさへ二つ打ち又中程をおさへ打ちすくひ又打ち同上をおさへ打ち又中程をおさへ
打ちすくひ又打ち同上をおさへ打ち又中程をおさへ打つ　チチチンチチチリ
ンチテレツテ　三ノ中程より少し上を小手さしおさへ早めて二つ打ち又小手をはなし人さし
指ばかりにておさへ打ち又小手をさしおさへ打ち又小手をはなし人さし指ばかりにておさへ打ち同上をおさへ打ちすくひ又打
ち皆はなして打ちすくひ二ノ中程おさへ打ち三一つ打つ　チチテレンツン
トン　三ノ中程をおさへ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ打ち同はなして打ちすくひ二ノ中程をおさへ打ちは
やく上へあがり上にてもおさへ打ち又はなし一つ打つなり　ツンツンツンツ
ンテ　二ノ中程おさへ二つ打ちやはり二をおさへてゐて小手にて一ノ中程をおさへ打ち又二ノ中程おさへ二つ打ち
三を一つ打つ　チンチリテレツテ　三ノ上をおさへ打ち同中程をおさへ打ちすくひ又
はなし打ちすくひ二ノ中程おさへ打ち三一つ打つ　チンチリテレツテ　三ノ上をおさ
へ打ち同中程をおさへ打ちすくひ又はなし打ちすくひ二ノ中程おさへ打ち三一つ打つ　チンチリチ

テンツツン　三ノ上をおさへ一つ打ち同中程をおさへ打ちすくひ又一つ打ち又はなし一つ打ち二ノ
中程をおさへ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ打つ　トツテツツントロ
ンツトン　一を一つ打ち二ノ中程をおさへ一つ打ち三一つ打ち二ノ中程をおさへ打ち早く上へあがり上に
てもおさへ打ち又二をはなし打ちすくひ一をおさへ打ち二を一つ打つ　ツンツントロン
ツトロンツトン　二ノ上をおさへ打ち又一つ打ち又はなし打ちすくひ一をおさへ打ち又二
を打ちすぐひ一をおさへ打ち二を一つ打つなり　ツンツントロンツトロ
ンツトン　二ノ上をおさへ打ち又一つ打ち又はなし打ちすくひ一をおさへ打ち又二を打ちすくひ一をおさ
へ打ち二を打つ　ツンツントロンツトロンツトン
二ノ中程より少し上をおさへ二つ打ち同はなして打ちすくひ一をおさへ打ち又二を打ちすくひ一をおさへ打ち二を一つ打つ
ツントンツントンツト　二ノ上をおさへ打ち又はなして打ち又二
ノ上をおさへ打ち又はなし打ち又一をおさへ打ち同はなし打つ　チチテンツンテン
テン　三ノ中程をおさへ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ打ち又はなして打ち二ノ中程をおさへ打ち三二つ打
つ　トントンツトロンツトンツン　一を二つ打ち同お
さへて打ち二を打ちすくひ一をおさへ打ち二を一つ打ち同上をおさへ打つ　ツンツンテン
チンチリテレツテ　二ノ中程をおさへ二つ打ち三一つ打ち三ノ上をおさへ打ち同中

程をおさへ打ちすくひ同はなし打ちすくひ二ノ中程をおさへ打ち三一つ打つなり　チンチリテ
レツテ　三ノ上おさへ打ち同中程をおさへ打ち三一つ打ち同はなして打ちすくひ二ノ中程をおさへ打ち三一つ打つな
り　チンチリチテンツン　三ノ上をおさへ打ち同中程をおさへ打ちすく
ひ又一つ打ち同はなし一つ打ち二ノ中程をおさへ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ打つなり　トツテ
ツツントロンツトン　一を一つ打ち二ノ中程をおさへ打ち三一つ打ち二ノ中
程をおさへ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ打ち又二をはなし打ちすくひ一をおさへ打ち二を打つ　ツンツ
ントロンツトロンツトン　二ノ上をおさへ打ち又一つ打ち又はなし
打ちすくひ一をおさへ打ち又二を打ちすくひ一をおさへ打ち二を一つ打つ　ツンツントロ
ンツトロンツトン　二ノ上をおさへ打ち又一つ打ち又はなし打ちすくひ一をおさへ
打ち又二を打ちすくひ一をおさへ打ち二を打つ　ツンツントロ
ンツトン　二ノ中程より少し上をおさへ二つ打ち同はなし打ちすくひ一をおさへ打ち二を打ちすくひ一を
おさへ打ち二を一つ打つ　ツントンツントンツト　二ノ上をおさ
へ打ち又はなし打ち又二ノ上をおさへ打ち又はなし打ち又一つ打ち一をおさへ打ち同はなし一つ打つ　チチテ
ンツンテンテン　三ノ中程をおさへ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ打ち又はなして
一つ打ち二ノ中程をおさへ打ち三二つ打つ　チンチンチリトチチリ

トチチリ 三ノ中程より一寸程下をおさへ打ち又二つ打ちすくひ二を一つ打ち又三ノ中程より一寸程下をおさへ早めて二つ打ちすくひ又二を一つ打ち又三ノ中程より一寸程下をおさへ早めて二つ打ちすくふ チンチリチンチリチンチリ 三ノ中程より一寸程下を小手をさしおさへ二つ打ちすくひ又小手をはなし人さし指ばかりにておさへ二つ打ちすくひ又小手をさし同じ事二へん引くなり チンチリチンチリチンチン 三ノ中程より一寸程下を小手をさしおさへ二つ打ちすくひ又小手をはなし人さし指ばかりにておさへ一つ打ち又小手をさしおさへ一つ打ちすくひすくふ時小手をはなし同中程まで早くあがりおさへ二つ打つ トンチンチリチンチリチリチン 二を一つ打ち三ノ中程より一寸程下をおさへ一つ打ち又小手をさし一つ打ちすくひすくふ時小手をはなしはやく三ノ中程へあがり一つ打ち又一寸程下へさがりおさへ一つ打ち 又同所にて小手をさしおさへ打ちすくひすくふ時小手をはなしはやく三ノ中程へあがりおさへ一つ打つ トンチンチリチンチンチリチン 二を一つ打ち三ノ中程より一寸程下をおさへ一つ打ち又小手をさし一つ打ちすくひすくふ時小手をはなし早く三ノ中程へあがり一つ打ち又一寸程下へさがりおさへ一つ打ち 同所にて小手をさしおさへ打ちすくひすくふ時小手をはなし早く三ノ中程へあがりおさへ一つ打つ チンチリンチチリンチチン 三ノ中程より一寸程下をおさへ打ち三ノ中程をおさへ打ちすくひ同上をおさへ打ち又中程へさがり一つ打ちすくひ又上をおさへ打ち又中程へさがり小手さしおさへ打つ チンチリ

ンチチリンチチチン 三ノ中程小手をさしおさへ打ち又小手をはなし人さし指ばかりにておさへ一つ打ちすくひ三ノ上をおさへ一つ打ち又中程へさがり一つ打ちすくひ又三ノ上をおさへ打ち又中程へさがり一つ打つ チンチチリンチチチン 三ノ中程より一寸程下をおさへ二つ打ち又中程をおさへ打ちすくひ又打ち同上をおさへ打ち 又中程をおさへ打ちすくひ又打ち同上をおさへ打ち又中程をおさへ打つ チチンチチリンチテレツテ 三ノ中程より少し上を小手をさしおさへはやめて二つ打ち又小手をはなし人さし指ばかりにておさへ打ち又小手をさしおさへ打ち又小手をはなし人さし指ばかりにておさへ打ち同上をおさへ打ちすくひ又打ち皆はなして打ちすくひ二ノ中程をおさへ打ち三一つ打つ チチテレンツツントン 三ノ中程をおさへ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ打ち同はなし打ちすくひ二ノ中程をおさへ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ打ち又はなして一つ打つなり ツンツンツンツテ 二ノ中程をおさへ二つ打ちやはり二をおさへゐて小手にて一ノ中程おさへ打ち又二ノ中程をおさへ二つ打ち三を一つ打つ チンチリテレツテ 三ノ上をおさへ打ち同中程をおさへ打ちすくひ又はなし打ちすくひ二ノ中程をおさへ打ち三一つ打つ チンチリテレツテ 三ノ上をおさへ打ち同中程をおさへ打ちすくひ又はなし打ちすくひ二ノ中程をおさへ打ち三を一つ打つ チンチリチテンツン 三ノ上をおさへ打ち同中程をおさへ打ちすくひ又一つ打ち又はなして一つ打ち二ノ中程をおさへ打ち早く上へあがり上にても

おさへ打つ トツテツツントロンツトン 一を一つ打ち二ノ中程をおさへ打ち三を一つ打ち二ノ中程をおさへ打ち はやく上へあがり上にても おさへ打ち又二をはなし打ちすくひ一をおさへ打ち二を一つ打つ ツンツントロンツトロンツトン 二ノ上をおさへ打ち又一つ打ち又はなして打ちすくひ一をおさへ打ち又二を打ちすくひ一をおさへ打ち二を一つ打つ ツンツントロンツトロンツトン 二ノ上をおさへ打ち又一つ打ち又はなして打ちすくひ一をおさへ打ち又二を打ちすくひ一をおさへ打ち二を一つ打つ ツンツントロンツトロンツトン 二ノ中程をおさへ二つ打ち同はなして打ちすくひ一をおさへ打ち二を打ちすくひ二をおさへ打ち二を一つ打つ ツントンツントントツト 二ノ上をおさへ一つ打ち又はなして一つ打ち又二ノ上をおさへ一つ打ち又はなして一つ打ち同又一つ打ち一をおさへ打ち又はなして打つ チチテンツンテンテン 三ノ中程をおさへ打ちはやく上へあがり上にても おさへ一つ打ち又はなして一つ打ち二ノ中程をおさへ一つ打ち 三を二つ打つなり

此の外に▲こもれんぼとて有り、

當世なげぶし

なみだながらに 二を一つ打ち一を一つ打ち二ノ上をおさへ打ち又はなし打ちすくひ一をおさへ打ち又はなし打ち又一をおさへ打ち又はなし打ち又一をおさへ打ち又はなして打ち二ノ上を おさへ打ち同はなし打ち一をおさへ打ち二をはなし打ち一をおさへ打ち又はなし打ち二ノ上をおさへ二つ打ち 三ノ上をおさへ打ち又はなし打ち二ノ中程をおさへ打ち又小手をさしおさへ打ち三を一つ打ち二ノ中程をおさへ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ打ち又はなし一つ打ち一を一つ打ち三を一つ打ち二を一つ打ち三を一つ打つ也 見る玉なづさは 一を一つ打ち二ノ中程をおさへ一つ打ち 三を三つ打ち同中程をおさへ二つ打ち二ノ中程をおさへ一つ打ち 又小手をさし一つ打ち三ノ上をおさへ打ち二を一つ打ち三ノ中程を おさへ打ちすくひ又はなして一つ打ち二ノ中程をおさへ 打ち同小手をさし打ち三を一つ打ち三ノ中程をおさへ打ち同はなして一つ打ち二ノ中程をおさへ打ち三を打ち一を一つ打ち二ノ中程を おさへ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ打ち又はなし 打ち一をおさへ打ち二を一つ打ち▲二ノ中程をおさへ打ち三を一つ打ち同上をおさへ一つ打ち二を打ちすくひ一をおさへ打ち 二を打ち二ノ上をおさへ打ち又はなし一つ打ち一をおさへ打ち 同はなし打ち二ノ中程をおさへ打ち小手にて一ノ中程をおさへ打ちすくひ 二ノ中程をおさへ打ちはやく一ノ中程を小手にておさへ打ち 二をはなし打ち一をおさへ打ち同はなし打ち 三ノ中程を小手をさしおさへ打ち又小手をはなしおさへ打ち 又皆はなし打ちすくひ又中程をおさへ打ち二ノ中程をおさへ打ち一ノ中程をおさへ打ち二ノ中程をおさへ打ち三を打ち一を一つ打ち二ノ上をおさへ一つ打ち又はなし打ちすくひ一をおさへ打ち二を一つ打ち一を一つ打ち又三つ打つなり もじもさだかにな見もわかずやん 二を一つ打ち一を一つ打ち二ノ上をおさへ二つ打ち二をはなし一つ打ち一をおさへ打ち又はなし打ち一をおさへ打ち又はなし打ち又一をおさへ打ち又はなし打ち二ノ上おさへ打ち一をおさへ打ち二を打ち一をおさへ打ち又はなし打ち 二ノ中程おさへ打ち三二つ打ち三ノ上をおさへ一つ打ち二を一つ打ち三ノ中程を

おさへ打ちすくひ又はなし打ち二ノ中程をおさへて打ち又はなし打ちはやく小手をさし又一つ打ち三を一つ打ち同中程をおさへ打ち三を一つ打ち一を打ち二ノ中程をおさへ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ二つ打ち一をおさへ打ち二ノ中程をおさへ打ち三一つ打ち三の上をおさへ打ち二を打ちすくひ一をおさへ打ち二を打ち又二を一つ打ち一を一つ打ち二ノ上をおさへ打ち又はなし打ちすくひ一を打ち又一つ打ち三を一つ打ち同中程をおさへ一つ打ち二ノ中程をおさへ打ち三を打ちすくひ二の中程をおさへ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ打ち一をおさへ打ち二を一つ打ち二ノ中程をおさへ打ち三を一つ打ち又二ノ中程をおさへ打ち二をはなし一つ打ち一の上をおさへ打ち一ノ中程を小手にておさへ打ち二をはなし一つ打ち二ノ中程をおさへ打ち三ノ中程をおさへ打ち二を一つ打ち二ノ中程をおさへ打ちすくひ三ノ中程をおさへ打ち二をはなし打ちすくひ三ノ中程をおさへ打ち二ノ中程をおさへ打ち二を一つ打ち二ノ中程をおさへ打ち三一つ打ち一ノ上をおさへ打ち二を一つ打ち二ノ中程をおさへ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ打ち二を打ちすくひ一をおさへ打ち二を打ち又一を打ち三を打ち二を打つ

さだかになもじも

一を打ち二ノ中程をおさへ打ち三を打ち又一つ打ち三ノ中程をおさへ一つ打ち又小手さし一つ打ち三の上おさへ打ち二を打ち三ノ中程おさへ打ちすくひ同はなし一つ打ち二ノ中程おさへ打ち又はやく小手をさし打ち三一つ打ち三ノ中程をおさへ打ち又はなし打ち二ノ中程をおさへ打ち三を打ち一を打ち二ノ中程をおさへ打ち又はなし打ち二ノ中程をおさへあがり上にてもおさへ打ち又小手をさし二ノ中程をおさへ打ち二を打ち一ノ中程を小手にておさへ打ち二ノ中程をおさへ打ち二ノ上をおさへ二つ打ち二を打ちすくひ三ノ中程をおさへ打ち二ノ中程をおさへ打ち二を一つ打ち一ノ上をおさへ打ち二ノ中程をおさへ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ打ち二を打ちすくひ一をおさへ打ち二を打ち又一を打ち三を打ち二ノ中程をおさへ打ち二ノ中程をおさへ一つ打ち三を一つ打ち同中程をおさへ打ち二ノ中程をおさへ打ち三を打ちすくひ二ノ中程をおさへ打ち二を一つ打ち二ノ中程をおさへ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ打ち三を一つ打ち三を一つ打ち二ノ上をおさへ打ち二を打ちすくひ一をおさへ打ち二を打ち又一を打ち三を打ち二ノ上をおさへ打ち二ノ中程をおさへ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ打ち二を一つ打ち二ノ中程をおさへ打ち三を一つ打ち一をおさへ打ち二ノ中程をおさへ打ち二をはなし一つ打ち一ノ上をおさへ二つ打ち二を打ちすくひ三ノ中程をおさへ打ち二ノ中程をおさへ打ち二をはなし打ち三ノ中程をおさへ打ち二ノ中程をおさへ打ち二を一つ打ち二ノ中程をおさへ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ打ち二を打ちすくひ一をおさへ打ち二を打ち又一を打ち三を打ち二を打つ也

もじもさだかにな見もわか

ずゃん

二を一つ打ち一を一つ打ち二ノ上をおさへ二つ打ち二をはなし一つ打ち一をおさへ打ち又はなし打ち一をおさへ打ち又はなし打ち二ノ上おさへ打ち一をおさへ打ち二一つ打ち一おさへ打ち又はなし打ち二ノ中程おさへ打ち三二つ打ち二ノ上をおさへ一つ打ち二を一つ打ち三ノ中程をおさへ打ちすくひ又はなし打ち二ノ中程をおさへ打ちはやく小手をさし又一つ打ち三を一つ打ち同中程をおさへて打ち又はなし打ち二ノ中程をおさへ打ち三を一つ打ち一を打ち二ノ中程おさへ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ二つ打ち同はなし打ち一おさへ打ち二を打ち二ノ中程をおさへ打ち三一つ打ち三ノ上をおさへ打ち二を打ちすくひ一をおさへ打ち二を打ち又二を一つ打ち一を一つ打ち二ノ上をおさへ打ち又はなし打ちすくひ一を打ち又一つ打ち三を一つ打ち同中程をおさへ一つ打ち二ノ中程をおさへ打ち三を打ちすくひ二ノ中程をおさへ打ち二を一つ打ち二ノ中程をおさへあがり上にてもおさへ打ち三を一つ打ち三を一つ打ち一をおさへ中程をおさへ打ち一ノ中程を小手にておさへ打ち二をはなし一つ打ち一ノ上をおさへ二つ打ち二を打ちすくひ三ノ中程を小手をさしおさへ打ち又小手をはなしおさへ打ち又皆はなし打ち三ノ中程をおさへ打ち二ノ中程をおさへ打ち小手にて一ノ中程をおさへ打ち二ノ中程をおさへ打ち三一つ打ち一ノ上をおさへ打ち二を一つ打ち二ノ中程をおさへ打ちはやく上へあがり上にてもおさへ打ち二をはなし打ちすくひ一をおさへ打ち二を打ち一を打ち又一を打ち三を打ち二を打ち三を打つなり

▲稀にあひ見しうき寝のな床の　間ノ手　夢なさましそな鐘の聲ゃん　間ノ手　さましそな夢な　間ノ手　夢なさましそなかねのこゑゃん。

▲人め繁きとうき名のな立つと　間ノ手　障りがちなるなゑにしかなゃん　間ノ手　がちなるなさはり　間ノ手　さはりがちなるなゑにしかなゃん。

▲戀ひし床しは過ぎにしなむかし　間ノ手　今は間はれもな問ひもせずゃん　間ノ手　とはれもないまは　間ノ手　今はとはれもなとひもせずゃん。

▲つらき心も變りやなせんと　間ノ手　定めなき世をな頼むかやゃん　間ノ手　なき世をなさだめ　間ノ手　さだめなき世をなたのむかやゃん。

▲深き思ひを語ろとなすれば　間ノ手　鳥もなく〳〵な東雲（しのの）にゃん　間ノ手　なく〳〵な　間ノ手　鳥もなく〳〵なしのゝめにゃん。

▲天と八幡涙でなくらす　間ノ手　一字よまれぬな此の文がゃん　間ノ手　よまれぬな一字　間ノ手　一字よまれぬなこのふみがゃん。

右の唱歌うたひやうも引きやうも口と同じ事なり。但しいくつもつゞけてうたふ時は切（きり）にも間（あひ）の手引くべし。

本手（ほんて）目錄

▲琉球組　▲しのび組
▲うき世組　▲ひんだ組
▲ふしやう組　▲こし組
▲とり組

破手（は で）目錄

▲待つにござれ　▲長さき
▲藤五郎　▲じよや
▲くずの葉　▲京かのこ
▲黒船　▲比良や小松
▲石引　▲八もじ

▲かね引　▲ほそり
▲たき

本手唱歌　三味線之組

琉球組

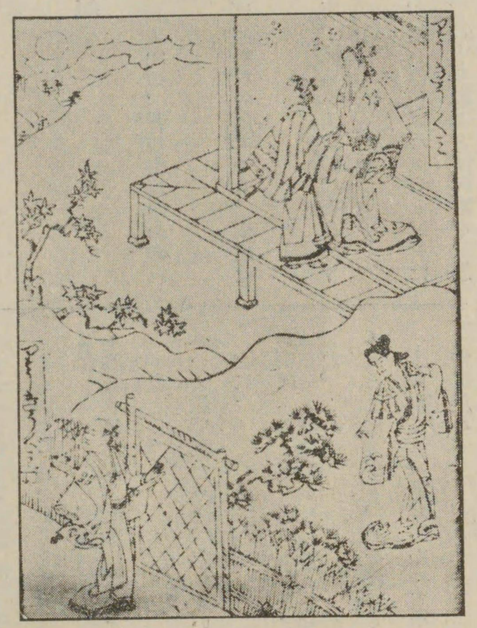
▲比翼連理よの、天に照る月は、十五夜がさかり、あの君さまは、いつがさかりよの。
▲思ひは滋賀の、松風ゆゑ、死なでこがるゝ、〳〵。
▲深山おろしの、小笹の霰、さらり〳〵さら〳〵〳〵としたる、心こそよけれ。
▲けはしき山の、つゞら折りは、くるりくる〳〵〳〵としたる、心はおもしろや。
▲とろり〳〵と、しむるめの、笠のうちよりしむりや、腰が細くなり候。
▲とても立つ名が、やまばこそ、こちへお寄りやれなう柴垣越しに、ものいをに、大原木買はひ〳〵、黒木召されの、ちやうりやう　ふりやう　ひやうに　ちやうろ　あらはい　ふりやう　それなり　ちやうふりやう

しのび組

▲いよ忍び〳〵て、心うれしや、いよ梅に囀づる、鶯もよるは梢に、宿るとも。
▲いよ思ふまいもの、それほどに、顔に紅葉の、立田山
▲暇乞ひには、來たれども、碁盤おもてで、目が繁ければ、先づお待ちやれ、柴の編戸も、押せば鳴る。あはれ霰が、はらほろと、降れがな其の間に、笑止やたつ名や、人を立つ名や。
▲しのびをどりは、一をどり、〳〵、戀をせば〳〵、二十三夜の、月を待て、月の僞り、なき物を、てい〳〵てい、ていからこ　おゝしやんきしやかんこはらり　ついやひよ　つや〳〵〳〵に　ひやうらゝ　うつほつつ忍び踊はひとをどり、〳〵。
▲我が戀は、涙の袋に、色小袖、なにと包めど、色に出で候、やれ出で候、あひ見て後は、何としよぞの、戻ろやれ、しやならしやんならと。

うき世組

▲誰もうき世は、假のやど、さのみ人を、包むまじ、よや君しやらり。
▲文もやるまい、便宜もせまい、返事さへせぬ、憂さつらさを、君をば人に思はせて、か程つらきものぞと、思ひ思ひ知らせて、とは思へども、身の上になれば、更に思ひきられぬ。
▲とても立つ名に、寢てござれ、寢ずにも明日は、いよ寢たと讃歎しよ、花の踊は一をどり、〳〵。
▲われは小鼓、殿は調よ、かはを隔てゝ、寢にしござれ〳〵、花の踊は一をどり。



▲いとし若衆の、小鼓を、締めつ緩めつ、調べつゝ、寢入らぬさきに、なるかならぬか。
▲深山やるまい、あまたきの水は、うちやうてつく、ちやうと打てば、うちやうて、つく〳〵〳〵つく、しつたんたらつく、ちやうと打つ、若衆踊は一をどり、〳〵。

ひんだ組

▲弓矢八幡、寢はせねど寢たとおしやらば、何としよぞの。
▲一つこし召せ、たぶ〳〵と、殊にお酌は、忍妻、〳〵れんほれゝれつの、れれいしやうぐ〳〵に、そはばれつのれ。
▲これの千代女が、髪髷は、紫竹小竹に、四つの節、加

賀や越前美濃尾張、越後京根來、粉河坂本、所望めされ。

▲あすは出ようずもの、船が出ようずもの、おもたゆもなと、およる殿御や、〳〵、飛驒の踊は一をどり。〳〵。

ふしやう組

▲若いが不祥で、おひ參らしよかの、背戸柴垣のお破れたを。

▲思ふまいとの、かね打てば、かねのばちやら、猶思はるゝ。

▲橋に我が身を、投げ掛けて、渡らしよかの、とろ〳〵〳〵と、やれ渡らしよ。

▲月の夜に打つ、砧の音は、はらほろほろはらと、またして驚く夜も〳〵あるに、ひとり寢よとは何事ぞ、思はざな來そ、ます花ぐるひ、しよず物わざくれ。

▲わざと來んとは、おしやれども、眞實思へば、はぢも人目おもはくも、思出されぬ物ぢやものゐい、しかしながら、君はたゞます花のあるゆゐ。

▲十七八は、長押のほこり、皆殿達の、目に入りたた〳〵目に入りたらば、藥師へ籠り、藥師の前で、めぐすしよ。

こし組

▲腰にさげたゐ、巾着は、いよこれもうき人の、縫ひぢやほどに。

▲いよ途で見たりと、忘れまい、枝垂柳の、ふりぢやほどに。

▲雨はふるとも、雪ふるなさ、忍ぶ細道の、笹のたはぶれ。

▲成るとならずと、文をばつくせ、心つよやつれなや、とにかくに、數ならぬ身ぢや程に、君來か往こか、來ずば戻ろ。

▲一夜二夜にと、馴れそめて、あすはいよふう〳〵ふ船いる、何としよぞの。

▲いやというたもの、かき口説いての、なんぞやそなたの、一花ごころ、思ひや君さま、叶へやわれ、いようつゝなや、もうまいの〳〵、さゝらもうまいの、我等も若い時は、殿に揉みにもまれた。

とり組

▲鳥もかよはぬ、山なれど、住めば都え、我が里よ。

▲我が戀は、千本小松の、枯るゝほど、田井が水干て、ほこり立つほど。

▲見るめばかりの、戀をして、千賀の鹽竈、身をこがす。

▲言へば世にふる、いはねば心が、もだ〳〵と、お目と目と〳〵、見あはせて、離れ難なの、其の面影を。

▲夢にも見もせず、うつゝになりと、逢はせてたもれ、逢はねば心が、もだ〳〵と、うん思ひの種や、あこがるゝ身を、なんとしよぞの。

▲京では一條、柳屋が娘、四ツ割帶を、襷にかけて、いかにも腰が、しなやかな、〳〵。

▲いざまゐろ、六地藏へ、ほとけにへだては、無けれども、さりとては、出羽の鹽屋が建てた六地藏や、六地藏や。

▲忍びの殿樣、ふらりんと、下げさしよ、緣のある故、いよ餘念が無いよの。

破手唱歌

待つにござれ

▲待つに御座りた、いとしの君や今宵ござらざ、こがれ死の。

▲深山清水は、底から澄むが、君の心は、底からか。

▲われは谷水、でごとは出たが、岩に堰かれて、落ち逢はぬ。

▲淺きちぎりに、逢ひ馴れそめて、深き思ひは、涙川、君の仰を、まつばかり、〳〵。

▲どうみ今度ござらば、持て來てたもれ、きぶのお山の、檜の木の枝を、あゝうき世、それ〳〵そればかりの、思ひはをいよゐ。

長　さ　き

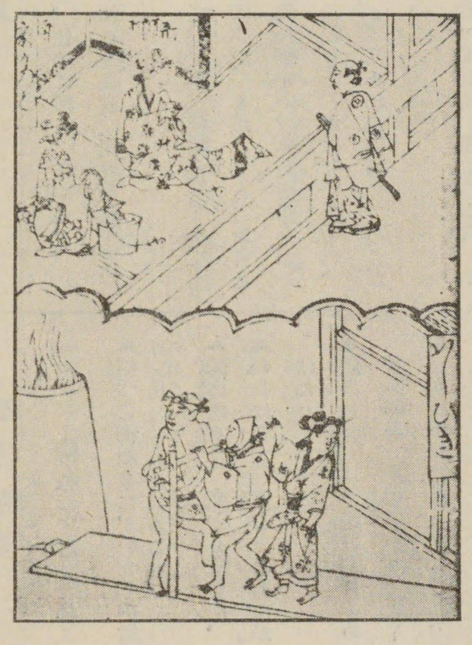
▲長崎にもはやる、玉の緒の襷、宮市がよれた。しよ女がなさけ。

▲ながさきの鷄は、時知らぬとりで、眞夜中にうたうて君を戻す。

▲いとゞ烈しさ、吹上濱に、鷄をかぎりに、かの様待てば、寒き嵐も身にしまぬ。

藤五郎

▲われがとのごは、藤五郎殿の衆ぢやが、粟田口より、石また曳きやる、ゑいやころさやと云うてひきやる、お聲きくさへ、四肢がなえる、まして添うたら、死なうずかの。



じよや

▲思ふまゝなる、今宵かな、月は朧で、夫は來て。

▲君とわれとは、鑵の糸、切れて離れて、また結ぶ。

▲忍んだりよの、忍ばれたりよの、裏の細道、小藪がけ。

葛のは

▲さてもやさしの、葛の葉や、何をたよりに、はへかゝる。

▲君は松島、雄島の海士よ、袂干がたき、我が涙。

京かのこ

▲これは京鹿子、目結手際もよやきよや、あゝら都戀しや、都の仕手たち戀しや。

▲これは京小紬、紋柄手際もよやきよや、あゝら都戀しや、都の染達戀しや。

くろふね

▲むかしより、今に通ひ來る黑船、緣が盡くれば、鰺の餌となる、さんたまり。

▲こゝろ無き君に、お情は無益、うき身やつして、歎く我等に落ちさせ給へや。

▲名所さま〳〵、多けれど、く、、吹上の濱、くは和歌の浦・さあ天神玉津島、いよ布引の・松山、いく千代くと和歌山の松、お守りあれや、君の寺。

ひらや小松

▲比良や小松の朝通ひ、褄が濡れけり、く、、磯打つなみに。

▲此のほどは、戀ひつこひられつ、今宵はあいよ・忍びくの初でござり申すとの、さあいよえく。

▲打解けて、ゆらくとおよれもさ、まだ夜はあひよ・夜なかくしけれ、とんときみ様、さあいよえく。

いし引

▲こゝは三條か、釜の座か、一夜とまりて、たゝらふもゑい、われが殿御は・名越にござる、さてもお留守は、物憂いほどに、ゑいくくく・ゑいさらくの、石を曳く、ゑいくくく、やつというて曳くには、夢ではないか、ゑいとやつというて曳かば、お靡きやろかとの、やつというてゑいと、ゑいさんくさ。

八もじ

▲門に立ちたは、八文字様か、夜風の身の毒、内へござれ。

▲そもじ見すてゝ、なんとして行こぞ、やがてきちよしよぞ、卯月の末に、遲うて皐月の、中頃に。

かね引

▲花とならば、散りかゝれ・御身は紅葉のいろ、なうさて日數に添へて、色まさる。

▲梅のにほひを、櫻花に宿らせて、君が髻に、挿させつつ、青葉のまゝに、詠めばやゝ〳〵。

▲尺八の音は、一節切こそ、音はよけれ、君と一夜は、寢も足らぬ、心なの君さまや、〳〵。

▲其方と此方とは、松に藤のさがり枝の如く、たそがれ時にかゝるな、身に纏はるゝ、〳〵。

ほ　そ　り

▲忍ぶ細道に、松と胡桃さし植ゑまい、待つとて其の身は、來る身でもなし、おじやれとて、誠にくるみでもなし。

た　き

▲眞の闇にも、迷はぬ我は、あきて貴樣の、迷はしやる。

▲甲斐の國、信玄さまは、一ども二ども、ござらぬ、おちよぼの忍ぶに、六つの苦が仆、雨に霰や、夜露に柴垣の、犬のあだほれ。

▲紅の、三尺手拭、形見にせよとて、置いてゆく。

▲紅は薄くなるとも、そもじとわれとは濃くなる。

三味線秘事

一らんごや　一ゆりかん　一はやふね　一名よせくみ
一さかひ組　一中島組　一七つになる子
右は大事とて、ゆるしなくては引く事なりがたし。やすからぬ事也。

新曲歌之唱歌目錄

▲まがき　▲こひぐさ
▲かすがの　▲もしほ草
▲小町　▲川竹
▲をざゝ　▲さらし
▲山づくし　▲夕ざれ
▲花のえん　▲手まくら
▲八重梅　▲はる風
▲戀ごろも　▲あきくさ

▲いくはる　▲なみだ川
▲うかれめ　▲しかまつち
▲手まり　▲木やり

江戸淺利撿校佐山撿校京朝妻勾當
當風引出し手新曲歌之唱歌

まがき

▲籬ながらの御見はつらや、人め忍べば、思はくばかり、袖は涙の淵瀬となりて、憂きは流の、身は捨小舟、せめてしばしは、とまれかし。

▲逢ふは別れと、かねては知れど、今朝のきぬ〴〵、いつよりつらや、袖は血汐の涙となりて、恨みこがるゝ身は戀衣、せめて一夜は、きても見よ。

▲君はつれなや、過ぎし夜も問はぬ、われははかなや、もしかと思うて、起きも寢もせず、うきねの床に、夜もすがら、〳〵。

こひくさ

▲思ひそめたよ、濃き紫の、いろに出さじと、包むに餘る、袖は涙の、のんさて誠に、こほれてかゝる、れんほれゝつれ。

▲知らぬ昔は、よそなる物を、今は身にしむ、愛別離苦の、憂さを思へば、のんさてまことに、情ぞつらや、れんほれゝつれ。

▲めせ〳〵草花、なに〳〵ぞ、つゝまず夕顔、いつ白菊に、花さきそめて、美人草に、戀草ずんど、秋風の、立たぬまに、靡かさんせ、女郎花、お差合ひは、御ざんせざの、ちよつと刈萱。

かすがの

▲春日野の、若むらさきの、摺衣、しのぶの亂れ、かぎり知られぬ、我が思ひ、置く露のしづ心なき、秋風に移ろふ人の濃紫、花むらさきの、萩が枝に、亂れみだるゝ、心のつらさ、其のくりことの、又の夜に、君ならで、よい〳〵餘所には、さあゑ、色には移さじ、さあゑ、紫の、よそに心は、あらねども、深くぞ人を、

思ひ初め、かひも渚に、我が袖しほる、人め忍ぶの、通ひぢは、船に打ちのり、お敵たちは來ぬかの、うき名をのせて、いくたび思ふ、內の首尾とは、思へども

たゞ一すぢに、此のわけ知らぬ、人ならば、たとへ萬に、いみじきとても、玉の盃、こんぎやらく、きやらこんぎやらこ、人はいよく、知らぬ事、君に逢ふ夜は、待乳山、手につみいつしかも、見ぬ紫の、根に通ふらんうたゝ寢の、夢になりとも逢ひたや見たや、夢になりとも、夢にうき名は、さんさよも立たじ、よしなの思ひ、いよおもはくださうな。

もしほ草

▲千代は經るとも、變らぬ色の、常磐の山の、岩躑躅、いはねば人の、戀しき物と、思ひしよりも、硯に向ひ、由なし事を心にまかせ、書きてぞおくる藻鹽草、胸に焚く火のけぶりは空に、靡くならひのいよの、末は逢瀨の浪枕、獨り焦るゝ、身は浮船の、よる瀨定めぬ、此のうさ辛さ、知らせたや、く、夢に見んとて、片しく袖を、鳴くねわびしき、きりぐすす、つれなき人を松虫の、草の籬の、夕べになれば、物こそ辛氣思への、さりとては浮き世ややんさ、いつさて御見な兎に角に。

小町

▲思ひ深草、色にはたれも、小町といひし、こよねを見そめ、數の玉章、おくられけるが、百夜通へど、僞りけるが、誠と思ひ、かのあだ人は、山城の、木幡の里に、馬はあれども、君を思へば、なう徒跣、一夜二夜と、數へしはのほんゑ、つらいはく、九十九夜なり、あゝむね苦し、明くる其の夜を待たで、遂にはかなはぬ、うき世ゑい。

川竹

▲そさま故にぞ、亂れ髪、解きし下紐、數重なりて、無理に實から、いとしうてならぬゑ、やゝともすれば、閨の內より、手を叩いては、水くれよ、夜はなんどきぞ、歸らにやならぬ、急かせ言葉の、無益の時は、しんぞ辛いは、勤の此の身、心をくばり、氣を取りて、かぎりもあらぬ、玉章を、夜明けぬうちに、認めて、こゝやかしこと、やりくる辛さ、恨みられては、恨みもしたり、あらおそろしの、誓の言葉、此の行末を、何とせん、可愛ゆがらんせ、ながれの身。

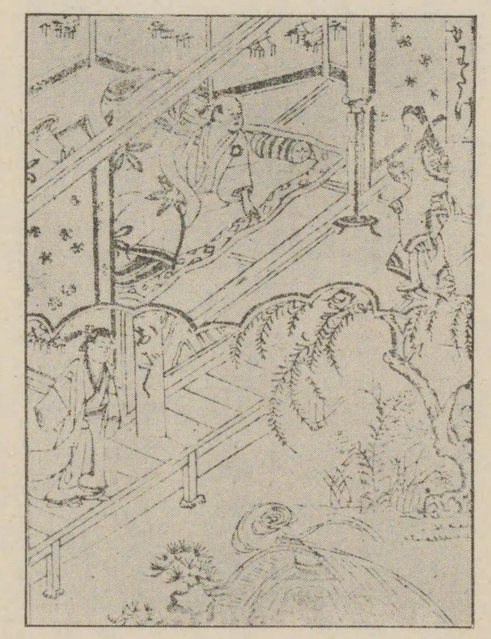
をざゝ

▲しなへやしなへ小笹も風に、そなた忍べば、人が知るあゝよそにはとがも、ない物を、見しよりも、あこがるゝ、及ばぬ戀に、いとゞ思ひは、いやまして、こぼる涙、明暮に、乾くまもなき、く、我が袂、文玉章の、數を盡せど、つれなき君に、見せたき物は、風に靡ける、鹽屋のけぶり、荻萩薄、まだもござるよ、ゑい女郎花、引くに靡かぬ、草木もないが、見せたや庭の柳の糸の、ゑい柳の糸の、風に靡けり、かなはぬうき世、雲にかけ橋、及ばぬ戀に、思ひ亂れて、ゑい何しよぞの。兎角うき世は、氣儘がよいぞいの、勿論さうな、そりやさうさ。

さらし

▲まきの島には、さらす麻布、賤が仕業の、宇治川の、

波か雪かと、白妙の、いざ立出でてゐ、布さらそ、鵠の、渡せる橋の、下よりも晒せ、布は白みやり候、なうなう山が見え候、あさひ山に、霞かゝる景色は、たとへ駿河の、富士の山かは、富士は物かは、小島が崎に、寄る浪に〳〵、月の光を、映さばや、〳〵、見えわたる、〳〵、伏見竹田に淀鳥羽も、いづれ劣らぬ、名所かな、〳〵、立つ波か、〳〵、瀬々の網代木、遮へられて流るゝ水を、堰きとむる、〳〵、所がらとて、〳〵、布を手毎に、槇の里、人打ちつれて、戻らうやれ、賤がやれ。



山づくし

▲戀の山路に、入初めしより、人め忍ぶの、山とはつらや、まれに逢ふ夜は、鶏さへも、時しらぬ山〳〵は、名のみして、明くる侘しき、葛城山よ、夜の御見に、言葉殘りて別れ、さらば〳〵に、なうかへる山、君が心の、知られはせねど、亂れて今朝は黒髪山よ、傳ふ泪の袖振れ山よ、袖を振る〳〵、ふりやるはよいが、譯のある身の、袖振るな、ふる妻いとし。

ゆふざれ

▲嬉したま〳〵袂にかゝる、咲くは小藤の、花の露、露に心の、いつしか亂れ、秋にはあらぬ、春ながら、いとゞ思ひは、いやまさり、亂るゝ物か、青柳の、糸はものかは、なか〳〵に、花にふきふじ、しをるゝ此の身、此の夕ざれの、一盛り、折らば今折れ、散らぬまに。

花のえん

▲よしや吉野の、花より我は、其の夕暮の、折からに、垣間見えにし、俤を、忘れもやらで、うか〳〵と、移る心や、紫の、色に出でたよ、はづかしながら、花によそへて、やる文を、見よかし〳〵散らぬまに、いとど心の、いよ盡し文、遣るかた分かぬ、物思ひ、文の返しも、いつとなく、待ちしかひある、今日の日の、はや夕暮の、花の宴、逢うてぞ今宵、新枕、心とけたよ、はや何時の間に、一夜ばかりが、きりが谷、八重も千よも、しんぞ變るな、變らじ我も、花に嵐、よしや吹くとも、〳〵、契たえすな。

手まくら

▲水の面、波間に映る、月は朧の、春の夜の、夢ばかりなる、手枕に、君がうき名や、かひなく立たぬ、兎角人めの、しげ〳〵なれば、忍ぶ山みち、忍びて通ふ、井出の玉水、岸根の蛙今や鳴くらん、うき世の中に、われとひとしき、物思ひの、あらば語らぬ、憂さつらさ、戀の山路をたどりゆく、こひ〳〵戀しき人を、待乳山、ほのかに見えし、木の間より、名もなつかしきほとゝぎす、今一聲の、おとづれに、昔の人の、偲ばれて、袖に涙は、よるの雨、草の籬をわけ入り、角田川原に、水鶏鳥の叩くは、人はあだなや、枕を恨む、投げそ枕に、科もなや、武藏野の、なべての草は、多けれど、濃紫の、色もなや、戀風烈しく、我が涙〳〵流るゝ〳〵枕流るゝ。

八重梅

▲梅が咲けがな、いよ八重梅を、枝を手折るふりして、必ず〳〵、ござせとな、樣を招くゐ、かならず〳〵ござせと、さまを招くさ。

▲夢になりとも、逢ひたや見たや、夢にうき名は、さんさよも立たじ、稀にあふ夜は、うつゝか夢か、稀にあ

ふ夜は、さんさよもたゝじ。

はる風

▲咲いた櫻に、吹く春風も、のほんゐ、花のあたりは、よぎて吹け、〳〵、こぼれてかゝる花の露、深山がくれの、身はほとゝぎす、のほんゐ、人は知らねど、泣きあかす、〳〵、よひ〳〵濡るゝ、我が袂、嘆く涙は、妻戀ふ鹿の、嘆く涙は、妻戀ふ鹿の、荻や薄に、〳〵、置く露の、こぼれてかゝる萩のした、こずゐ〳〵は、花かと見えて、〳〵雪のあしたは、のほんのほんのほんののんほ、なういよのんほなういよ、風厭ふ、風厭ふ、霜夜に濡るゝ、わが袂、春のゆふべに、山々を來て見れば、をりしも春風に、櫻の花が、散りかゝる、ちり〳〵はつと、花の散りたるは、空に知られぬ、雪かと見えて、面白や、夏はほとゝぎすに、また卯の花に、菖蒲草、牡丹芍藥、あつちりな、こつちりな、すじりもじりて、ゐりくりゐんじよの、奥山の奥に、牡鹿の鳴くね、虫のこゑ〳〵、秋はな何やつ、月に映らふ、紅葉の色に、とりやあつめて、あはれさまさる、冬は時雨に雪も霜も消えて、たまりやせぬ、いつも初音と、詠まれし歌も、實にも道理と、我等は思ふ、夏のあひだは、雲居に鳴くが、夏が過ぐれば、のほんほのほゝ、そこさいてまかしよ、まつかしやう、いづくへ是は行くぞや、いづくへゆくぞやつさ、別れがつらいに、さりとては。

こひごろも

▲仇なりと、名にこそ立てれ櫻木の、はつ花染の、戀衣若紫や、小紫、ゆかりもがなと、夕霧の、立ち迷ひにし、薄雲や、うはの空なる、君たちを、何とて思ひ、そめ川や、身は浮橋の、うき寢にも、せめて夢には、うちとけよ、閨の月さへ、枕に通ふ、ひとり焦るゝ夜は、小長門や、其のしのゝめの、鳥のこゑ、亂るゝ露の玉葛、いつ逢坂と、心はとめて、幾夜もかをるは、初音瀧の白玉、涙の淵に、沈む思ひは、いづみ川、いつみきとてか、小由刈藻の、うたひしは、よしや嘆くな、かなはじとても、定めなきこそ、うき世のならひ氣の毒に、いよのとは思へども、捨て難き、人ひと初瀬の、山の色、結ぶ契もあれば、勢至千手の、其の一座、今や几帳と、松が枝常磐、千歳や千代の物思ひ、情をかけよ八橋の、雲井の西を、眺むれば、はつ山外山の、峰の紅葉ば、色ふかきより、峰のもみぢば、色ふかきより、四方に其の名は、高尾山、〳〵、思ひに濡るゝ、わが袂、あれみつ島の、花のころ、九重にこそ、身を恨みん、奈良酒田、小太夫、柏木、ふたりとも、とにもかくにも、たのまじ物を、わけよきも知らぬは、異國ものかなと、から唐崎の、笑ひ顔、目もとにやしほがさ、目もとのしほに、馴衣、かの狹衣の、袖ぬれて、涙の玉の井、恨むる小歌の、其の藤枝、よしなの思はくは、どうもならぬにの。

あきくさ

▲秋はつねさへ、物さびしき、思ひに寢て、亂るゝ心、露の涙も、あらそひかねて、戀の道のべ、踏分けがたき、草の色にも染む身はつらや、ちらと見そめし、ゐいさんさ、女郎花ゐ拙なき心にのんさて、はや覺え草、身は朝顔の、淺ましながら、せめて靡かぬ、ことやありと、紅葉襲の、その薄様に、書きて送る、文見草、人目忍ぶの、わが涙、かわく間もなき、尾花が

ハマ、
す、引かば靡かで、さりとては、葛のうらみの、數かさなりて、いつかは君を、また宮城野の、萩の下ばの露にしつほり、濡れてなりとも、荻ふく風の、たよりもの、聞くやとまちし戀ごゝろ、亂れみだるる難波の浦に、蘆の穂のみの、契はつらや、波のよる〳〵、さんさ身をつくし、おもはくださうな。

いく春

▲いく春のながめは、何時し變らねども、分けて長閑に、照る日影、契は竹の、よゝこめて、君と二ばの、松もろともに、枝も榮ゆる、若緣、仰ぐにあかぬ、ときを得て、さればあやしの、賤のね、樣々のつくり花、色をつくして、捧げけり、先づ咲き初むる、

▲梅の花、いとよりも、にほひも深き、花衣、八重一重咲亂れ、實に九重に、たぐひなき、色も異る、櫻花、裝ひゆゝしく、見えにけり。扨て其のつぎの島臺に、松と竹とを植ゑ交ぜて、千代を囀る、雛鶴が、汀のかたに、巣をくひて、谷の流に、龜あそぶ、賤の苧環、くりかへし、しづのをだまきくりかへし、よる來いよるこい、よるこい樣よ、人の情は、よるにこそあれ。

なみだ川

涙ならでは、憂きをばとはぬ、乾く間もなき、我が袖の色。

▲花は折りたし、梢は高し、心つくしの、身はいかにせん。

▲立田川には、紅葉を流す、我は君ゆゑ、うき名をながす、君ゆゑながす。

▲うき名たつ田の、山みち行けば、顏に紅葉が、いよ散りかゝる、もみぢがちりかゝる。

うかれめ

▲花は吉野よ、紅葉は高尾、松は唐崎、霞に外山、何時も常磐の振は、さんさ、類あらじ、とにかくしほらしや。

▲ちとせふるとも、變らぬ色は、松に藤枝の、その俤を見るに一入二しほ、さんさ忘られじ、兎に角思はるゝ。

もろこし

▲憂いも辛いも、此の里なれば、染むもそまぬも、逢はねばならぬ、いつか思ひの、やよ霧はれてゑ、せめて夢になりとも、わけあるかたへの、儘にならぬは、誰が身にもあるとゑ、それをたよりに、うき身をおくるゑ、此のとし月日をゑ。

▲月を見んとて、薄雲見れば、空に知られぬ、深雪の降るは、櫻散りしく、花むらさき、色もよき、小紫、靡く青柳、今は思ひ焦るゝ、玉葛、其の名高尾は、もろこしまでも、〳〵。

しかまつち

▲恨みつ佗びつ、思ひを滋賀の、床のさびしさよ、つれなき人に、見せたや庭の、柳の糸の、風に靡きしを。

▲さてもやさしの、螢の虫や、忍ぶ曖の、闇路を照らす人の心も情あれ。

手まり

▲つる〳〵と、いづる月を、松の枝で隱した、いざさらば、きりても捨ちよやれ、松の枝の下えだ。

▲こんとつきあけ、きりゝと廻り、〳〵、見て人こそ、床しけれ。

木やり

▲やれものうきは、秋の夜の、君を松虫、轡虫、一夜ばかりが、蟋蟀か、二夜も三夜もゑ、君をこうろぎ、おひかけ中の、綱から見ごとよ、揃たやれ、先の綱をゑえいや〳〵、引かば靡きやんれ、やんれ打てや打て、鼓太鼓羯鼓手拍子、碁雙六に銅鉄子よ、いよ蓆旗に、てん旗よ、さがよねをかち杵砧かるた、じやうぜんがこつくい、しよろりが鞭は鹿の角、ちよこ〳〵打つはけいひき鍛冶屋てつこの衆しりころりちん〳〵からりのつ槌の音、打つたる狸の、腹鼓、正月は節分、豆ぶり〳〵にかいだま七草薺、なじよ〳〵搔寄せて、ほとほとと叩いた、いとしけりやこそ、しつとと打て、憎くか打たりよか、やれこりや〳〵〳〵手がそれた、おひかけしめかけ聲をかけ、元綱をゑ、皆さまも御存じか、しかの白玉、花野に葛　唐崎薄雲棚引く、あれからこれまでゑいや、八橋様さらさにさつと幇間を頼んで、口説きすました松枝の太夫様に、情は三州坂田ぢや、萬代に小太夫、正木に櫻木、初花のやどやゆきには、ひねつてしなつて笑つて歩んで、癖は何も難波ぢや、無いこそは道理なれ、京のぶらと大阪のぶらと江戸のぶらと、三千人のぶらどもが、寄合ひ談合で、つくりたてたる子供たち、いかなとんてきどもも、有頂天の野暮介なりとも、此の君にはあはうかあひますまいか、いや唯不覺は取りゆまいと、云つたら口説になりましよ、間のやの字は合點かよ、元綱んよゑい。

元祿十二己卯暦

永田調兵衛板行

大　幣　終

第二十　はやり歌古今集

はやり歌古今集

扨ても〳〵當世の若いお衆は、心さかしく、和歌の道に心をよせ、三十一文字をつらね、春は花の盛り、夏は澤邊の螢見なんど、秋は峰の紅葉、鹿の戀するを見て一首、何ともものと、冬は寒天の雪折れ竹に、燗鍋をぶら〳〵さけさせ、風が伴れ行く木の葉を拾ひ、燒火として樂しめる御方など、もつともやさしき心ばせなり。よつてやつがれこと、生國は遙か東の者、殊更田夫にして、氣のつまる事を聞くと否や、慮外ながら頭が八萬五六千に割るゝばかり。なれども一つのたのしみ草世界の世話をまた忘れ草に、しよばせい〳〵ともとほらぬ口から一流を趣興し、出るまゝのたは言に、節を付けて是を歌ひぬ。下手の横好き、滅多に歌ふが可笑しいかして、古今節と名ざし給はる事、一藝の譽これに過ぎず。然るに此の比書林なにがし、予が宅に來つて歌の集を望む。元無作なるに恥ぢて、辭退するに許さず。尤も笑草の種なれども、あんまり可笑しき唱歌もあれば、我ばし笑はし給ふなと言葉をつがひ、誓文立てたを幸に、彼此三十六首をあつめ、節を付けて書いやりぬれば、其の儘板行する事然なり。

元祿十二のとし　古今氏自序
卯月八日の花の比

はやり歌古今集

惣目錄

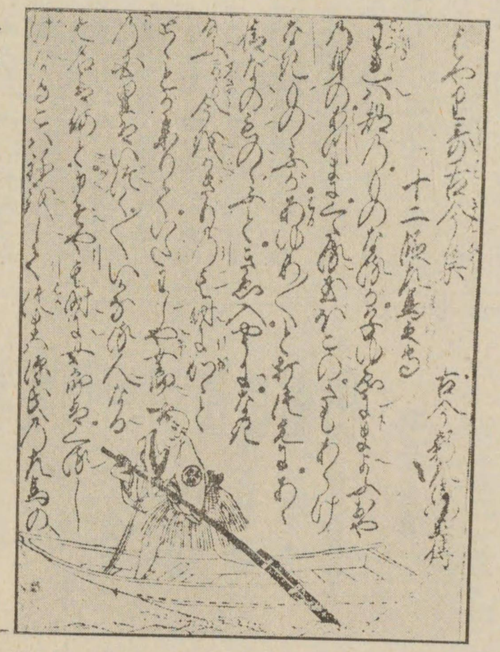
一　十二段左馬頭
二　野郎萬歳
三　大山寺歌說經
四　小歌淨瑠璃
五　刈萱歌念佛
六　本かはり歌念佛
七　神おろしやつし
八　刈萱歌說經
九　小町のくどき
十　小栗のくどき
十一　山椒太夫のくどき
十二　清十郎ぶし
十三　せい〳〵ぶし
十四　曆ぶし
十五　やひこぶし
十六　蟬ぶし
十七　いろはぶし
十八　むこ島ぶし
十九　さんさぶし
二十　柴賣ぶし
二十一　唐辛ぶし
二十二　山のうへぶし
二十三　有馬ぶし
二十四　同かはり
二十五　長松ぶし
二十六　木津ぶし
二十七　葛のうら葉ぶし
二十八　磯のみるめぶし
二十九　ところぶし
三十　天下ほとゝぎすぶし
三十一　ずんほろぶし
三十二　三河ぶし
三十三　敦盛ぶし
三十四　あひの山ぶし
三十五　うらやぶし
三十六　峰の松風ぶし

右三十六首

はやり歌古今集　古今新左衛門直傳

十二段左馬頭

本調子はるふし われは都の。ものなるが。子ゆゑに迷ふ親の身の。あづまに。くだる玉桙の。さもあらけなき武夫が。あゆめ〳〵と打つ杖に。あゝ情なの武夫と。消え入る。やうに。泣き給ふ。二上り今を限りの其の時に母と父とが參りていたはしやンア女郎の國里は何處、何處如何なる人なるぞ名は何と。ヲヽ申すぞや。其の時に女郎は。苦しげなる聲音をして夫は源氏の左馬の守名は。義朝と。ヲヽ申すなり都の。人のなつかしさと是を最後の言葉にて西にむかひて。同音に南無阿彌陀ァなむあみだなまいだ。



野郎萬歳

まんざいぶしとくわか衆によね萬歳ときみ。〳〵きみ立ち榮えます花の都に住む玉の井の吉三郎。尾上の君と申すとも此の君とても劣らじ。だいだいは疝氣の藥はじめて佛法弘めける。下神のみやざき彌津三勘太郎菊之丞のしを

よに爰に可愛らしきは戀の小源太夫□しさあへ伊達な小袖に模樣して阿彌陀笠がお好きぢやさあへ藤井出來島大次郎はお杯がお好きぢやさあへ奈良は七堂大伽藍難波。津の國天王寺。聖德太子の御代の時よりはじまり。鳥追千秋萬歳の福の神を祝うた。祝うたが定には君も榮えましますこそ。ぞけるこそけれなれ誠に目出度うさむらひける。

大山寺歌說經

二上り語るにつけて悲しきは此の。をさあいがア身の上よ。中父は播磨の何がしとて。人に知られし武夫よ。母は室津の。女郎のはて假に難波にすまひして此の子を。儲け給ひしに過ぎつる。秋の末つかた我に此の子を預け置き。痛はしやなをさあいは。父よ母よと戀ひ焦れ。晝は終日よるは又夜明けの鳥と諸共に。まどろみもせず泣明かす。ハルか。あいの。者や〳〵。幼兒や夜すがら。抱きかゝへてすかせども。長作殿には乳がない母戀ひ。しやと手につかず。文彌はづみ足ずりしてこそ泣き給ふ。目もくれ心消え〳〵と身も世も。あらぬ不便さに。母の大ぶに渡さんと扨てこそ。室津に參るなり。

江戸小歌淨瑠璃

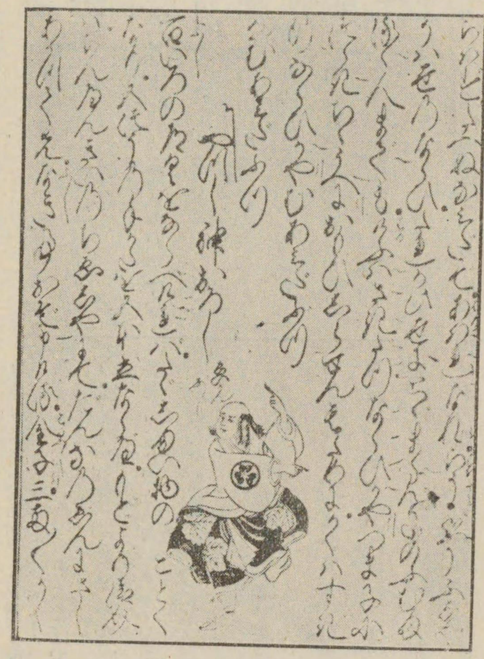
切れとはな〳〵思ひ切れとはな死ねとの事か。死ねばお寺の諸事世話ぢやもの淨るり宵々閨に引籠り。待てど暮らせど其の人の。そよとばかりのおとづれもはや九つの鐘が鳴る扨ては思はぬ障りゆゑ今宵の逢瀨はふしいしやほんなり。よし〳〵。かこつも野暮らしやいつそ夢こそましならめ枕一つを樂みに。戀し床しき閨のうち。

苅萱道心歌念佛

うき事を思へばいとゞ。むゥねの火の消えやすき身と いひながら□□□□つなァがれェてなまいだ。なまいだ□□□□まあいだ佛。南無阿彌陀なまいだ夢の世に悟らぬ事。のはかなさよなまいだ〳〵〳〵〳〵。鉢叩野邊よりあなたの友とては胎藏界の曼陀羅と。血脈一つに數珠一連なまいだ〳〵。まあいだ佛なま彌陀〳〵南無阿彌陀。

〆替歌念佛

下長かれと引中何思。ひけん世の中に引。うきを引ゝ見する
は。命なり引む阿彌陀佛ンな引南無阿引阿入彌陀夢の世の引
夢に。夢見る入夢なれや
引消えなん。ことのヲ、は
かなさよ引つぼみし花
の。散る事も引これもう
きフシ世の引無。常ぞと引
悟らせ。給ふぞ悲しけれ
引無阿彌。陀佛ンな引南無阿
ア彌陀引鉢叩無常の煙は時
をきらはず。絶えぬ涙ぞ。
はるあはれ引なれ引鉢叩老。
少不定は世のならひ。誰
か此の世にとゞまらん。事無う生るゝ人までも。はる今日
は先立つ習ひかや引妻子につらき父上に引思ひ知らせん
其の爲に。かくはすぎ行く習ひかや引無阿彌陀佛南無阿



彌陀佛。

〆やつし神おろし　永閑ぶし

上ふし百いろの道具を竝べければ。たゞしまひ物の如くなり。五通の手形を五本立てならべ。もとより清介は神變奇異の智慧者にて。檀那の緣にさしあがつて先。ふしなき事をぞ申しける。はるふし金子引三兩〳〵貸し給へ。下かみへのぼるも路銀なければてんと白癩五道の詰りは下界に墮つる。伊勢に身代かためたれども　雨に降られ風に吹かれ。月待ち日待ちはあまつさへ。おゝにちにあひ淺ましや火吹く力もあらばこそ。大屋の家賃のなさゞれば。ぎん立てよ〳〵と。あたまくだしにひ(木ノヤ)

かられて。男ならば正八幡大菩薩。待つぞやひらにおなしやれ。伏見のごほうはいつもの如くとうにすまそば何とせん。立たば此の月申の日よ。くるまは少し御免なれ。眞實ほんになすならば。下ぎん錢は一文無けれども。ぎん天王寺で醬油造らせ炭賣りしても大事もない。四國の米は讃岐で一石同じく一石三斗なり。筑紫の彦三はいつもの如くやもりしてきどくにめうとは方便なり。丹後に成相きれいに門立て大勢暮すと承る。日吉は山王。廿一社。親は白鬚左ちんばでこすいな男で。ちゝをぶんぬく天めいなり。美濃の國にくんだりて。横根の煩ひ膿の出たは無作法なり。出刄で腹切る湯殿の湯かたは見る間に失せたが。だいつが取つた手許が見たい見つけたに。妙義町には願人坊。追ひ來る時は一りん逃げ二りん逃げ。第三にあたつては奴に頭を打ち割られ。そうじて身の疵は。三千七百餘疵たり。假令定業限りの質物なりとも今一度。請けさせてたび給へと三重せり付き〳〵〆上祈りけるふし質屋も納受。し給ひけん五兩二つにさつと割れ。二兩二分に。ぞ成りにけり。三人の泥坊ども左手右手に取付いて。ほゝかたつたり〳〵。トメ漢家本朝にか程の騙はまつたと二人はあるまいとて。金貸す者こそなかりけり。

〆小町のくどき

上ふし杉原紙の古反故戀は樣々多けれど。みち深草の引少將の。歌の餘情もあはれなれ。引けば引かるゝ世の習ひまして主ある袖褄も。風の薄の靡くとて百夜通へと鳴く鳥は引小野小町の文使引。たゝき手飼ひと聞けばなつかしや。戀に焦るゝ我が思ひ。露を結びて我が戀結びの神に奉るよほんほ百夜の。あひの山かゝりみてに君と我結びし紐を解かんとて。車の榻にきざを付け行きては歸り歸りては行き通ひ給ふぞふし哀れなり。小町は物の隙よりも見るに心のいとほしや。上少將餘りの悲しさに枕詞にくだかけの九十九夜にもなりしかば。一夜を待たで死〳〵給ふ。これも戀路のうき習ひ兎角かなはぬうき世さ。

〆小栗判官くどき

上ふしきて見よかしの戀衣干す暇もなき戀慕の闇。照手の

姫は明暮と小栗の御文取出し。墨附の尋常さよ。互に見もせぬ中なれど。筆にて心を。迷ふぞや。たゝき峰に立つ鹿うす紅葉と召されしを秋の鹿ではあらねども。妻戀ひかぬると之をよむ根笹に霰とめされしは。觸らば落ちよと之をよむ引。池の眞菰は引く手に靡く。弦なき弓に羽拔鳥。立つも立たれず居るも居られぬ心なり。埋火とめされしは。燃え立つ心と之をよむ。照手奥書を見てあれば一首はかくとぞにや（未ノマヽ）されたり。我が戀は岩にせかれて。よいやさ。瀧川の岩にせかれて。よいやさ瀧川の割れても末に逢はんとぞ思ふ。くどきこれは昔の物語今はそれには引代へて長がもとへ。二瀬奉公にぞ出でらるゝ。美女は惡女の妨げと長が女房。小萩に向ひて云ふやうは。今日よりしては奥山の鉢叩松葉をよめとぞ申しける引。あの奥山の松葉をよまばそなたは天なる星をよめ。水ない川で。舟を漕げ水ない川で舟こがばそなたは目籠で水を汲め。くどき長は大きに腹を立て小賢の小萩やと料足七文取出し七色買へとぞ申しける。上照手これを受取りて餘りの事の悲しさに。下の女子に問ひければそれこそ易き事なりと。七色の品々を。物知り顔にて教へけり先づ。とうなんとは豆腐の事。いや〳〵。春の初のつく〴〵しゝ引。せいなんとは雪駄の事ではござらぬか。はて扨て粗相な人があるそれも芹をや申すらんかごもりとは駕籠舁の事かとよ。いゝやそれも野老なり。うごもりとは鼠の事かいの。いゝやそれも山の芋引。闇の夜の連れ男子とは。總嫁のぎうでは御座らぬか。いゝやそれも小殿原では御座らぬかと。さもしほらしく問はせ給ふ。トメ目もとにまたしほがる。

山椒太夫くどき

中昔となりて今の世に語るも由な歎かじな。由良の湊の主をば山椒太夫と申しつゝ。慾の心の深み草。露の命を繋がんと姉に信夫弟に忘れ草。忘れがたなき身の勤め。上ふし今日も朝四つあさ潮を。十荷汲めとの仰せにて濱邊をさして急がるゝ。折ふし波風荒うしてゐ引さつさ時雨のなよいやさ萱屋のあられよさ引下音もせできてふり心ゐ引降り來る雨に身も濡れて。持ちたる柄杓桶ともにに波捕られて力なく只さめ〴〵と泣きゐたり。かゝる所に三男の。三郎來つて云ふやうは桶も柄杓もさし流す。心のうちこそ面憎や。今日よりしては弟が如く髪を切り。一緒に柴を刈るべしと。あらけなくも言ひ付けてはづみ我が家を指してぞ引。歸りける。中又ふる明の東雲に引。兄弟連れて奥山の。峰の嵐が烈しくて寒う御座るか姉御樣。草臥れたるか弟と。互に手に手を取りつゝ。峰へ上れば茨が取付き。放せば取付き〳〵日が暮れて引。かゝる所へ柴刈數多連れ來り此の由を見るよりも。力を添へて落すれば。兄弟此の由聞くよりもこは有りがたしと夕暮の月の都にのぼらんと小笹篠笹かき分けて。松吹く風はさつ〳〵さ。若しや追手のかゝるかと物すさまじきゐ。

苅萱歌說經

おつる涙の。ひまよりも母無きかたの身のつらさ引。子の先立つも引。うき世の習ひと引いひながら引よその哀れを引。身にうけて引。本調子いかに我が君聞き給へ。假令見もせぬ父なりとも。逢はせ申さん其の間先づ尋ねし所はどこ〳〵ぞ。上フシ金堂西堂小路〳〵引を尋ぬれども。其の行き引方の知れざれば。身の行末は。〳〵如何ならん。哀れと思す人あらば。詞筑紫訛りの今道心教へてたべや御僧と。文彌ハヅミ涙にくれてぞ申しける。實にこと。わりや我々は。筑紫筑前引。姓は苅萱の。加藤左衞門繁氏が二人の子に。兄にま三郎弟に。かん石童丸と申すなり引。さればにや引〳〵。はやめそも〳〵我々が身の上は。深山隱れの遲櫻何時を盛りといふ事なし。月とも星とも思ひぬる引。母上樣には過ぎ遲れ。賴む父には。振捨てられし身の行方さすがに我も死にもせず。兄弟一緒に手に手を取りなう如何に御僧樣。筑紫の人のあるならば教へてたべとぞ申さるゝ。父にも母にも添はぬ身の引。何とかならん悲しやと流涕焦れて泣き給ふ。二人手に手を取交はし。消え入るやうに泣き給ふ。

清十郎ぶし

フシむかひ通るンは引。とゝんとどつこい。清十郎ぢやないか引笠がよくハル似ンた引とゝんとどつこい。いよ菅笠引が

ァへ。笠が似たゝとて引とゝんとどつこい清十郎であらば引お伊勢參りは。皆清十郎引ゐ引木かげ立寄り笠傾けて引逢はで往のとはさりとはつらや引憎や面憎やあこがれ來たに清十郎。殺ゝさば引とゝんとどつこいお夏も。殺する。

〆せい〳〵ぶし

中まぶの男は。一入可愛いィ〳〵引中戸であひに呑付け煙草引〳〵引みだれ。〳〵。亂れ枕の床のうちしよばせせい〳〵〳〵。君は眞紅のようやよやよ結ほれ糸か引しよばせ引せい〳〵〳〵〳〵おらがふくには引子寶ゝぢや引抱いて寢た夜は。ほちや。〳〵ゝと引ほちや〳〵〳〵ほちやするわいの。

〆暦ぶし

中伊勢の暦。歳こよみ大經師のこよみ〳〵こよゥみ引下うはらたつもく引寅の年引目出度い〳〵。猫が猫が三味彈きや鼠が。よめり鼬や所帶するこゥれ名所。猫が。〳〵三味彈きや鼠が。よめり鼬や所帶する是めい所これはァんじやう。

〆やひこぶし

中おじやれ山いこ彌彦の山へ引母は先きへ往んで引ギンひる寢の。寢ゝごと云うたをかしさわいの引うちの鍋も釜もふすほり鑵子もかゝ。そりやこがゝねへ引かへし晝寢の寢ごと云うたをかしさわいのうちの。

〆蟬ぶし

深草の庭。荻萩。薄。かたうづら引白い蘭こそ。祕藏の。石臺引虫の聲々引松虫鈴虫轡虫引。常に鳴かぬは。たるら虫引いとゞな秋は淋しきに。蟬經讀むわいの引蟬がハル經讀みや。みみみ。蟬經よむゥわいの。

〆いろはぶし

中子供〳〵よ紙筆入取らしよ引上いろはに。ちりぬるをわか引我が世たれぞ常ならむ引うゐのおく山なないも〳〵〳〵けふこえて。順禮ぶしかゝりあさき夢みしゐひもせず京。鉢叩

宵にや和讃。夜中に法華經曉起きては融通の念佛紙衣〳〵。阿部川紙衣ゐ引。

〆むこ島ぶし

中むこゝ島に住居する。ハル小萬女郎ゥわァいの引年は十五引なありや心はつハやきの。まん中よさかへしまん中よさァ年は引年は十五なありや。心はいやつきのまん中よさ引。

〆さんさぶし

中忘れがたきはかの。人さまの引色かはり過ぎし便にこさ。れし引文に引。下假令三千歳引はる逢はずと引まゝよ引親と親との結びし緣が引。合手何の解かりよぞ其の下紐を。うらが解かいで解くもなおんじやるまい。說經あとのいの子ゥに引こされし引文は引何時〳〵よりも可愛らしやあゝあゝゐいこのさんさ。

中富士の裾野のなあ〳〵ァ一本薄やれかられしは。何時か我が戀穗に出でて引亂れ逢はうといふことかゐいこのさんさ。

中岩の挾間のなあ〳〵やれ溜り水。祭文ひとり澄ませといふ事か君としめよて濡るゝ枕は。入子鉢では御座らぬが具合がよかろと褒められた。褒めたも道理今の世に又とあるまい御女郎引。合手播磨引のゥ女郎引は引お手があれ。あれ見よあれゆどんとどつこいいとゥしへ引道理かな。播磨引しほのでん。でん〳〵で所でんとどつこいいとゥしゐ。

〆柴賣ぶし

ひけや〳〵引牛のはるも木ノヤゝ綱ァをゐ引下柴に櫻ゥ引折添へて引稻荷參りのはる參りの稻荷引振袖ゆかし引友禪模樣でそんれはゐ引おかた四十路引にィゝ娘は十五。對の模樣でゆかァしゐ。さいかち山へ登るとて。もつけな暴い風が吹いて來た引脛の白さに白さに脛の引脛の白さに日を暮らす。

〆唐辛ぶし

富士の嵐に櫓櫂を入取られ。〳〵〳〵引ひとりハルこがる田子の浦。山椒めが引胡椒を女房にしよとおしやァる引

唐辛が媒人。蓼穂が悠氣する蓼穂が悠氣する引。はづみどうでも山葵は。鼻をはァじくゐ。

〆山のうへぶし

山の上には。白豆引青豆引枝ァ、ハル豆白い袋はひさうの椎茸引芋の葉の露引ぶりしやりと引ぶりしやりと引これのおさつに機織らしよ引郡内八丈小倉ァ縞引小くら縞。郡内八丈。小くらァ縞引。

〆有馬ぶし

中松になりたや有。馬の松に引藤に捲かァれて引寢とごヲ寢と御座る引まかれて藤に引藤にまかァれて引寢とごヲ寢と御座る引情ありまの花のゐん引。

〆同替唱歌

中花になりたやさく。らの入花に引色にもつゥれて引ゐと御ヲ座るもつれ引て色に色引に引もつれてゐと御引座る引別れもの憂き。きぬ〳〵に引。

中となり藪からによき。〳〵出る引は引去年のやんれ引こぞの竹の子の子の子の入ま竹。こちのとゆ竹に見て置いた長松。やれ見て置いた去年のやんれ引こぞの竹の子ヲの子の入子のま竹引こちのとゆ竹に見ィておいた長松。

〆長松ぶし

〆木津ぶし

酒は酒屋によい茶は茶屋に女郎は木辻の。ヲ鳴川に。ないそなゝいそ皐月にや戻る遲て六月中。ごろに引。丁が丁ならならびの丁なら。逢ひもしよずもの引見もしよずものを。せめて添はずと引。ヲ見もしよう。をものを。

〆葛の裏葉ぶし

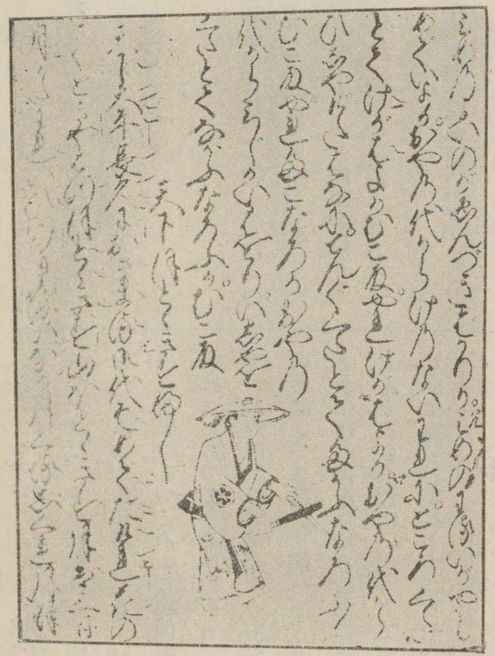
中葛の裏葉のきり〴〵す引泣きては恨み。恨みては泣き引逢はで死のとは。さりとは辛や引戀し。ゆかしと思ひし我を。上ほんに誓文捨てうと事か。殘す言葉を如何にせん。

〆磯の海松ぶし

磯の海松の引假伏しは引人よ咎むな。咎むな人よ引立つあだ波の濡れ衣と云ふとも浦のヲ貝あらじ。

〆野老ぶし

みめのよいのが緣づきばかりか。ハルみめの惡いが寡で居よか。親の代から毛の無い我に。野老食たとて毛が生よか婿殿。やれ毛が生よか。親の代からひしやげた鼻に。天狗食たとて高うならうか婿殿。やれ高なろか親の代から短い羽織。醫者を食たとて長うならうか。婿殿。



〆天下時鳥ぶし

天下太平引長久に引治まるハル御代ぞ目出度けれ上引花の咲く時や引初時鳥引山ほとゝぎす引月は三日月。片割れいびつ引丸い。な。が月くるしぐれ月。月をながむる。ひかけの。あぶない引窓の引あかしくれ竹引ギン幾夜の枕戀に寢ぬ。夜ゝは引ふたよ引ヲ三夜。

〆ずんぼろぶし

上だてを上好みやる御厨の關介。くるやら。馬も嘶き轡も鳴るに。いゝいい次郎よ。太郎よ。どつこにどつこい扨て。馬ととんとつつんつ繋あいだ引上お寺の寺の。上寺の柿の木にずんぼろぼに〳〵ずんぼろぼ。ととんとつつんつ繋いだ。

〆うらやぶし

中裏や上おそろしや師匠坊殿が引。上來るやら門の扉がきりゝと鳴るにいゝ小僧よ。どつこにどつこに。さて。かくととんとつつんつと。かくゥした引。お前の。〳〵下に大黒を。詞そりや。かく。ととんとつつんつ。かくした。

〆敦盛ぶし

こゝはどヲこぞと。そんれは馬子衆引に問へば。こゝは一の谷引敦盛様の。下最期所かやあのおゝおいとしや引。親の引ためとて引行方もしいし知らぬ引〳〵引人にも添ひまあ。くら引知らぬ人にも添寢する。

〆あひの山ぶし　井ニもんさくはやロ

あいの山下引六時〳〵の。鐘の聲聞きてんな引おどろヲく人も無し合引上後夜の鐘を。聞く時は。詞是生歌かゝり滅法と響くなり。そりやひゞいたはあひの山殊勝なり。それ世間の無常を鑑みるに。今當世の面白や。伊達に見よけなァ引なり振はこれぢや〳〵まあそれぢやいの引笠の紐解くなァりふりはあつたものではない。ない〳〵〳〵ぞやハル憎くか打たりよか手がそれて引されば吉田の兼好法師が徒然草に。下戸ならぬこそ男子はよけれ茶ァ。碗で三杯引つかけた。されば頼みし。法師はたれ〳〵。天王寺のとつこみよこ法印坊と。木やりいふまいと言うてから又候や天王寺のとつこみよこ法印坊とおいやつた。そんなら我は。たちつてとまみむめも。たなゝをしきに箸百八膳置いたか置かぬかちんなめちぎりき。下戸も上戸もうんのめ騒いでさ戯れ。遊べあひの山夢の世に。引合大阪說經ときの興七郎を見知りごしにとんくるり。ぐるりや〳〵どんぐるりと皆はいだィヤてれつとゝん〳〵をどるめはないは扨て。茶筌やつこりやさとんな。

〆三河ぶし

中三河の引かきつばァたさあ蓮華經。寺の小藤に惚れたとさァ蓮華經中ゆゑを如何にと問うたれば引富士の山ァなら思ひを蓮華經はる惚れたとさ身は水なかにすまひすると

も。袖濕くほどには。あらァじな。

〆峰の松風ぶし

峰の。松風。下吹く時は〳〵都懐し我が身は昔に變らね。ど思ひ忘るゝ引ひま。上もなし合手此の夕暮の。物わびしさを誰に。語らん人もな〳〵思ひ。上忘るゝ下ひまも。なし合手床しさにそなたのかたを。眺むれば。うらやましくもなみだ川此の行くすゑを。如何にせん。はゃめ我が心は變らぬいろに花の都とわれ思へども我が思ふ程。上君の心にうらやあるらん。

ふし付口傳直之正本

古今新左衞門

古今小歌集三十六首終

第二十一　松の葉

松の葉序

それ吾朝の音律は、天の鈿女の命より起りて霰ふるらし外山のかつら、色に見ゆるをいかにせんと、庭燎の唱歌に始まりける。かつ人皇百七代正親町院の御宇、永祿の比、琉球より虵皮二絃の樂器渡り、和泉の國堺に住める琵琶法師中小路が手につたへ、長谷の觀音の靈夢によりて一絃のまし三絃とせしを、世に三味線と呼びて、しらぶる音にあらゆる呂律そなはらずといふ事なし。是れ一より二を生じ、二より三を生じ、三より萬物の音聲を生ずる理いたれり。かの中小路より石村虎澤澤住相うけ次ぎて、寛永に攝州に加賀都城秀堪能ならびなく、九重に遊び、東武に跪き、官職に昇進して、加賀都は柳川、城秀は八橋、みな僧官に准じて撿挍に經のほりければ、この三絃の鼻祖兩家の棟梁とはなれりける。傳ふる所、本手、端手、新曲、綿蠶として淺利撿挍、佐山撿挍、出田撿挍、市川撿挍、朝妻撿挍、藤島勾當、今や都には小野川撿挍、三橋撿挍、猶等覺一轉のひかりをあらそふ。藤永勾當、熊川勾當、松澤勾當、木崎勾當、早崎勾當、豐田勾當、清田勾當、倉橋座頭等、武藏には岩崎撿挍、豐橋勾當、連川勾當、安數川座頭等、雪上に霜くははり、錦江に桃花飜り、塵動き雲逗るの巧妙手として、十の指さす達人なり。やつがれ年ごろ閑暇の茶菓に是をもてあそびて、知音のこゝろざしありければ、より〳〵かの本手、端手、長歌、端歌、吾妻淨瑠璃、新曲の唱歌を草書し、かつ古今百首の投節をくはへ、花晨月夕の心やりに書いつくを、ある人ねもごろの求めに應じて、櫻木に命永うせんとするに任するものなり。この花のもとに遊ぶ好士あらば、德孤ならず、吾いづくんぞかくさんや、かくさんや。

于時元祿十あまり癸の未龍集の凉み月、秀松軒の木のもとに書き集めぬれば、松の葉と名づけぬるもむべなるべし。

松の葉　第一卷

○三味線本手目錄

一　琉球組　二　鳥組　三　腰組　四　不祥組
五　飛驛組　六　忍組　七　浮世組

此の七曲を本曲といふなり。石村虎澤琉球國より相傳のうへ、手をなほし加へて一作となし、今の世に至りて、三味線第一本手組の濫觴となれり。

○端手目錄

一　待つにござれ　二　葛の葉　三　比良や小松
四　長崎　五　下總ほそり　六　京鹿子　七　端手かたばち

此の七曲を新曲といふ、柳川檢校作也。

○裏組目錄

一　賤　二　錦木　三　青柳　四　早舟　五　八幡
六　翠簾　七　なよし

此の七曲柳川檢校作也。此の內早舟相傳の時、師へ一禮の法式あり。

一　本手琉球組

○比翼連理よの、天に照る月は、十五夜がさかり、あの君さまは、いつも盛りよの。

○おもひを志賀の松の風ゆゑに、しなでこがるゝ〳〵。

○み山おろしの小笹の霰の、さらりさら〳〵としたる心こそよけれ。嶮しき山のつづらをりの、かなたへまはり、此方へまはり、くるりくる〳〵としたる心は面白や。

○とろり〳〵としむるめの、笠の內よりしむりや、腰が細くなりそろよ。

○とても立つ名がやまばこそ、此方へお寄りやれのう、柴垣越しにもの言はう。

○小原木買はい〳〵、くろ木召さいの、てうりやうふりやう、ひゆやりやにひやるろ、あらよひふりやうるりひようふりやう。

二　鳥組

○鳥もかよはぬ山なれど、住めば都よ我が里よ。

○我が戀は千ほん小松の枯るゝほど、田井が水涸て埃たつほど。

○みるめばかりの戀をして、千賀の鹽がま身を焦す。

○いへば世にふる、言はねば心がもだ〳〵と。

○お目と目と目を見合せて、はなれがたなのその面影を夢にも見もせず、うつゝになりとも逢はせてたもれ、逢はねば心がもだ〳〵と、思ひの種や、あこがるゝ身を何とせうぞの。

○京では一條柳屋が娘、四つ割帶をたすきに掛けて、いかにも腰がしなやかな〳〵。

○いざ詣ろ六地藏へ、ほとけに隔てはなけれども、さりとては、ではのしほやが建てた六地藏、えいそれ、しほやが建てた六ぢざう。

○忍びの殿さまに、ふらんと下げさしよ、緣のあるゆゑ餘念がないよの。

三　腰組

○腰に下げたる巾着は、これも憂き人の縫ひぢやほどに。

○道で見たりとも忘れまい、枝垂やなぎの振りぢやほどに。

○雨はふるとも雪ふるなさ。忍ぶ細道の笹の撓むに。

○成ると成らずと文をばつくせ、心づよやつれなや、とにかくに、我れは數ならぬ身ぢやほどに、君來うか來うか往こか、來ずば戻ろに。

○一夜ふた夜と馴れそめて、明日はふねづる、何とせうぞの、恨めしや。

○いやと言うたもの、かき口說いてのう、何ぞや其方のひと花ごゝろ、思へや君さま、かなへや我が戀、あらうつゝなの浮かれ心や。揉まいの〳〵、さゞらもまいの、我等も若い時は殿にもん揉まれた。

四　不祥組

○若いが不祥で負ひまるらせうかの、背門柴垣の破れたを。

○思ふまいとの鉦をちんからころりと、打てば罰やら猶おもはるゝ。

○橋に我が身を投げ掛けて、渡らせうよの、とろ〳〵とろと。やれ渡らせう。

○月の夜に打つ砧の音の、えいはら〳〵ほろ〳〵、はらほろと、又してもおどろく夜も〳〵あるに、獨り寢よとは何事ぞ、思はざ、なきそ、增す花狂ひせうずもの、わざくれ。

○わざと來んとはおしやれども、眞實おもへば、恥も人目もおもはくも、思ひ出されぬものぢやもの、しかしながら君はたゞ增す花のあるゆゑ。

○十七八は、うんえいころり長押のほこり、みな殿たちの目に入りた〳〵、目に入りたらば藥師へこもれ、藥師の前で目ぐすししよ〳〵。

五　飛驒組

○弓矢八幡寢はせねど、寢たとおしやらば、何とせうぞの。

○ひとつこし召せたぶ〳〵と、殊にお酌は忍び妻〳〵、れんぼれれれつのれい、しよじやうにそはゞ、れつのれ。

○これの千代女が髮わげは、紫竹こだけに四つの節、加賀や越前美濃尾張、越後京根來粉河坂本で所望めされた。

○あすは出よずもの、船が出よずもの、思たけもなとお寢る殿御や、あゝお寢る殿御や、飛驒の踊りを一踊り〳〵。

○船の中には、何とお寢るぞ、苫をしき寢に楫を枕に、ひんだの踊りを一踊り〳〵。

六　忍び組

○いよ忍び〳〵て心うれしや、梅に囀るうぐひすの、夜は梢に宿るとも。

○思ふまいよの、やれそれほどに、顏に紅葉の立田山。

○いとま乞ひには來たれども、碁盤面で目がしけければ、まづお待ちあれ、柴の編戸も押せばなる、あはれ霰がはらほろと降れがな、その間に、あゝせうしや立つ名や、笑止と立つ名や、忍び踊りは面白や〳〵。

○戀をせば〳〵、二十三夜の月を待て、月の偽りなきものを。てててからこ、しやんぎしやかんこ、はらりついやひよ、ついや〳〵つやに、ちやうらゝに、やうつほゝ、忍び踊りはおもしろや〳〵。

○我が戀は涙の袋に色小袖、何とつゝめど、色にいでさふろ、やれいでは、あひ見てのちは、何とせうぞの、戻ろやれ、しやなら〳〵と。

七　浮世組

○誰も浮世はかりの宿、さのみ人目をつゝむまじ、よや君しやらり。

○ふみもやるまい、便宜もせまい、返事さへせぬ憂さつらさ、君をば人に思はせて、かほどにつらきものぞと、おんもひ思ひ知らせで、とはおもへども、身の上になれば、更に思ひ切られぬ。

○ともて立つ名に寢てござれ、寢ずとも明日は、寢たとさんだんしよ。花の踊りをのう、花の踊りをひとをどり。

○我れは小鼓殿は調べよ、皮を隔ててのう、かはをへだてて寢にござる。花の踊りをのう、花の踊りをひとをどり。

○いとし若衆と小鼓は、しめつ緩めつ、しらべつゝ、寢入らぬさきに、なるかならぬか〳〵。

○み山やるまい、深山瀧の水は、うちやうていつく、ちやうど打てば、うちやうていつく、つく〳〵しんたんたらつく、丁ど打つ若衆をどりをのう、若衆踊をひとをどり。

葉手

一　待つにござれ

○待つに御座りた、いとしの君やのう、今夜ござらざ、こがれ死なう。

○とても緣なき中ならば、などや始めのつらからん(ぬ)、いとゞ烈しき吹上濱に、とりを限りに、かの樣待てば、寒き嵐も身にしまぬ。

○われが殿御は藤五郎どの衆ぢやが、粟田口より石また曳きやる、えいや、やころさに、やつというて曳きやる、お聲きくさへ四肢がなゆる、まして添うたら死のずよの。

○きみと我れとはのや、籧の絲の、切れて離れてまた結ぶ。

○忍んだりやな、しのばれたりやな、裏の細みち小藪から。

○おもふ儘なるのや、今宵かな、月は朧に夫は來て、もみぢ葉を見よ濃いは散る。

二　葛の葉

○さても優しの、いよ葛の葉や、何を便りに這ひ掛る、いよえい這ひかゝる。

○君をまつ島、雄島の海人の、袂干がたき我が涙、いよえい、我がなみだ。

○深山清水は底から澄むが、君の心も底からか。

○山で小柴をしむるがごとく、こよひ其樣としめあかす。

○淺き契りにあひ馴れそめて、深き思ひは、あゝさて涙川、君に逢瀨をまつばかり、あゝさて待つばかり。

○こんど御座らば持て來てたもれ、ぎふのお山の檜の木の枝の、浮世がかりのおもひばを。

三　比良や小松

○比良や小松の朝がよひ、褄が濡れゐ、磯打つ浪に。
○鹽津海津にあるときは、上りたいよの、坂本へ。
○門に立ちたは八もじ様か、夜風身の毒、内ござれ。
○いつの何時そなたを見そめ、我れが身はたゞ磯邊の千鳥、鳴かぬ間もなや君ゆゑに。
○こゝは三條か、やれ釜の座か、一夜泊りてしけりまるらしよ、われが殿御は名越にござる、さてもお留守は物憂いものぢや、えい〳〵さら〳〵のう、石をひく、えい〳〵やつというて曳くには夢だんべいの、えいというて曳けば、お靡きやるかのう、いよやつというてえいとえ、えいさらえい。

四　長崎

○みやいちが、よれた〳〵、しよぢよがなさけ。
○長崎の鶏は、時知らぬとりで、眞夜中にうたうて〳〵君を戻す。

○くれなゐの三尺手拭、かたみに見よとて置いて行く。
○くれなゐは薄くなるとも、そもじと我れとは、一ご契るべいぞよもさ、白髪に小枝の咲くと、ちぎるべいぞよもさ。
○昔より今に渡りくる黒船、緣がつくれば、鱶の餌となる、サンタマリヤ。
○思はぬ君に、おなさけは無益、うき身やついて、なけくわれ等に、落ちさせられぬ。
○名所さまゞ〳〵多けれど、吹上の濱は和歌の浦、さあ天神玉津島、布引の松山、いく千代ぢよと和歌山の松、お詣りあれの紀三井寺。

五　下總ほそり

○この程は、戀ひつ戀ひられつ、今宵は忍びの初でござり申すよの、さあいよえいよえ、打解けてゆら〳〵とお寢れのうさまだよは、夜中よしげれ、とんと君さま、さあいよえ〳〵。
○まことやら、鹿島の湊に、彌勒の御船が着いてござり申すよの、さあいよえ〳〵、帆柱はこがねの帆ばしら、帆には法華經の、ごのやまん卷物、さあいよえ〳〵。
○甲斐の國なる信玄さまのな、一度もござらぬ、二度もござらぬ、おちよほ忍ぶに六つの苦がゐ、まづ一番に雨に霰に夜露に柴垣、のうさて犬のあだ吠え、それ月はなほ、月はのうさて、月はえせもの。
○忍ぶ細道に松と胡桃は植ゑまい、待つ夜にその身がくるみでもなし、なよさてまことに、來る身でもなし。
○去年の竹とよ、ことしの竹とよ、しどろでもどろで、のうさて節がそろはぬ、なよさてまことに、節が揃はぬ。
○誰でござり申す、壁越しのまた鼠鳴、こよひは殿御のあとに寢て聞く、寢ても聞けとよ、おきても聞けとよ、今宵の夜がさて、明日の夜になるとも、逢はずば戻るまいよの、なよさてまことに、戻るまいよの。
○さてもつれなの金銀さまや、きんぎ御座らざ、ぬめりて暮らそ、それを誰ぞと尋ねて聞けば、六條下の町の和歌山さまの、内の山の神が聞いたらば、たけ〳〵たけりやろものを。

六　京鹿子

○これは京鹿子色もよや、目結手ぎはもよや、着よや、あら都戀しやのう、都のしてたち戀しやのう。
○これは京小袖色もよや、紋がら手際もよや、着よや、あら都戀しやのう、都の染殿戀しやのう。
○しんの闇にも迷はぬ我を、あゝさて其樣の迷はする。
○吹けよ松風、あがれよ簾、今の小唄のぬし見たや。
○花とならばなよ、たんだおん身は紅葉の色よ、のうさて日數にそひて色まさる。
○梅の匂ひを櫻ばなに宿らせて、青葉のまゝに眺めばや。
○尺八の一節ぎりこそ音もよけれ、君とひと夜は寢もたらぬ、あら心なの君さまや。
○そちと此方とは、松に藤のさがり枝のごとく、誰彼時にかゝる、かゝる情が身に纏はるゝ。

七　はで片撥

○笛による鹿は、妻故に死する、我等もさまに、やれ命

捨てうずよの。

○ありがたの利生や、お有りがたの利生や、佛まゐりの利生で、妻に行逢うたのう。

○朝間とく起きて、手水瓶を見れば、我が置かぬ花のあるも不思議やな。

○不破の關の板間に、月の漏るこそやさしけれ。

裏組

一　しづ

○賤の身なれば色には出さぬ、あたゞ心のうちに焦るゝ。

○立寄りてむすぶ山の井の、あかれず飽かぬ仲はな、松の二葉よ千とせ經るまで。

○筆でかくとも、繪にうつすとも、さらに盡きせじ松島の、波にうつろふ月の影、島の數しん知らぬ。

○たんだ人には、馴れまいものよ、なれての後は、るるんるゝ、身がだいじなるもの、離るゝが憂いほどに。

○かづいた水が、ゆり〳〵たぶつき、滾るゝげなものを現なや殿はみやこに。

二　にしき木

○神のお前の御注連縄、そよふく風にも靡けばなびく、つらき心を打捨てゝ、ものぐねにななめされそ、そうぶりわるや打解けよ、くすみても詮なや。

○山がらが、籠のうちでの恨み言、かごが小籠でもんどり打たれぬ。

○七里小濱のな、砂の數ほど思へども、緣が薄いやら添ひもせぬ。

○をつとは錦木とり持ちて、鎖いたる門をたゝけども、內にこたふる蟲の音の、思ひきろやれ戀のみち、きりはたりちやう〳〵。

○忍べども、思ふ君には逢はずして、村さんめは、はらはらほろと降るほどに、思ひきろやれ戀のみち、きりはたりちやう〳〵。

○とてもお捨ちやるものゆゑに、去りがたいとて抱かれうか、浮世の中の讃歎にさ、言ひつる事よのと言はりよよりも、なまなか一夜はまゐるまいよ、いや〳〵いやなら、始めに否とはおしやらで、今さら何とならうぞのう、思はざな來そ、增す花狂ひせうずもの、わざくれ。

三　青柳

○さても其方の立ち姿、春のあをやぎ絲ざくら、心がたよたよと。

○ふみもやりたし便宜もしたや、おもかげに立つそのおもかげを、忘られもせで、身に添ひ、そゞろに浮かれきて、うきやうこつや正體なしや、うきや戀のとまらぬ、たゞ兎に角に恨めしや。

○枕にかゝる亂れ髮、いとゞ心の亂れ〳〵てやるせなやよしやその身が何とならうぞの。

○緣なき思ひに身はほれて、朝がほの花の露よりもろき身をもちて、さのみ心な盡させそ。

○十七八は砂山の蹴蹴、寢いろとすれば搖り起さるゝ。

○曇り鏡か我れが身は、思ひまはせばとぎ欲しや〳〵。

○明日は殿御の砧打、おかた姫御も出てうたい、きぬた踊りはおもしろや、砧踊りはひと踊り。

四　はや舟

○祝ひめでたののう、嬉しめでたのうよう、若えだも榮ゆるのう、葉もしげる。

○ながの長崎の、長のるすんの留守すれば、思ひ出すことは宵と夜中とのう曉と、なごや山路よのう、肥後ぢや八代熊本ぢや、鳥も得かよはぬ山なれど、住めば都よ我が里と。

○四角柱ののう、四角ばしらの、またのんえい、それかど、かどの無いこそ添ひよけれ。

○花は咲いてものう、梅は開いても、花さいて無益のあだ花よ。

○これがいとまな文、手には取らいでなま中に。

○山ぢや谷間の、深谷おろしの、木の葉うづもれのう、柴の庵も、またのんえい、それなつ、都なれどものう旅は憂や。

○沖の引く汐に、竹にあぶらを塗るやうに、とろり〳〵

と、諷うて名のりて、漕ぐや船がたはえい上様の御座船か、またのんえいそれ、艪ではやらいで歌でやる。

○おちよぼちよぼさまの、態は椋鳥ぢや、聲は鶯ぢや、しゆくしやかむくしやか、さんはかしんはか、しんからきうたかずんばいほ、眉目が好ござれば、聲も詞ものうしなやかな。

○宮へは三里へのうえい、三里も近三里、はつかゞ市の源三が塗物は、漆では塗らいで、梔子ばかりで、さつと一刷、えいそれ、はつたらずんでんどう、そのやうな塗物は、たゞはくるゝとも、おらはいやく〜いやでそろ、やがてはぐるに。

○猿澤の池の水ではない、こひがすみそろ身の池に。

○篠竹の小篠竹の窓の嵐に、めが君もおよらず、われも寢ず。

○櫻木に鶯がとまりて、琴のひゞきに花がちる。

○さきの月の廿五日に、定めたるには似ぬ、照るも曇るも冬の日も。

○山は雪ぢや、麓はあられ、里は雨、うらへまはるも其様ゆゑ。

○沖を漕いで通るは、明石の浦の源三が本船か、さて艪ではやらいで歌でやる。

○一の枝ひけば二の枝靡く、なびけや小松の一のえだ、つりりんりく〜。

五　八幡

○月は八幡のまだ空にも、往の〜とは思へども、あとに心がとゞまりて、うしろ髪が引かるゝ、なんぼ戀には身が細ろ、二重の帶が三重まはる。

○たつるお茶には泡たゝで、われが浮名はむら〜に立つ、むら〜に立たば立て、のうまことの心解けずば、しよぐわんぢや。

○あの山蔭を、すぐに來るだに遲いに、なよ眞實恨み言さしおいて　まづ抱いておよれのう、なよしんじつ。

○思ふ門には竹をうゑて、雪の降りたる曙を、つれなき人に見せばや、靡く笹の葉。

○ひとの嫁御と竹にさく花、よやと思へばやへ曲もない、さまぢや詮ない、しやもしやももちく何しよ、添うて何しよ、それしよしや何しよ、若衆踊りをのう、若衆踊りをひと踊り。

六　みす組

○御簾の俤もの越しに、見そめ聞きそめうか〜と、戀をして痩するは人の知らずして、夏やせをすると、やれ推めさるゝ。

○露に亂るゝ絲薄、そよ〜と吹來る風にも靡きそろ、現なや正だいなしや、とは思へども、そもじと我とは、よろづ世までも千代までも。

○風にまかする浮雲も、吹く方へゆく、目でしめばひくと思はれ、つれなの君の心根や。

○かづいた水が、搖りこぼるゝも浮世の習ひ、さてもつれなや、正だいなしや、うきや憂や、ならぬは割れた尺八かのう。

○竹がな十七八本ほしやな、浮名や洩らさじのな籠に組も。

○割れた尺八手なかけそ、とても鳴るまいものゆゑに。割れた尺八手がござる、じいじとしむれば鳴るものを、取りて吹きて見たれば、ふしがちやうとした、れつろれつろつりよ、れつのれがつれつろ。

七　なよし

○なよし〜はなよし梨のあだ花なよし、なりはしもせで、なると名の立つなよし。

○さゝら小竹にあらねども、さらにさら〜、さらに知らぬもの、ともすれば何ぞよ、其方のものぐねり、何となりとお好みや、鐘を打とかのう。

○しんき晴りよやれ濱へ出て、沖のしまぐ〜を見てなりと、あれに見ゆるは志賀の浦、こがら崎一つ松、田舍くだりの道すがら〜。

○田舍くだりの旅の殿、名所の月が眺めしやんとのう、しやんと眺めたりよさ、そゞろ愛しうて、やるせなや。

本手端手裏組　終

祕曲相傳之次第

初傳　搖上　　二傳　亂後夜

この二曲を新曲の祕曲といふ也。誓盟をもつて相傳の時、師へ一禮の法式あり。亂後夜以前に、後夜、敦賀後夜といふ二曲あり。この曲に手を加へて、三曲一にして亂後夜となし、傳受する後に、晴嵐といふ一曲淺利撿挍手をくはへて彈く也。口傳

三傳　七つ子　この曲は浮世組をさきへ彈きその跡にて彈く也。

四傳　松むし　五傳　淺黃　六傳　茶碗

この三曲を新組といふ。七つ子相すむうへ、次に傳受するなり。

七傳　堺　　八傳　中島

この二曲を本曲の祕曲といふ。極最上の傳受誓詞神文ありて、一卷の書を附屬するなり。師へ一禮の法式あり。口傳

右相傳法式之次第者、柳川撿挍より淺利撿挍相承し、淺利より今都の早崎勾當にうけつぎぬ。こころざしあらん人は、早崎より口受あるべき也。

松の葉　第二卷

長歌目錄

一　若みどり　佐山撿挍作
二　まさみち　同人作
三　不二まうで　同人作
四　源五しう　同人作
五　三谷をどり　同人作
六　雲井弄齋　同人作
七　木やり　同人作
八　戀ごろも　同人作
九　小夜ごろも　同人作
十　もしほ草　同人作
十一　櫻づくし　同人作
十二　冬草　同人作
十三　四季　市川撿挍作
十四　八重梅　同人作
十五　春日野　同人作
十六　はるごま　同人作
十七　手まくら　同人作
十八　鎌倉八景　同人作
十九　わか草　同人作
二十　春風　同人作
廿一　狹ごろも　同人作
廿二　らつひ　同人作
廿三　戀づくし　朝妻撿挍作
廿四　笠寺　同人作
廿五　山づくし　同人作
廿六　夕され　同人作
廿七　川竹　同人作
廿八　花の宴　同人作
廿九　幾春　同人作
三十　浪まくら　同人作
卅一　七夕　同人作
卅二　引車　同人作

卅三　東山八景　同人作
卅四　夏草　同人作
卅五　うきね　同人作
卅六　小むらさき　同人作
卅七　香づくし　同人作
卅八　時雨　小野川撿校作
卅九　月見　同人作
四十　あだ枕　同人作
四十一　花見　同人作
四十二　玉くしけ　同人作
四十三　色香　同人作
四十四　梅づくし　鴛澤撿校作
四十五　小笹　生田撿校作
四十六　晒　北澤勾當作
四十七　かぞへ歌　野川撿校作
四十八　秋草　松岡撿校作　藤島勾當作
四十九　戀草　松岡撿校作
五十　しのゝめ　武州花都作

一　若みどり

春は初音の松がえ引きて、君が千とせを八千代とおもふその常磐木の若みどり、アヒノテ梅の花がき薫るより鶯きてふと囀りかはし、吉野の花もさくら木藤枝、いろなつかしき黄昏に、山ほとゝぎす音づれて、明けやすき夜のならひには、夢の浮橋なか絶えて、文もかよはぬ戀の路、蜘蛛手にものを思ふこそ、かの八橋の杜若、わか紫や濃むらさき、由縁ある身に頼みをかけて、えにしを結ぶ泉川、いつ逢ひ馴れてある染河の、あだ浪かゝるぬれ衣の、袂涼しく秋たちて、荻ふく風に亂るゝ露の、その玉葛かけしより、わする間もなき我が思ひ、空に浮かるるあの薄雲に、夕霧かゝるその月のころ、人まつ宵のものさびしさを、誰に語らんみ吉野の、たのもたよりも盡き果てて、恨み涙に袖しぼる、色は八しほに染めなしおいて、もみぢ散りしく高雄の山の、嵐につるゝ村時雨幾度ぬるゝ我が袖、アヒノテ拾はば消えん玉笹の霰はつ雪ふらば降れ、我れふる妻は〳〵實からいとし。

二　まさみち

とるや小袖のつまゆゑに、歩行習はぬ道芝の、露に起伏し萎れつゝ、軍みだれのことなれば、嵐ぞつらき花のまへ、ちり〴〵になる身の行くへ、まさみちの御ゝ手を取り、たどろ〳〵と、のんさて、まことに君ゆゑなれば、遙かに後を見かへれば、有りし所に立つ煙、いたはしやな我がつまの、何とかならせ給ふぞと、其方の空よとながむれば、涙の雨の玉島や、はや入相のかねが崎、いたはしや老の身の、さぞやもの憂くおぼすらん、我れが思ひに亂れ髪、ゆひがひもなき身なれども、南無や宰府の御ゝ神、いにしへの憂を守らせたまへやと、深く祈誓をかけ帶の、結ぶちぎりの朽ちせずば、つまにはやがて逢ひに相おふ松こそうれしかりけれと、語り慰み行く程に蘆屋の關にぞつきたまふ。

三　富士詣

宿の首尾よく繕ひおきて、浮かれ焦るゝ二挺立に打乗りて、思ふ君をばはや三俣の、上の茶屋よりわけよしが招く、氣の毒に、いよのほんほ、わがえだもさんよえ、このいよこのえ〳〵、はんもひちやさと兩國橋までのりつけて、花火花火をめせさせ買はんせの、よい〳〵そのやいそべに打つ波の、寄せくる遊山船がさわぎ集りて、しやぎりの音の、アヒノテ おひやりこひやり、ひやりこ〳〵ひやりひやり、らんらららりつるんろ、るるりやちやらるるろ、かねがまた、彼處を見てあれば、富士詣の行人たちが、懺悔〳〵六根罪障ざんぶりどんぶり、ずぶどぶひよひよんにひよ、瓢箪を腰に付けて水あそびもござんす、右は無縁寺いつもより、今朝打つかねの音のよさ、鉦を叩いて佛にならばさ、土手の道哲は氣の通つた佛ぢや、好いた佛ぢや。あれを見よ、さん茶通ひの野暮すけが、駒を早めて乘つたりや通りん坊、逢うたりやおそまき、さつて土手の際になれんば、はらりと、飛び下りてよい羽織被いで顔うちかくし、籬まがきをそろりと見れば、あれどれ振袖が、袖がのう袖が、のほんのほんえ。

四　源五しう

花は櫻よ薫るは梅よ、初音ゆかしき山ほとゝぎす、月は高雄のもみぢを照らす、雪の肌になれ〳〵、馴るゝは班女が閨の戸〳〵、アヒノテ行きて三浦の籬の内に、花のいろ〳〵その濃紫、きくに初音のうぐひす袖を、引く手幾たび忘れもやらで、ちよの思ひを、思ひを誰に語らん源五しう、アヒノテいとし源しうに逢ふ夜さは、さんさ鶏も鳴く、いそ夜も明けそ、さんさ寺でらほろりん〳〵のうよう、うら〳〵〳〵〳〵こでらのしててん、てんちんからころりよの、おゝほつとりほとりのほとほんほと〳〵〳〵、しとゝらだいこも、つん釣鐘も、のうこのいよそれ、のうさて撞くな鳴らすな、源五しう。

五　三谷踊り

今度はじめてお江戸に住めば、天が輝く光をくれて、きれよさがれよ振袖伊達を、伊達をするがの富士白山ぞ、だてな若い者さんやへ通へ、忍ぶ畦みちで、虻めがわれに當てをつた、かつ憎けれど、君が爲なりや、つらさもういこんだ、浮世しのぶの深あみ笠の、姿かたちで若きは見ゆる、篠の芒で末とけぬ、よしなの思ひぢやな、アヒノテ誰も好いたるお江戸の風や、生田昆陽野の敦盛さまが、熊谷笠にはちく杖、二つ紋のちんちり緬のべんべを着せて、せん堰かしよ、浮身の寢みだれ髪を、いつに忘りよぞ、さても差いたる長刀、お氣の通つたお若衆さまのいづくに〳〵、血目玉が放され申さない、アヒノテだても浮氣も命のうちよさ、やがて死ぬ〳〵、ひつぴけうんのめ騒け、明日をも知らぬ身に。

六　雲井弄齋

山の端、アヒノテいかな夜もよも人、アヒノテこそ知らね、アヒノテ閨は涙の淵となる、アヒノテよしや歎かじ叶はぬとても、アヒノテ定めなきこそ浮世なれ、アヒノテスガハキチラシ我れふりすて、一聲ばかり、いづくへゆくぞ山ほとゝぎす。

七　木やり

ヤレ浮立つは、春の日の霞のうちの梅の花、一重ばかりか櫻花、にほひ含みて咲ける梢を折りたや、中の枝から見ごとに能う咲いた、やれかをる袖をえ、えいや〳〵、散らばかひあらじ、やれ物憂きは秋の夜の、君をまつ虫くつわ虫、一よばかりかきりぶ〳〵す、二夜も三やも君をこほろぎおひかけ、中の綱から見ごとよ揃うた、やれ先きのつんなを、えいや〳〵、引かば靡きやゝれの、皆様も御存じぢやが、志賀の白玉、花野に桂から崎うす雲棚引く、あれからこれまで、えいや八橋さんま、さら〳〵さつと幇間をたのんで、口説濟いたりやうきちの太夫さゝま、情は三州、酒田にまんよに小太夫、まさきに櫻木はつ花の宿屋ゆきにはひねつて、しなつて笑つてあゆんで、くせはなにも難波ぢやないこそは道理なれ、京のぶらと大阪のぶらと、お江戸のぶらと三千人ゝのぶらどもが、寄合談合で作りつけたるお子達、いかなとんてきどもも有頂天の野暮すけなりとも、ふんふん深くは逢はうか逢ひますまいか、いやたゝ深くはなり候まいと言つたら、口説になりましよ、あひのやのじは合點かよ、本づゝなよえ、やんれ打てや打て、鼓太鼓羯鼓手拍子に碁雙六におん百姓、いよむしろばたに、田畑よさがよねを搗ぎね、砧かるたに常ぜんが極印、しよろりがむちは鹿の角、ちよこ〳〵打つはけいひき鍛冶や挺子の衆、からりころり、ちん〳〵からりの槌の音、打つたる狸の腹つゞみ、正月は節分豆、ぶり〳〵にかきだま、七種なづなよなじよ〳〵搔きよせて、ほと〳〵とたゝいた、いとしけりやこそしとと打て、にくか打たりよか、やつこりや〳〵〳〵手がそれた、おひかけしめかけ聲をかけ、本づゝなよえ、されば僧正遍昭の、名にめでゝ折れるばかりぞ女郎花、われおちにきと人に語るな、おひかけ中の綱から見ごとによ揃うた、やれ、先きの綱にえ、えいや〳〵、屋敷出たときや浮かれて出たが、今はカヘシ籬あたりを小歌ぶし、おうはちさま〳〵はちざまを見たか今は思ひの種となる。アヒノテ

八　戀ごろも

あだなりと、名にこそ立てれ櫻木の、初花染の戀ごろも
若紫や濃紫、由緣もがなとゆふ霧の、立ち迷ひにしうす
雲や、上の空なる君たちを、何とて思ひそめ河や、身は
浮はしのうき寢にも、せめて夢には打解けよ、アヒノテ
閨の月さへ枕にかよふ、獨りこがるゝ夜はながとの、そ
の東雲の鷄の聲、みだるゝ露の玉かづら、いつ逢坂と心
はせきしう、とめていく夜もかをるは初音、瀧の白たま
涙のふちに、沈む思ひは泉川、いつ見きとてか二上りこよ
しかるものうたひしは、ロウサイよしや數かじ叶はぬとて
も、アヒノテ定めなきこそ浮世のならひ、氣の毒に、いよ
の、とは思へども捨てがたき人を、人を泊瀨の山の井の
むすぶ契りの利生のあらば、せいしせんじゆのその一座
三下り今やきちやうと松がえ常磐、ホテウシ千歳八千代の物
思ひ、情をかけて八橋の、雲井の西をながむれば、はつ
山外山の峰のもみぢ葉、色深きより〳〵、四方に浮名は
浮名は高雄山、高雄山思ひにぬるゝ我が袂、あれみつし

まの花のころ、九重にこそ匂ふらめ、なら酒田小太夫か
しはぎ二人とは、兎にも角にも賴まじものを、わけよき
を知らぬは異國者かなと、から〳〵さきの笑ひ顏、目元
にやしほがえ、目元のしほに馴れ衣も、かの狹衣の袖ぬ
れて、涙の玉の井うらむる小歌の、そのふぢえ吉田のお
もはくや、どうもならぬにの。

九　小夜ごろも

きぬ〴〵に交す形見のさよ衣、妻こひかねし鹿の聲に、
亂れ亂るゝ糸萩の、結ほれやすき玉の緒の、寄る手引く
手に物思ふ身を、せめてあはれと誓しなりとも　アヒノテ
忍ぶ山しのびかねたる人目の關を、道しるべせよ忍ぶ草
の、いつそ露とも消えなば消えよ、だいじかさ、あるに
かひなき捨小船、アヒノテ底こそ知れね袖の海、かわく間
もなき枕の渚、立つ仇浪はしけしとまゝよ、それをたよ
りに逢はねばならぬ、明日までよもや三下り露の身はあら
じ、この夕暮をとはば訪へかし。

十　もしほ草

千代は經るともかはらぬ色よ、常磐の山の岩躑躅、いは
ねば人の戀しきものと思ひしよりも硯に向ひ、よしなし
言を心にまかせ、書きてぞおくる藻しほぐさ、胸にたく
火の煙は空に、なびく習ひに、いよの、アヒノテ末は逢瀨
のなみ枕、獨りこがるゝ身は浮舟の、よるせ定めぬこの
憂さつらさ、知らせたや〳〵、ゆめに見んとて片敷く袖
に、鳴く音淋しき、アヒノテきり〴〵す、つれなき人をま
つ蟲の、アヒノテ草の籬の夕べになれば、物こそしんぞ思
への、さりとは浮世やつさ、いつさて御けんはとにかく
に。

十一　櫻盡し

あかでのみ花に心を盡す身の、思ひあまりに手を折りて
數ふる花のしな〴〵に、わきて楊貴妃伊勢小町、たが小
櫻や兒櫻、もゝの媚ある姥ざくら、われや戀ふらし面影
の、花の姿をさき立てて、ゆくへ分け越しみ吉野の　アヒノテ二アガリ
雲井に咲ける山櫻、霞の間よりほのかにも、見そめし色
の初ざくら、アヒノテ絶えぬながめは九重の、都がへり
の花はあれども、馴れし東の江戸ざくら、名におうしう
の花には誰も、うき身をこがす鹽竈櫻、花のふり袖八
重ひとへ、アヒノテ下には無垢の緋櫻や、樺にあさ黃を
こき交ぜて、わけよき縫の糸櫻、引手あまたの身なりと
も、せめてひと夜の戲れに、醉ひを勸むる、アヒノテ熊
谷の、アヒノテ猛きこゝろは虎の尾の、千里もかよふ戀
の路、アヒノテ忍ぶにつらき有明櫻、君の情のうす櫻、
アヒノテよしや思ひを桐が谷、アヒノテ浮世を捨てし墨
染ざくら、昔を忍ぶ家ざくら、花の扉の寂しきに、月の
影さへ遲櫻、三下りアヒノテ闇はあやなし紅梅櫻、色こそ見え
ね折る袖も、匂ひざくらや菊櫻、アヒノテ花のしら露春
ごとに、打拂ふにも千代は經ぬべし。

十二　冬草

厭はじな、玉ゆら宿る人の盛り、アヒノテ身を知る雨の
初時雨、さだめなきかな浮雲の、月の匂ひも影さむき、

鶯鶯のうき寢の枕さへ、氷柱のたもと解けやらで（アヒノテ三下リ）とこの浦曲のしき波の、濱風冴えて鳴く千鳥、思へば夢の世を知らで、やがて枯野の朝露と、（木テウシ）消えなんものを、誰か殘りし菊の香の、八重紫にうつろひて、袖の昔もいつしかに、あひ見しことを數ふれば、（アヒノテ）むら〳〵見ゆる冬ぐさの、上にふり敷くしら雪の、路踏みわけて誰訪はん、まつの思はん羽束師の、森の木枯たえ〴〵に、涙なみだたばしる玉あられ、朝日まつ間のうき身の命、ながれの末の我等さへ、もしもや誘ふ水しもあらば、戀のしがらみ堰きとめよ。

十三　四季

誰か始めし戀のみち、いかなる人も踏み迷ふ、ながの繩手のゆき通ひ、四季をり〳〵の絶えせぬは、春はよし野の花さくら木や、その一節も待ちがほなる、初音ゆかしき鶯の、梅が香をとめ青柳の、うき寢の寢みだれ髪はいつに忘りよぞ、（アヒノテ）夏は涼しき狹衣を、着てもみよしのおんかほよばな、あひそめ川の流こそ、清きながれと思ふにぞ、いとゞ思ひはます鏡、曇らぬ空に秋は來にけり、（アヒノテ）いつの間に、殊に色あるもみぢ葉の、その名は四方に高雄山、野分も今はもみぢして、とても濡りよなら、なま中しぐれはいやよの、冬のながめは駿河の富士よ、（アヒノテ）雪になりたやこの身は消えて、今の思ひを、えいさんさ知らせたや、よしなやと思ひ續けてかくばかり、戀せずば、人は情のあらましものを、憐みたまへ、賤がうき身を。

十四　八重梅

（二上リ）梅が咲けがし、いよ八重梅が、枝を、枝を手折るふりして、必ずござせとさまを招く、（アヒノテ）かならずござせと樣をまねく、夢になりとも逢ひたや見たや、夢になりとも、（アヒノテ）浮世ぢやな、まれに逢ふ夜はうつゝか夢か、まれにあふ夜は語る間もなき、さんさ短夜や、よしなの思ひ、（アヒノテ）浮世ぢやな。

十五　春日野

（三下リ）春日野の、わか紫の摺り衣、忍ぶのみだれ、かぎり知られぬ我が思ひ、（アヒノテ）おく露の、しづ心なき秋風に、うつろふ人の濃むらさき、花紫の萩がえに、亂れみだるゝ心のつらさ、（アヒノテ木テウシ）その繰り言のまたの夜に、君ならで、よんよん餘所には、さあえ、色にはうつさじさあえ、むらさきの、色に心はあらねども、深くぞ人を思ひ染め、かひも渚に我が袖しほる、人目ひと目忍ぶのその通路の、舟にうち乘りお敵達はこぬかの、うちのせよせつ、幾たび思ふ宿の首尾、とはおもへども只ひと筋にこの譯知らぬ人ならば、たとひ萬にいみじきとても、玉の盃手に觸れよ、（アヒノテ）しやんとさせ、底はいよ〳〵知られぬか、君に逢ふ夜はまつ乳山、（二上リ）手にふれて、（アヒノテ）いつしかも見ぬ紫の、ねに通ひゆくうたゝ寢の、（アヒノテ）君の、君の濡こそ（アヒノテ）じつとは見えねしんぞこの身は、しんぞこの身は涙脆うて、憂いぞつらいぞ、枕も浮くばかりえ、（アヒノテ）わけの、わけの宵には（アヒノテ）いよ絆さるゝえ、しんぞこの身は〳〵涙脆うて、ういぞつらいぞ、枕も浮くばかりえ。

十六　春駒

世も麗やかに、園生の花の春ごまは、夢に見てさへ心もよきに、まして舞うたら千秋樂よの、いつもかはらぬ若水の流の末の我等さへ、うかれ雀のひよつと浮かれいでて、あの色里に來てもおうしう、名は高橋の歸るさを見たれば、まづ花咲に梅がかしほの、振もよし野の花の俤、うつす住の江筆染がはの、深き中をば誰がゆふ霧や、濡れた譯あるつれ歌を、かの思はくの三味せんに、梅がえ薫るに鶯の、初音はいとゞしほらしや、どうもならぬに、いよの、とかく君ゆゑ身は八橋の、花こむらさき杜若、騷ぎ立てられて、（アヒノテ）ぞく〳〵逢ひとてなりませぬはと、籬ながらも西をきつと三笠の、月の桂の男だてかや、にほんもろこしきりゝと廻して、花まつが枝の藤えかなをも、藤波のえいりえに寄せつもの思へども浮橋の中よかるもの泉川、いく夜千さとの月は更科、おひかけ仲の町で見ごとにさ、誰れゆゑころんだ、轉びやせぬもの、手を突いた、（アヒノテ）お手とろ、君のなきみぢ

やないもの、面憎や、にくか打たりよか、せん夜もちよの、勢至千手は悉皆、彌陀か菩薩か、たゞし吉田の神ならば、つなぐ利生もあれ、柏木の異國わかやまこちの町の妓たちは、意氣も張りも強いわいの、金平だんべい、さかた櫻木、さつても名譽の太夫しゆ、この君たちの手に載せられては、いかなしやうの岩屋のお聖さまも。三味にのせての一ふしは、末もこながと春ごまは、千秋樂なる御代ぞめでたき。

十七　手枕

照りもせず曇りもやらぬ、月は朧の春の夜の、夢ばかりなる手枕に、君が浮名やかひなく立たん、とかく人目のしけ〳〵なれば、忍ぶ山みち忍びて通ふ、井手の玉川岸根の蛙、今や鳴くらん浮世の中に、われとひとしく物おもふ身の、あらばかたらん憂さつらさ、戀の山路をたどり行く、アヒノテ三下リこひ〳〵て戀しき人をまつ乳山、ほのかに見えし木の間より、名も懷かしき郭公、いま一こゑの音づれに、アヒノテ昔の人のしのばれて、袖に涙は夜の雨草のゆふさき分けてこし、隅田がはらの荒れたる宿に、水鷄ならでは、扉をたゝく人はあらじな、待宵に枕な投げそ、なけそ枕に咎もなや、武藏野に、なべての草は懷かしや、わか紫のいろ〳〵アヒノテ本テウシありし御けんに交せしことの、無下にかはらね心ぞならば、しんぞ嬉しさ何にかまさる、ものをかず〳〵思ふ身を、誰かあはれと思ひは遣らで、ゆかしき身こそ松のみどりよ、いつも心をなぞへたや、千とせをも又かけてえ、千歳を掛けて、やつさ、かはらぬ中とよ、のうさてな。

十八　鎌倉八景

まだ夜をこめて有明の、月も宿かる武藏野の、空も一つに契り來し、妹背の中をふり捨てて、かく立ち出づる我がつまの心のアヒノテうちこそ恨めしや、恨みながらも、立ち出でて、ふりあけ見ればほの〴〵と、霧にへだたる安房上總、出で入る船のかず〳〵は、遠浦の歸帆これならん、汀の鳥もつがひ〳〵羽を休め、寄せ集りて、ふはと立つや雁鴈、平沙の落雁おもしろや、あれに見えしは有難や、幾千代ちよのかみ神樂、鈴の森アヒノテ嵐こがらしさつと吹け、アヒノテ笠にや、笠に木の葉がはらはらとはりいよ〳〵はら〳〵と、江天の暮雪まのあたり、遙かに高きおん山は、いつも鹿の子の富士の山、どれ〳〵それ見て〳〵から〳〵、見てから戀が增します、かず〳〵のお詞に、はつとだまされた、それで寢もせで迷ひゆくおもふ願ひは神奈川の沖に漂ふ海人小舟、苦もる雫もろともに、涙に明かす船のうち、これやまことに瀟湘の、夜の雨ともいひつべし、雨も晴るれば網を曳く、ひくに靡かぬアヒノテつれなさよ、三下リ君を思へばアヒノテかく忍べどもかひぞなき、つれなき松に降る時雨、なさけに隔てはなきものを、忘れまじ盡きせまじ、おもひはつんつん釣の絲アヒノテ引いて、しやくるところは、本テウシ釣つたところは面白や、漁村の夕照はうつすらん、げにも長閑けき海の面、一首はかうぞ詠じける、東路やアヒノテ野島が磯の濱風に、我が紐結ひし妹がかほのみ、と詠じ捨てゝぞ行くほどに、山市の晴嵐おもしろや、アヒノテ千兩とるともまだ〳〵馬方、いやよ〳〵、腰に馬柄杓、アヒノテ手にやまた煙管、月の都をふらねばないよさ、どうした心底しほがないアヒノテ日もはや西に入相の、極樂寺の晩鐘と、聞きしに優る八景や、由井が汀に寄する波、峰のアヒノテ嵐にもみ合せ、寄する男波がどう〳〵と、どうと打つては颯と引き、日本無雙の名どころや、これぞわらはが住家とて、雪の下にぞ着きたまふ。

十九　わか草

世の中の人の心はいろ〳〵に、うつろふものは花の色、梅が香をとむ鶯の、谷よりいでてまだ里なれぬ、野邊の若草、ねよけに見ゆる俤の、人目つつめば色には出さぬ、袖には洩れて睦まじく、思ひそめたよわか紫の、筆にまかせて杜若、アヒノテ夏は凉しき池水に、住む川竹のすて小舟、こがれ〳〵て昔をしのぶ、草のまがきに涙をそへて、泣くや皐月のアヒノテ誰彼時に、たれを待乳の、〳〵、やよや、やまほとゝぎす、アヒノテ君はさみだれ思はせぶりよ、我れは螢火おもひに燃ゆる、この夕暮のものあはれさに、鳴音さびしき蟲のね、アヒノテ秋は來にけ

り、われ訪ふものは、荻がうは葉に亂れみだれて、風そよぐ餘所にも置くや袖の露、月のうつろふ影見えて、殘る松さへ嵐と共に、人目も草も枯れ〳〵に、いつもながらの冬は憂や、落葉も霜に埋れて、木の下露にぬるゝ夜は、いとゞ淋しき床の内、枕ならではしら雪の、積るおもひに伏し沈む。

二十　春風

咲いた櫻に吹く春風は、のほんえ、花のあたりを除てふけ〳〵、こぼれてかゝる花の露、アヒノテ深山がくれの身はほとゝぎす、のほんえ、人は知らねど啼きあかす〳〵よひ〳〵ぬるゝ我が袂、アヒノテなけく涙は妻戀ふ鹿よ、〳〵、荻や芒に〳〵おく露の〳〵、くるれば色の袖しぼる、梢々は花かと見えて〳〵、雪の朝は、のほんアヒノテのんほのう、いよ風いとふ〳〵、アヒノテ霜夜に濡るゝ我が袂、春の夕ぐれに、山々を見てあれば、折しも春風に櫻の花が散りかゝる、ちり〳〵はつと花のちりたるは、空に知られぬ雪かと見えて、おもしろや、夏はほとゝぎす、卯の花に菖蒲草、三下り牡丹芍藥、あつちりな、こつちりな、アヒノテすぢりもぢりて、えりくりえんじよの奥山のかけ、小鹿の鳴く音、蟲のこゑごゑ、秋はな名にある月にうつろふもみぢの色、とりや集めて哀れさまざるアヒノテ冬は時雨に、雪か霜かと、消えてたまられぬ。

廿一　狹ごろも

ひとり思ひを枕に語り、せめてたのみの夢さます、麻の狹衣打ちさめて、いとゞ寢られぬ秋の夜に、さりとは月更けて、いつさてこほろぎ、ねもせでまつ蟲、更くれば鈴蟲、ずんど深ければ、堰きやるは憂いよ轡蟲、厭はぬ心にてんと、結うた髪を、望みなら根からふつつと、きりぎりす、鳴かぬ間はござんせんよ、すこしあはれみアヒノテレンボ颯と妻戸の時雨は憂やの、袖の涙は露の亂れがみゆふにいはれぬ我がおもひ。

廿二　らつび

われは都のらつび洛外寅藥師、しかも我等は申子でな、浮れ者でござる、思ふ方には過ぎしころより、別れて獨り、いとゞ淋しき寢覺の床に、涙なそへそ時鳥、涙とともに無常を觀じ、とかく浮世はかしかましと、思ひし比より山路に入りて、小柴しば垣ひき結び、世に在りがほに月を眺めて、更けて砧の音かとわれは聞けば、月ぞ知らする我が涙、思ひつゞけて足曳の、小鹿の啼く聲に夢さめて、われをば誰か訪ひ來んと、いとゞ寢られぬ秋の夜に、アヒノテものを思ひの眠りをさます、そのいにしへはよねしうとあれば、舞うつ唄うつ、あだくらべ、浮世の中を思ひ出づれば、心も亂れみだれたりよさ、スガ、キ餘りゆかしさに、琴のてうしを調ぶれば、折しも松風があなたの峰のかたよりも、こなたの琴に通ひ來て、彈きてあはせたは、何よりもつて面白い、あふぎ雲井に須磨に桐壺、うす衣に雲の上、四季のみだれか、あつちりなすぢりもぢりて、えれくりだしたるりんぜつ清掻おもしろや、花たちばなの袖の香に、鳴くは何どり、郭公にうぐひす、水雞の鳥のたゝき落し音づるゝ、柴の扉のけしきを引きて、君達に、やつこの見せて聞かせたや、よひく、ずんと濡れませうに。

廿三　戀づくし

思ひ寢の心からなる夢ぞろか、または現か、うつゝなやちらとばかりの俤を、御簾の追風さら〳〵に、忘れもやらぬ身ぞつらき、アヒノテ戀はさま〴〵おほけれど、逢戀待戀忍戀、恨みの戀に、別れの戀こそもの憂けれ、我は本國草深き、東あたりの者なるが、今度はじめて都へ上り、雪のふり袖ちらとまた見そめ、しづ心なくこひにして、文玉章をかき口說やれば、お情の返しに、必ず今宵逢瀬とありしを、いと嬉しくて八重徘、しけれる軒に宿りきな、連理の契りあさからず、深く語れど、かねて別れの思はれて、さりとては、馴れぬ昔がましぢやものアヒノテかはす枕は數かさなれど、われも忘れじ君もまた思ひ出だせよ今宵のちぎり、離れ〴〵の村雲見れば、明日の別れもあのごとく、あただしんきや、もんきや、さりとては、戀には果てなや、いかがせん。

廿四　笠寺

いかにせん、兎すれば恨み斯くすれば、在りがひ知らぬ世の中に、江戸をば厭ひいづれども、これぞまことに大磯や、旅で憂いものは入相の鐘よさ、山路を行けば鹿の聲、富士のお山を後に興津、前には蒼海漫々とはても無く、嵐につるゝ夕浪の、打ちのけ寄せつ立つ波に、末をいづくと遠江、濱名の橋を打渡り、弓手やめてのながめして、七瀬や八瀬や八十瀬川、ふかき思ひはみの尾張、きてこそ見たれ笠寺や、げにいにしへも我がごとき、もの憂き旅のくちずさみ、一首はかうぞ詠じける、げに、今日ばかり疊れ近江の鏡山、旅のやつれの顏の見ゆるに涙の雨の守山、露にしつぽり〳〵、濡れてこそ行け草津の宿よ、連れもなぎさの捨小舟、しゝま陰より艪の音がからりころり、志賀のかんから崎の松づるきづる、からころりと漕ぎ出して、釣りするよしのやつさ、釣つたところがおもしろや、なにが〳〵え、そなたは瀨田の長橋眞弓槻弓日を重ね、矢走の浦にぞ着きたまふ。

廿五　山づくし

戀の山路に入りそめしより、人目忍ぶの山とはつらや、まれに逢ふ夜は鷄さへも、時知らぬ山〳〵は名のみして、明くる佗しき葛城山よ、夜の御げんに言葉殘りて別れ、さらば〳〵にのう歸る山、君が心の知られはせねど亂れてけさは黑髪山に、つたふ涙の袖振れ山よ、袖をふる〳〵振りやるはよいが、わけのある身の袖ふるな、ふる妻いとし。

廿六　夕され

嬉したま〳〵袂にかゝる、さゝは小藤の花の露、つゆに心のいつしかみだれ、秋にはあらぬ春ながら、いとゞ思ひはいや增さり、亂るゝものは青柳の、絲はものかはなか〳〵に、花におき伏し萎るゝこの身、この夕されのひと盛り、をらば今折れ散らぬ間に。

廿七　川たけ

其樣ゆゑにぞみだれ髪、解きし下紐かず重なりて、むりに實からいとしゆてならぬえ、やゝともすれば閨のうちより、手を叩いては水くれよ、夜は何時ぞ、歸らにやならぬ、急かせ言葉の無意氣の時は、しんぞつらいは勤めのこの身、心を配りて氣をとりて、限りもあらぬ玉づさを、夜明けぬうちに認めて、こゝや彼處とやり繰るつらさ、恨みられては恨みもしたり、あら恐ろしの誓ひの詞この行末を何とせん、可愛がらんせ流れの身。

廿八　花の宴

よしやよし野の花より我は、その夕暮の折からに、垣間見えにしおもかけを、忘れもやらでうか〳〵と、移る心や紫の、色に出でたよ恥かしながら、花によそへてやる文を見よかし〳〵、散らぬ間にアヒノテいとゞ心の、いよつくし船、やる方分かぬもの思ひ、文の返しもいつとなく、待ちしかひある今日の日も、はや入相の花の宴、逢うてぞこよひ新枕、心とけたよ早いつの間に、ひと夜ばかりか桐が谷、八重も千よもしんぞかはるな、かはらじわれも、花には嵐よしや吹くとも、ふくとも契りたえすな。

廿九　いく春

いく春の眺めはいつし替らねど、わきてのどかに照る日影、契りは竹の節々こめて、君と二葉の松もろ共に、枝も榮ゆる若みどり、仰ぐにあかぬ時を得て、アヒノテされば怪しの賤の男女、さま〴〵の造り花、色をつくしてささげけり、まづ咲きそむる梅の花、いとよはく、匂ひも深き花衣、八重一重さき亂れ、げに九重のたぐひなき、色も殊なる櫻ばな、粧ひゆゝしく見えにけり、さてその次の島臺に、松と竹とを植ゑ交ぜて、千代をさへづる雛鶴が、汀の方に巢をくひて、谷の流に龜遊ぶな、アヒノテ賤の緒環くりかへし、寄るこひ〳〵よる戀さまよ、人の情はよるにこそあれ。

三十　波まくら

皐月まつ花橘のかほよばな、見るに心の深見草、ふかき

思ひの憂さつらさ、色に出さじと忍ぶ草、しのぶかひなき、いよ陸奥の、壺の碑かくぞとも、岩根の山の岩つつじ、いはねど人の戀しきものと、二上り恨みながらも月日をおくる、さてもこの身はあるものか、アヒノテしんぞつれなき〳〵命かな、さあ〳〵なにがえとは思へども、情に隔つる袖あらば、賤が伏屋に月は宿らじと、夕べにそよと籬の露、吹く風のおとづれに、アヒノテ傳へしかひや荒磯海、ちん〳〵ちり〳〵磯打つ波に、とても濡りよならもろともと、深き逢瀬のなみ枕、かはすばかりの荻のうは風、萩の下露。

卅一　たなばた

夏果つる扇と秋の白露は、いづれか先きにおきぬらん、アヒノテ年毎に逢ふ夜待ち得したなばたの、逢はで寢る夜は袖のみ濡れて、降るは涙か身を知る雨か、かけし情は鵲の、渡せる橋におく霜の、げに面白や今宵しも、月は冴えゆく秋の夜の二上り千夜をひと夜になせりとも、名殘はつきじ今更に、ことば殘りて鐘がなる、鷄も鳴きそろ、あたゞ、しんきや氣の毒や、とかく浮世はまゝならぬ。

卅二　引車

さらば引かんと夕露の、濡れたとり態さらりとやりて、引かばお靡きやれ、えいさらにさよいよえい、花とならば散りかゝれ、おん身は紅葉の色よのう、日かげに添ひて色まさる、えいとな、アヒノテさて世の中はな、世の中は定めなき身の萍の、引かば靡きやれ散らぬ間に、やんれ、ひく〳〵引くはたゞ濱で網ひく、山で引くは大石胡弓三味線鳴子の繩も引く、殿さまがきはずみやれ袖を引く、都の牛は車を引きやる、引きやるはよいが、思うた振りして袖引くな、語りつゞけて行く程に、よその見る目も恥かしや。

卅三　東山八景

見渡せば東山の春のけしきや、祇園ばやしに吹く嵐は、山市の晴嵐と疑はれ、河原おもての眞砂の色は、江天の暮雪も斯くやらん、面白の花の都や、地主の櫻にしくはなし、鴨川の流の末に行く船は、遠浦の歸帆か冴えわたる、清水寺の鐘の聲、アヒノテ遠寺の晩鐘のひゞき、それ白河の洲崎に翅の散亂すは、平沙の落雁とも謂つべし、さて靈山の月影は、洞庭の秋の野、これにはよも優らじさてまた漁村の夕照は、釣り垂れて、總角にあそぶものを。

卅四　夏草

夏は夕べの身の思ひなる、色に心は深見草、露は袂のいとまもなしに、羨しくもうき戀の夜は、知られつ知らぬ顏よ花、アヒノテ立ちもはなれぬ君がおもかげ、往さ來るさの涙の川に、黑白も分かで泣きしづむ、底の玉藻のいはで茂るも餘所目、よそ目忍ぶの小車に、通ひかよはば關守も、ひと夜は許せ手枕の、塵を拂はぬ冨夏の、韓紅の袖の香も、花橘に咎は逢瀬の、とかく人こそつらけれと、うらみの葛の玉の緒の、絶えなばたえよ、アヒノテさても命はあるものか、アヒノテ黃昏時の軒のつまに、餘りてかゝる夕顏、花をしるべに尋ねんと、もの言ひよれば手になれぬ、蓮の浮葉よな、情に染まぬ露のなさけに。

卅五　うきね

うき寢の床にこと問ふは、枕にかゝる涙なり、せめては夢になりともまどろめば、短夜に山郭公、おとづれて、はや夜が明けた、しんぞつらいよの、こがるゝうき身の消えもせで、アヒノテさても命はながらへて、晝はひめもす泣き暮し、夜はアヒノテよどこにふし沈む、槇の扉を打つ村雨や、梢にそよぐ松風か、契り置かねどはかなやな君が訪ふかとおどろかされて、いとゞ涙に目がくれて、壁に背ける燈火の、影かすかなる曉の鐘の聲、アヒノテつく〳〵と聞く時は、とかく叶はぬ世の中に、ふつと思ふまいとはおもへ〳〵どもまた捨てがたき、過ぎし別れに逢瀬といひし言の葉を忘れまい、この世はさて置き後の世も、のうさてな、逢ひ見ての後の心にくらぶれば、かほどものをば思はじものを、昔戀しやな、今の身や。

卅六　濃紫

君來ずば、閨へも入らじ濃むらさき、我が元結ひに霜置くと、又の頼みをゆふ霧や、稲葉の山の峰よりも移しや植ゑし唐崎の、松の緑もこながとや、アヒノテ身は浮舟の波の紋、巴の君やこがるらん、西を遙かに眺むれば、日影かたぶく森見えて、金龍山とはあれとかや、譽れ名高き異國まで、楊貴妃虞氏君李夫人も、これにはいかでまさらんと、おもひ寄るべの波枕、君に逢瀬の波まくら片しく袖の、乾く間もなき沖の石、二上り難波入江の身は捨小舟、しづむ思ひは我ひとり、それはえ。飽かぬ別れに袖引きとめよ、宵のなさけに醉ひうかれ、河内通ひに生駒山、その名高雄ののう若楓、見んとばかりに契りつつ、焚き殘したる薄雲や、伽羅のけふりの、薫るはしんぞ思はく、薫るはしんぞおもはく、アヒノテ姿を見ればきよ原や、深やぼなりしおてき達、うき世を忍ぶ目せき笠、雨は降らいで戀がふる、身は八橋のさわやかに三下り着なす裳すそをかいどりて、われふる妻は、いよなほいとし、やれなほいとし、アヒノテこがれこがるゝ身は對馬笛、戀のねとりのおのづから、君とわれとの仲遠し、とかく人目の茂ければ、籬ながらの御けんと言へど、咎められてはなりませぬ、ういことゝ、そりやさうさ、江戸やつさ、浮いて來た。

卅七　香づくし

六十一種の名香は、法隆寺、東大寺、逍遙、三吉野、紅塵、枯木、中川、法華經、花橘、八橋、園城寺、似たり不二の煙は菖蒲、槃若、鷓鴣班、青梅、楊貴妃、飛梅、アヒノテ種ケ島、澪標、月、龍田、紅葉の賀、斜月、白梅、千鳥や、法華、老梅、八重垣、花の宴、花の雪、名月、賀蘭子、卓橘、花散里、丹霞、花筐、上薫、須磨、明石、十五夜、隣家、夕時雨、手まくら、有明、雲井、くれなゐ、初瀬、寒梅、二葉、早梅霜夜、七夕、寢覺、しのゝめ、薄くれなゐ、薄雲、上り馬、とかく伽羅の煙と命の君は、とめても幾夜、いくよ留めても、とめあかぬ。

卅八　しぐれ

なら松の葉の落ちそめて、夕影しろき待乳山、しぐれ時雨に鳴くかもの、聲も氷るや干潟みち、アヒノテ衣紋坂こえて鐘の聲、いでそのころは神無月、くるわ、廓すまるは涙で暮す、野分つれなや、吹きや散らしたる、あつたら小萩をずすき、花に醉ひまたもみぢには、醒めてたどりし土手おろし、春にかはりて袖寒むや、提灯暗く行き通ひ、見知りごしなるかすり唄、諸人のなづむは色千とせ山、雲はうす〳〵西をの空に、いり日なほ照る虹のきよ橋うい女郎、霜も霰もひつちこないて、嵐につよき柏崎、かをるくらべん東と京と、いづくはあれど陸奥の、千賀のぜんせいそれにはかはり、こにしやまとが藻鹽たれ、おり立つ田子のうらめしや、けかようおじやろぞアヒノテ足音あらく聲うはがれ、大門いまださゝずして、茶屋の半蔀たれの格子、アヒノテ誰か羽織被づいてよねくどく、女郎くどく、受切胴切一つがひ笑止、なるかならぬか、戀の仲の町。

卅九　月見

或ひはしらゝ吹上、和歌の浦、住吉難波、高砂の、尾上の月の曙を、ながめて歸る人もあり、我はそれにはひきかへて、昔語りと名に立ちし、色のむらたのちうじやうの、歩でやれ尻よはせ折り、通ひし路の邊、砂利とる池の水かがみ、片枝枯れたる皂莢も、やれ〳〵、戀に痩せたかそちや異な姿、稲荷の岡に馬はあれども、君を思へばのう手編笠、土手の松原誰ゆゑのほんほ通ふ、ひんこひころび、跛ひき〳〵ゆく程に、このもかのもの仲の町、逢ふ瀬〳〵にかはらじな、知るも、知らぬも秋の夜の、月待つほどの、今宵しも家々推賞して勾欄の、よるべ〳〵の契りかな、揚屋のとぼしかず照りて、母屋にかさねし折鬢籠、芒に出だす銀月も、ものずきぶりてまたをかし、畫の御座にいぎたなく、醉ひ臥すをとこ月しらず、行水がへり待ちうけて、白波をとこ龍田山、忍ぶ心のあやにくや、曇れど月をかこつらん、のとやに運ぶ物しけく、間遠にあめる提灯も、今宵はなくて過ぎよか

し、くつわの暮れのまり過ぎて、遣手の宿の念佛講二丁目あたりに菅掻たえて、アヒノテはつ音三井寺譜ふらん、アヒノテ月は照るやら曇るやら、身揚り暗き女郎の、あだ目にかゝる夜這星、約束なしの浮かれ人、友の浮かれにうかれ來て、どれでも〳〵、ふりに聘ばれし新造の髪そこ〳〵に結ひなして、八聲に近き揚屋入り、枕とる間に明けぬべし、欠伸がちなる閨もあり、アヒノテとなり座敷のふと〳〵吉三に物申がござる、何處からござつたいの、散茶町から參りたが、おうけぎりをとりましよ、それは何時のことかといの、師走のことぢやいの、つがもないことゆつてくるゝな、書き立てゝ來たれど、詮義ばかりで、のほほん〳〵、のんほのう、いよ〳〵埒がない、夜が明けた、無首尾じまひの歸るさつらや、太皷がどんで、あとさへ歌の音を打ちだいて、またまるろ。

四十　あだ枕

あやにくのやもめ鴉に朝覺めてたれを待乳の、やよやふもと川、三つ艪二つ艪舟もよひ、波はしたなく過ぎがてに、また睦言のうす訛り、枕の床の寢ざめ歌、耳にとどまり物悲し、仇にはせまじ移り香の、あゝ形見なるあだなる衣、旅ごろも、日數かさねて駿河なる、賤機山の折に觸れ、ついでをかしき安倍川や、來ぬ夜契らん彌勒町、また神風や、かみかぜの伊勢の古市八十瀨川、アヒノテ此處も戀ぐさ柴屋町、とまるや百舌鳥の撞木町、鉦を叩いて佛にならば何條よ〳〵、木辻鳴川ならずとなると、阿波座新町越後まち、一夜二夜の堺の津守、明くるわびしき袋町、おつとさしこめ、おふねひやうごのふろめ、立ち別れ室の泊りにうき身を寄せて、鞆の浦よねそこ〳〵に、我から濡らす袖の海、安藝の宮じまみやびして、難波くづしの三つの糸、しんき〳〵しのだけな、かけて思ひをさしよよりも、內裡小島のさゞれ魚、憂きをまじりのさくら魚、さごしいとよりこち〳〵と、呼べば汐の目をなぞ賣る、アヒノテ波の枕や下の關、なほ行くさきは不知火の、心筑紫にこひわたる、もろこし船のよるとなく、書ともわかぬたはれ女の、アヒノテ玉の襷の花をどり、柳の眉のまんまるござれ、まんまるござれ、十五夜の月の輪の如く、アヒノテあゝ現なやあだまくら、遠くも來ぬるものかなと、過ぎこし方を都には、司位もそれ〴〵に、身狹大袖ゆき短か、引扱髮や二つ折り、また二つ櫛しどもなく、雪の素足の花踏んで、おなじく惜む後朝や、三下りまた朝ごみと入りみだれ、アヒノテそつちの客衆とこつちの客しゆが來るとやしち、一丁の二丁の三丁の早駕、あふむ取持、やんれ、さいづれあふむ憂さつらさ、せいし誓文實を見しよに、しつとんしつとん、しつとん〳〵、とん〳〵〳〵〳〵、とうから內證吹き込んだ、本テウシ戀の嵐にばつと吹上大盡ぢや、さてはそれからそれしだい、うかりひよんなる寢覺かな。

四十一　花見

花の香に衣は深くなりにけり、木の下かげの風のまにまに、八重の霞にいや高き惠みになにか上野山、花と戀とに憎まれて、ほんに〳〵、ほに〳〵、名に負ふよすが、鐘撞ほん樣、見よや濁世の野暮すらに、示さん爲に御佛の、濡有難き御姿、半ばは花に隱れます、風に漂ふ暮の內、てりこそてりぬか、てりましこ、鳴く音かはゆき山雀の、おのが祕曲の羽も輕く、よい〳〵〳〵〳〵やさ、ひよくりひよ、親父が腰に瓢箪ひつ付けて、ひよ〳〵ひよと浮かれた花ゆゑに、ひよくりひよアヒノテ峰の嵐となる連れ立ち通ふ彥惣女房はだてこき〳〵で、小褄搔いどりしやら〳〵行きて、これこちの人、おう見ゆるかの、ようぬけまうす小笹篠原、根ざさやかくい松の尖杭でな、足突き立てて、うづきづき〳〵うづきにうづき、卯月八日の花よりだ、お名をばえ申すまいよの、しやん〳〵〳〵と指いたる長刀、花か蝶かと打群れて、櫻ちり積む菅笠やさし、ほんにゆかし、お側に引きそふ伽比丘尼、紺に鬱金に淺黃に鹿の子地紅や地むらさき、けんたい郡內鳶八丈、アヒノテこれの小よねにとんとつとんと絆された、やすい事、其方でおうちやれ、ちよん〳〵おけさ、おきのとなかにとんとゝんと、どつこいいよ、すて〳〵小舟のすて〳〵られては立ち申さぬ、アヒノテさてそれ〳〵の幕の內、茶の湯まつかぜ染模樣、難波に刈るや葭蘆の土佐を語らぬ幕もなし、都のつての一ふしは、柳櫻を

こき交ぜて、淺黄帷子黑小袖、おなじ岡邊の松にはあらで、その里人の風俗も、なは懷かしきやり衆槍梅、姿かたちは横太り、みどりたよりが髮結ひかへて、野暮に身をなす抱へ帶、禿それ〳〵髷が落ちた、落ちたおとすも浮名の霰、根ざし根引の末たのむ、ういこの〳〵身の行方、江戸やつさ、三下り見附箱崎そつちの客しゆと、こつちのきやくしゆが、くるとやしい、艪かいを早めて一丁の二丁の三丁の早きお船、色の湊へやんれ押せやれと、衣紋江戸やつさ、嵐待つ間の花よりも、しつとん〳〵しつとん〳〵、しとんしとゝん、しとゝんとん〳〵〳〵、時めくさとの家櫻、アヒノテ本テウシけふも暮れぬと告げわたる〳〵、恨み重なるあどふのかね、人は散り行くむら鳥、われはぬるともいよ花の雨、その小櫻の望月の、いつそ消えたや花の下露。

四十二　玉くしげ

たまくしけふたつの色の誠うそ、わけ賣る里のよすがとて、あだし言葉のもしほぐさ、煙かすかに飛び亂る、螢の宮にあくがれし、その玉葛かりに今、いかなる筋の、糸によるものならなくに、別れ逢ふ戀慕のしらべほのかにも、アヒノテ三下り作り聲して呼子鳥、覺束なしや隱し君、その數なりしもろ人も、名のみ殘りて今はまた、昔を忍ぶ夕まぐれ、顏に扇のいやらしく、目に入る色の風俗と、時の媒さそひ來る、流れの誠くみて知る、茶やのしなづまじつとも知らで、花の光りも潔よく、みるめに濡れし鹽衣、海人の仕業もないものか、何ぞのやうにさりとては、アヒノテ本テウシ宿も定めずはしたなく、宵の睦言よそになり、氣は短夜の長枕、しかけ言葉の口說ども、よそに下紐解けぬ心のあれかし、この身を捨てゝ逢はうに、たいこ無首尾のかり寢して、月を越しても憎からぬ、咎をば酒に逢瀨の末、そらおぼれせし後朝に八聲の鐘ととり騷ぐ、五町の天の曉に、歸るさ繁きたはれ男の、二上り巳が囀りさまざまに、小歌淨瑠璃だてらしく、けにかずかずの戲れも、聲ちり〴〵に別れゆく、われ通ひきと吹く嵐、餘所には告げそ朝がらす。

四十三　色香

定めなき、色香に浮かれくにあまた、かたい枕も垢づく絹も、なりやつれたる身のゆくへ、懺悔に語り申さん、そも〳〵江口神崎は、名のみ殘りて風俗なし、野上の里は草枕、朝妻船はかぢ枕、誰こがれけんあと知らず、アヒノテつかひ揚げたる島原を、都の西に入る日影、うつる心にたきつけの柴屋町には火も立てず、化粧かはりし辻君を、はるばるこゝに三越路や、鹽津海津に、どれどれそれ・あれ〳〵針が浦、釣するあまのうけなれや、心一つを定めかね、敦賀小萬の吸ひつけ煙草、きつくなづめば目もあはぬ〳〵、目がまはる、女郎と契らぬ旅人には、夜着も借さいで寺どまり、お草臥なら寢まるべいとて、わさゝの酒をしひざかひ、四の五のつぢを出雲崎、おなじ流れの酒田のひしやく、アヒノテ底眞實から、三下り解けてちん〳〵契りの、幾夜も結ばん常陸帶、かけ卷くもえ・水戸のふぢからえた川つゝじ、あすの別れにや散り〴〵に、おさらばえ、これ千賀の浦・本テウシいとしけりやこそしとゝ打て、憎か打たりよか、何んでもこれはあいた〳〵、潮來出島のこん小手招き、まねく袂に文やたまづさ、アヒノテけに楓橋の夜の市、泊り〴〵宿〴〵の、間遠にうたふ群女は、客を留めて夫とす、別れあればまづくれあり、品こそかはれ戲女の、袖吹き返すあすか風、きのふと過ぎてけふと暮れ、武藏の國なる新吉原が泊りぢや。

四十四　梅づくし

君ならで誰にか見せんこの花の、色はさま〴〵さくら梅、やしほ紅梅あさぎ梅、地は薄色に鹿の子梅、着なす姿はまだいわけなき、小梅ふりよき信濃梅、品と拍子をとり〴〵に、數へかぞふる手まり梅、落ちてこぼれてはら〳〵と、空に知られぬあられ梅、ふりさけ見ればをちこちの、野梅山梅咲きそめしより、初音ゆかしき鶯の、羽風になびく枝垂梅、雪かあらぬか白梅の、初花ごろも八重梅や、誰が袖ふれし匂ひ梅、春や昔の思はく深き、谷川梅よ、さりとては、心づくしの豐後梅、アヒノテ三下りこが

れ〳〵てゆく舟の、泊り定めぬ島梅や、海人の刈藻に住む蟲の、われから梅の色懐かしく、思ひつゞけて書く玉章のたより求めてやり梅や、間を隔つるかきは梅（アヒノテ木テウシテ）ながめ得ならぬ庭梅の、花のおもかけ霞の間より、ほのかに見ゆる朝日むめ、色をも香をも知る人ならば、よしやとがめん枝は折るとも。

四十五　小笹

しなへやしなへ、小笹も風に、そなた忍べば人がしる、あゝ餘所には咎もないものを見しよりもあこがるゝ、及ばぬ戀にいとゞ思ひはいや增して、アヒノテこぼる涙の旦暮に、乾く間もなき〳〵我が袂、アヒノテ文玉づさの數をつくせど、つれなき君に見せたきものは、風に靡けるしほ屋の煙、をぎ萩すゝきまだもござるよ、えいをみなへし、引くに靡かぬ草木もないに、見せたや庭の柳の絲の柳のいとの、えい風に靡くをの、かなはぬ浮世雲にかけはし、及ばぬ戀に思ひみだれて、えい何しよぞの、とかく浮世は氣まゝがよいぞの、勿論さうなそりやさうさ。

四十六　さらし

槇の島にはさらす麻ぬの、賤がしわざは宇治川の、波か雪かと白妙に、いざ立ち出でて布さらそ、アヒノテ鵲の渡せる橋の霜よりも、晒せる布に白みありそろ、アヒノテなう〳〵山が見えそろ、朝日山に霞たなびく景色は、たとひ駿河の富士はものかは、富士はものかは、アヒノテ小島が崎に寄る波に〳〵、月の光をうつさばや〳〵、アヒノテ見え渡る〳〵伏見竹田に淀鳥羽も、いづれ劣らぬ名所かな〳〵、アヒノテ立つ波が〳〵瀬々のあじろ木さへられて、流るゝ水をせきとむる〳〵、アヒノテ所がらとて〳〵、布を手ごとに槇の里人、うち連れて戻らう、やれ賤が、やれ。

四十七　かぞへうた

ひとつ人の迷ふ、戀といふ字はむくつけだにも、大宮人はいとまなき戀路、櫻かざして木の下蔭の露に、濡れにぞぬれし我が小夜衣、二つふた葉の待乳山、松の嵐にその夜の夢を覺させ、わかれぢの憂やつらさを、三つみ吉野よしのへござれ、いつもながらの山櫻、のんやほ、アヒノテ四つ世の中の人の心は、しなゞ〳〵にわかてど、五つ五つは、色といふ字に引かれては、消ゆる命は勿論さ、六つ昔の袖薫る、花橘の夕暮に、山ほとゝぎす鳴き連れ、ふるはなふるは、すぎにしさいこのは、人懐かしやゆかしや、アヒノテ七つなま中馴れて悔しや馴れまいものを、逢へば別れの鷄が鳴く、夜は東雲か、八つ山伏姿に樣をかへ、兜巾篠懸錫杖を腰に指いて、京洛中の花盛り、アヒノテ一重二重や三へ八へ、九つ戀に來ましよか、小原しづはら八瀬の里、柴めさぬか、露踏み分けて、十でとうからちらめく星のかず〳〵、曉の明星が、西へちろり、東へちろり、ちろりちろりとする時は、扇おつとり刀指いて、太刀の柄に手をうち掛けていのよ、なぜ戻らうよというては袂に取りついた、いとしけりやこそしとゝ打て、憎か打たりよか、手がそれて。

四十八　あき草

秋は常さへもの淋しきに、思ひつれて亂るゝ心、露も涙も爭ひかねて、戀の路の邊踏み分けがたき、草の色にも染む身はつらい、アヒノテちらと見初めし、えいさん〳〵女郎花ゆゑ、拙き心か、のんさて、まことにはや思ひ草、身は朝顏の淺ましながら、せめて靡かんこともやありと、もみぢ重ねのそのうすえふに、書いてや送らん文見ぐさ、人目忍ぶの我がなみだには、乾く間もなき尾花が袖も、引かば靡きやれさりとては、葛のうらみの數つもり來て、いつかは君をまた宮城野の、萩の下葉の露にしつぽと濡れて、何ともなう、荻吹く風の便りをも、聞くやと待ちし戀ごころ、亂れみだるゝ、難波の芦の契りはつらい、浪のよる〳〵、さんさみをづくし、思ふはくださうな。

四十九　こひぐさ

思ひそめたよ濃き紫の、色に出でじとつゝむに餘る、袖に涙は、のんさてまことにこほれぞかゝる、れんぼれんれつれ（アヒノテ）知らぬ昔は餘所なるものを、今は身に知る

愛別離苦の、憂さを思へば、のんさてまことに情もつらや、れんぼれんれつれ、アヒノテ召せ〳〵草花なに〳〵ぞ、妻待つ夕顔しら菊の、花さきそめて美人草に戀ぐさ、すんど秋風の立たぬ間に靡かさんせ女郎花、おさしあひはござんせぬかいの、ちよつとかるかや。

五十　しのゝめ

しのゝめ〳〵、いつ夜が明けた、朝い久しきあだ枕、おろしこめたるひと見殿、中の御座に端居して、文の腰張り影暗く、外面にしげき市びとゝ、共に賣り來る芥子の花、江戸町はやき身ごしらへ、地白に網のつれ模様、目にかゝれとの風俗や、符牒ことばの揚屋入り、藤や三浦の二むれに、乘物しのぶ内ゆかし、問へど答へぬ梔子の、こは誰やらん花ごろも、しんてう遲きその中に、駒もすさめず刈る人も絶えて年經るゆかまさへ、生ひ先ゆかし新太夫、その外みやび由ある女郎の、時雨あだしのなよせ草、人の結びし捨言葉、書きもらさなんもしほぐさ、いつの比より右手はうすく、ひだりがちなる色人の、樂みきはめ東屋に、兵庫津の國花松屋、夕べ轟きまへ渡り、氣をとりのほす二上りすが搔や、住みなす床のひと構へ、しかの投入れ違ひ棚、梨子地の硯、玉櫛笥、ふたり寢よとのやよや文枕、皆くれなゐの三つ蒲團　雲を疊んでうづだかく、いち爐にたぎる松の風、アヒノテ本テウシ殊に色ある三味線や、人立ち返る床の内、をりしくござのかた〳〵に、語り殘せし短夜の、とても寢られぬうき枕、蚊帳のひとへのうす月洩るる〳〵、もれて淋しや夜すがらともに泣かるゝほとゝぎす。

松の葉　第三卷

端歌目錄

一　飛鳥川　二　高瀨舟
三　有明　四　芦分船
五　みやま路　六　玉の緒
七　加賀ぶし　八　わきて節
九　伊香保節　十　長崎ぶし
十一　のんやほ節　十二　くひな
十三　はな笠　十四　船ばし
十五　朝妻船　十六　うかれめ
十七　しがらみ　十八　ふじから
十九　しほや　二十　梅がえ
廿一　戀かぜ　廿二　まがき
廿三　たつ田　廿四　櫛田
廿五　もろこし　廿六　有馬
廿七　白ぎく　廿八　よさく
廿九　捨小船　三十　涙がは
卅一　しがまつち　卅二　手まり
卅三　いつの夕　卅四　さかづき
卅五　くどき

二上り

一　和歌の浦　二　さつま節
三　ひよどり　四　ちん〳〵ぶし
五　さいこのぶし　六　さんさぶし
七　かごしま　八　みどり
九　白ゆき　十　むらさめ
十一　亂れがみ　十二　吾妻踊
十三　野中　十四　こまち
十五　うたゝね　十六　いしきり

三下り

一　こんくわい　二　かづま
三　門はしら　四　いけだ

さわぎ

一　一夜かゞみ　二　三谷がへり
三　ふな歌　四　初音
五　餓鬼舞　六　あみすき
七　ぬり笠　八　祭文
九　失念　十　惡所八景
十一　つしま祭　十二　笑止
十三　唐人歌　十四　永代橋

十五　槍をどり　十六　馬かた
十七　小六　十八　高尾

一　飛鳥川

戀といふ字はむくつけだにも、大宮人はいとまなき戀路、櫻かざして木の下蔭の露に、濡れにぞぬれし我が小夜衣、夕べ〳〵はあすか川のふち瀬、底は淺いぞ濃いむらさきよ、よしやこがるゝ澤邊の花に、煙くらべん來いよ〳〵螢、薫りをしたふ芝蘭のもとに、狐にはめなでその鷄の、みだるゝ比は早きぬ〴〵の、別れになれば花も雪も、紅葉のあはれ冬野の契りまで、變らぬ色をえ。

おなじく

風もなつかし夕べの空に、袖の薫りもまださめやらぬ、深きえにしのかたさまなれど、あだしこの身もまゝには、ならぬ、月日ほどへて昔のわけを、問ふは嬉しやさりとは命、いつそ露とも消えなば消えよ、心までくる涙の川に、流れはかなきうき世の勤め、染むもそまぬも枕の夢よ、覺めて朝のつらさを知らば、たとひ丹波のしないた鬼も、さうしたことの寄るせはなくと、せめて便りを松の葉の、變らぬ色をえ。

二　高瀬舟

由緣もとめて若紫の、草の籬を今來て見れば、花か紅葉かそのおもかげの、見えつ隱れつ木の間の月の、浮氣ならねど身は高瀬ぶね、こがれこがれて、燒くや藻鹽の夕けぶり、この身をこがすえ。

おなじく

君が心を引かるゝ程は、引き見んとは思へども、定めなの世や飛鳥川の淵瀬、ふかき思ひを色のひと葉にのせて、浮きぬ沈みぬおもはく、馬はあれども君を思へばかちぢ、さはいひながら、戀の重荷を何に載せてやらうぞ、こゝを木幡の里になしてほしやの、心身にも餘つた。

三　有明

世の中の〳〵、嬉しきうちに、まさりてつらき逢ふ夜の床よ、我も妹背は有明つぐる、鷄の鳴く音にきぬ〴〵の、袖の白玉なにぞと問はゞ、露と答へて消えぬ命をさ、思ひに沈む。

四　芦分舟

難波の浦に、よしや思はじ芦分舟の、こがれ〳〵て逢ふ夜もつらや、せめて別れの鐘ばかりかや、未だ名殘も盡きせぬ夜半に、鷄もつらいはつげ渡る、ういこの〳〵憂きわかれ、後の朝の文枕、しばしな傳へん荻の葉のそよとばかりの便りもないか、恨みなけけどつれなや餘所に、移る色香と微塵も知らで、たゞ變らじと祈る心はいつまで艸の、いつも苦しき身を憂き床に夜日とねもせで、迷うたえ。

五　深山路

馴るゝみやまぢ名もよし野川、ふかく絶えせぬ思ひの憂さを、いはで重ぬる八重山吹の、夏は卯の花咲きそめしより、軒の橘かをるもゆかし、初音たかまの山ほとゝぎす、浮名高はし戀ひわたる身は、その東路のひたち帶、結ぶ契りのえにしはながと、秋は來てしも宮城野の風、落つるに脆き花桐の、戀の道芝なほ分けがたき、露の夕霧立ち迷ひつゝ、冬野に强き柏木も、獨りこがるゝ色をえ。

六　玉の緒

なんぼ仰しやつても、逢はぬつらさを見てだもれ、ほんに添ふ身ならば、斯うした勤めはせまいに、もはや玉の緒たゆるばかりのうき枕、いや待ち久しひと夜さへ、餘所にゐられぬわが思ひ。

おなじく

なんぼ仰しやつても、譯のわるいが氣のどく、ほんに添ふ身ならば、斯うしたことをしてくれそ、もはや勤めもまゝな上からおれしだい、いや待てしばし我が心、思ひ待ち〳〵まち明かす。

七　加賀ぶし

勤めもの憂きひと筋ならば、疾くも消えなん露の身の、日かけしのぶの夜る〳〵人に、逢ふをつとめの命かな。

おなじく

いつしいづれの日に立ちそめて、いなさ細江のみをづくし、朽ちも果てなば浮名もともに、同じ濱名の橋柱。

おなじく

よしやわざくれ身は朝顔の、日影まつ間の花の色、恨みられしも恨みし人も、ともに消えゆく野邊の露。

おなじく

あだしこの身を煙となさば、とても淺茅の里近く、小夜のころもに香はとゞまりてせめて見ぬ世のかたみとも。

おなじく

わきてつれなき人ゆゑわれは、暮らす日影の朝顔か、露は袂におき餘れども、かひも涙の身ぞつらき。

おなじく

獨りとゞめて恨みしかひも、元の水なき隅田川、さても流れに身はくれくれて、今は藻屑の捨小舟。

八　わきて節

花と雪とは、どれが吉野のながめやら、どうやらかうやらわきて。色分ちなくどれが吉野のながめやら、花やら雪やら分きて。

おなじく

荻と萩とは、どれが露やら嵐やら、どうやらかうやらわきて。待つ夜の袖はどれが露やら涙やら、どうやらかうやらわきて。

おなじく

須磨と明石は、どれが月やら名所やら、どうやらかうやら分きて。色わかちなく、どれが月やら名所やら、どうやらかうやら分きて。

おなじく

あだし情は、いづれはかなき思ひ川、どうやらかうやらわきて。逢瀨もあらで、何れはかなき思ひ川、どうやらかうやら分きて。

おなじく

恨み寢る夜は、夢もつきなく又恨み、どうやらかうやら明けて。見しおもかけの、いづれ夢やら現やら、どうやらかうやら明けて。

九　伊香保節

花になりたや、ほんほとんど、どつこいしよ、よし〳〵よし〳〵吉野の花に、いよしもほとんどえ、咲いて亂れて、ほんほとんど、どつこいしよ、つゆ〳〵櫻の下露、落ちて、いよしもほとんどえ。

おなじく

夏は垣根の、ほんほの〳〵、あやなしや、卯の花しらぐ〵明けても、いかに訪ひ來ぬほとゝぎす、かた日夕だつ、あとすゞしき小村雨、梢にひぐらし蟬のね、いづれ夕べはたゞならぬ。

おなじく

忍ぶ涙の洩れては、あやにくや、いつ〳〵〳〵〳〵いつしか、浮名立田の夕しぐれ、濡れて小鹿の妻あはれや、妻戀ひて、よる〳〵さりとは夜すがら、獨りいよしもなき明かす。

おなじく

月になれ〳〵、果敢なし幾たびか、袂のつゆ〳〵乾かでものや思ふと誓しさへ、須磨のうき寢をとへことと、友千鳥、うら〳〵〳〵〳〵定めぬ、鳴く音あはれや夜も

すがら。

十　長崎ぶし

しんきなしめそ、木綿車掛けて廻り逢ふよる〳〵は、そりや逢ふよる〳〵は、掛けてめぐり逢ふよるばかり、そりや逢ふ。

おなじく

こがれ〳〵て、もろこし船の袖に湊のよる〳〵は、そりや逢ふよる〳〵は、袖に湊のよるばかり、そりや逢ふ。

おなじく

桐の一葉の、なほそれよりも脆き涙の露つゆよ、そりや逢ふ露つゆよ、もろき涙のつゆばかり、そりや逢ふ。

十一　のんやほぶし

晩にござらば、肥後鉈さいてござれ〳〵、晩にや梅の木の枝おろそ、のんやほのんやほ〳〵、肥後鉈さいてござれ、晩にや梅の木の枝おろそ、のんやほ。

おなじく

戀は憂きもの、のんやほ、待つ宵きぬ〴〵つらや、つらい逢ふ夜ながらも我が涙、のんやほ〳〵〳〵、待つ宵きぬ〴〵つらい〳〵、逢ふ夜ながらも我が涙、のんやほ。

おなじく

春はござらば、のんやほ、三吉野よしのへござれ〳〵、いつもながらの山櫻、のんやほ〳〵〳〵、みよし野吉野へござれ〳〵、いつもながらの山ざくら、のんやほ。

おなじく

思ひかけては、のんやほ、雲井のとりの一こゑ〳〵、閨の伽羅の香むつ言に、のんやほ〳〵〳〵、雲井の鳥の一こゑ、閨のきやらの香むつ言よ、のんやほ。

おなじく

いつの有明、のんやほ、袖ふり分れしつらさに〳〵、もはや淺茅も背に過ぎた、のんやほ〳〵〳〵、袖振りわかれしつらさに〳〵、最早淺茅も背に過ぎた、のんやほ。

おなじく

戀はあやにくさつき雨、降り來るなみだ〳〵〳〵、せめて訪へかしほと〻ぎす、憂き身をさみだれ〳〵、降り來るなみだ〳〵、せめて訪へかしほと〻ぎす、憂身を。

おなじく

夕べ〳〵は、つねさへ、ものわびしきにわびし〳〵、千々のあはれは妻戀ふ鹿の音たそがれ〳〵、ものわびしきにわびし〳〵、千々のあはれは妻こふ鹿の音。

十二　くひな

水鷄の鳥の夜すがらたゝきあけて置いてさ、はやさみだれ、雨に色增すあやめのことわいの〳〵、山ほと〻ぎすまたの東雲もないものか何ぞのやうに待つ宵〳〵。

おなじく

おほろの月を賴みに夜もすがらながめた、はや春かぜ、薫りもて來る軒端の梅わいの〳〵、あだ名や立たん、かはす手枕もないものか何ぞのやうにうたゝ寢〳〵。

おなじく

海人の刈藻に住む蟲のわれからと歎いた、はや初しぐれ尾花穗に出で餘りの色わいの〳〵、散り殘せかし、露の名殘もないものか何ぞのやうに秋かぜ〳〵。

おなじく

寢覺ならひし槇の屋にとほぞを奥にさ、はや木がらし、落葉降りしく枯野の色わいの〳〵、訪へかし人の、雪の朝もないものか何ぞのやうに冬がれ〳〵。

おなじく

忍びかねたる人目の關もりを歎いた、はや憂き涙、袖や

朽ちなんひとり寢の夢わいの、轉寢の夢わいの、絶えなば絶えよ、とても逢ふ夜の有るものか何ぞのやうに玉の緒〳〵。

ちらし

ひとへ重ねの契りは薄し、千代も長かれ絲ざくら、そりやさうさ、結ぶえにしのいと櫻、そりやさうさ、江戸やつさ、ういて來た。

十三　花笠

梅のかをりの花笠うれし、ほんにゆかし、月影殘りてさりとはあけぼの、遠山ゆしきの雪も少しは白妙に、霞のまより、此處はうぐひすひと聲を。

おなじく

吾妻からより花都うれし、しんぞうれし、つれ三味合ひ唄さりとは庄五郎も、一つたのむぞ半太土佐ぶし淨瑠璃を、まん〳〵段も聞かまほし、さても揃うた連れ唄。

おなじく

けさの別れの鶏の音つらや、ほんにつらや、亂るる〳〵さりとは亂るゝ、ねん〳〵亂るゝ、みだれみだるゝ黑髪のゆひがひなしや、また逢瀬をいつの夜。

おなじく

秋の雲間の月影ゆかし、しんぞゆかし、籬の蟲のね枕に爭ふ曉しのゝめ、果ては明けゆく閨のひま、飽かでも別るゝ、さすが形見のおもはゆ。

十四　舟橋

佐野のいよこの舟ばし、さのゝふな橋かけてなほ、思ひいよこの渡るを知せたや。

おなじく

春の色香の名殘も、藤のたそがれ物わびし、夏は卯の花さみだれ、せめて訪へかしほとゝぎす。

おなじく

志賀の唐崎つれなく、餘所にのみきく小夜しぐれ、思ひかけては常盤の、松も許さぬ蔦もみぢ。

おなじく

秋の色よき錦を、秋の錦を誰が織りて、染めも色よくそめたよ、染めもそめたよ小夜しぐれ。

おなじく

しぐれ〳〵に濡れ〳〵て、濡れて妻戀ふ鹿の聲、色の道とて優しや、しかも浮名のたつ田山。

おなじく

よしや浮世の中にも、人の上にも掛けてだに、何かいよしも心のままの、眞間のつぎ橋まゝならぬ。

おなじく

人のいよこの上にも掛けてみよ、人の上にもかけて見よ眞間のいよこのつぎ橋、まゝのつぎ橋まゝならぬ。

十五　朝妻船

あだしあだ波、よせてはかへる浪、朝づまぶねの淺ましや、あゝまたの日はたれに契りをかはして色を、かはしていろを、枕はづかし、僞りがちなる我が床の山、よしそれとても世の中。

おなじく

うき寢つらさの待乳の山の風、夕越え暮れてさゝ小舟、あゝ定めなや床のうら波、ともなき千どり〳〵、絶えぬ思ひに、月日をおくるもあだ人ごゝろ、よし逢ふまでの移り香。

おなじく

あだしあだなる身は憂きまくら、ならはぬ程の床の露、あゝ幾たびか袖に餘れる涙の色を、あゝ袂の色を、蜂の

もみぢ葉、獨りこがれて枕の涙、あはれと人の訪へかし。

おなじく

うさを語らん友さへなくて、慰めかねつ我が心、あゝ現なや過ぎしつたへの、その水ぐきの黑みし跡を、見るにつらさの、いや增す涙は誰れ故ぬるゝ、あはれと袖もとへかし。

十六　うかれ女

花は吉野よ紅葉は高尾　松は唐崎霞は外山、いつも常盤のふりはさんさしほらしや、兎に角おもはるゝ。

おなじく

八千代ふるともかはらぬ色よ、松に藤枝のそのおもかげを、見るに一しほにしをさんしうしほらしや、兎に角思はるゝ。

十七　しがらみ

絶えて逢はずとふみをば通へ、文は妹背の〳〵中となる橋となる、よひ〳〵濡るゝ我が袂。

おなじく

あひはちかうて逢はせはせいで、千賀の鹽がま〳〵身をこがす、身をこがす、よひ〳〵濡るゝ我が袂。

おなじく

かりの寢衣に藁物すれば、よしやわざくれ〳〵色となる戀となる、きぬぐ〳〵濡るゝ我が袂。

おなじく

絶えぬ思ひと人には告げよ、今は難波の〳〵みをづくし、身を盡す、よひ〳〵ぬるゝ我が袂。

おなじく

朽ちてかひなし名にのみ立ちて、うき身長柄の橋ばしらはし柱、よひ〳〵ぬるゝ我が袂。

十八　ふじから

あれて優しき伏見の里の、雪にゆき降る吳竹の折れさうな、雪に雪に雪ふる吳竹のをれさうな。

おなじく

刈らば疾くかれ淀野の眞菰、かれば月影が下にすむ底にすむ、刈れば〳〵月影が下にすむ底にすむ。

十九　しほや

けふと暮してあすかの川になうさ、いく夜なん〳〵なじみもかはれば、かはる世の定めなや。

おなじく

龍田山みちたどりて見ればなうさ、鹿のなん〳〵鳴く音は可愛や、妻ゆゑに身をやつす。

二十　梅がえ

庭の梅がえ命の君に、何が惜かろぞ花ひとへ咲いたの、さいた〳〵〳〵、何がをしかろぞ花ひとへ咲いたの。

おなじく

さつきさみだれ涙の雨の、降るにつけてもなほゆかし、獨り寢かはす枕たまくら、降るにつけてもなほゆかし獨り寢。

廿一　戀かせ

戀ぐさのたぐひならば、葛は恨みの思ひ草、秋の夜なればなほゆかしか夜と、逢ふ夜の空を歎いた、何ゆゑに身を戀風と、尾花そよ〳〵袖の香。

廿二　まがき

秋の籬に咲いたは小萩、露の淺茅生つゆ白露ぬれた〳〵牡鹿妻戀ふ鳴く音はさ、あゝ鳴くねはさ〳〵、いとゞ身

にしむ獨り寢〳〵、悲しさまさる袖は乾かぬ、この身のつらさえ。

首尾なし更けては障り、四つをかぎりの夜の關。

おなじく

廿三　龍田

秋のたつ田に流るゝもみぢが染めてある〳〵、有明の月もろともに、照るや散るや濃きくれなゐの川波、さだめて〳〵、色より色に移るならば、戀ひ渡るたよりとの、さりとは。

おなじく

後の朝に名殘の袂は濡れてある〳〵、いかなれば身をうき里に、行くや來るや、いつまで草のいつまで、定めて〳〵、きん氣のどくなる障りもあらば、はかなき我れが通ひ路、さりとは。

廿四　櫛田

霜にさまよひ時雨に通ふ、袖の落葉も涙に濡るる、野路の棚橋こひ渡る身は、何につけても物憂きわざよ、宵はいく夜かはせし情の末も、いかに逢瀬のなか中川に、ほんに洩らさぬ心の底を、くめの岩はし絶えても人に、戀ひやわたらん思ひをかけて、いつを限りに身を投げん。

おなじく

よしや賴まじあだ人ごころ、一重ばかりか八重山吹の、たんと馴染のちかひもあるに、移りやすさの花色衣、問へど答へぬ梔子わらや、われは木幡のかちはだし。

おなじく

草のなかにも物思ひ草、誰れに恨みは眞葛が原や、とんとこの身を捨てぐさにして、朽ちも果てなばそれかれそれよ、緣は朝顏淺くとまゝよ、せめて逢瀬の深見ぐさ。

廿五　もろこし

花に戯れ又ほとゝぎす、月に愛でぬる時しもあるに、年の名殘と降る白雪と、いづれあはれさりとはえ、移るも浮世え、長きためしの松さへも朽つとの、さては千とせもひと夜の夢かえ、はかなのこの身え。

おなじく

憂いぞつらいぞこの里なれて、染むもそまぬも逢はねばならぬ、いつか思ひの八重霧はれて、せめて夢になりともえ、譯あるかたえ、まゝにならぬは誰が身にもありとの、それを便りに憂き身をおくるえ、この年月をえ。

廿六　有馬

露になりたや袂の露に、消えぬ憂き身のかこちぐさ、何を種とか我が思ひ。

おなじく

星になりたや七夜の星に、橋は紅葉の色ふかく、掛けて願ひの絲の緣。

廿七　しら菊

難波津のみじかい芦の節の間を、濡らさるゝ身の朽ち果てず、さてもうつゝに移ろひくれて、夢も見ようや見まいやら、半ば咲いたか白ぎくの、比になれ〳〵尾花も亂れけふはふり行く時雨の雲よ、しんぞ八幡わすられぬ、袖は別れの露なみだ。

廿八　よさく

獨りこがるゝ心のいろ〳〵がよひ、いはで信夫のやま山吹がよひ、露の玉垣卯の花襲ね、はれぬ思ひをさみだれに、颯とかをれあや菖蒲、さりとは假寢の床の夢みじか夜の夏の夜に、東雲ことゝふ山ほとゝぎす、浮名に立ちし、せめて知らせんこのつらさ、なほしも乾かぬ我が袖に、颯と降れむら村雨。

廿九　捨小船

まがきながらの御見はつらや、人目しのべは思はくばか